きんいろモザイク ～THE GOLDEN STORY～

legends

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

５人の少女達がほのぼのとした日々を送るきんいろの毎日。そんな日常に、もしも一人の少年が招かれたら……？　そんな物語。

注意!!　これはきんいろモザイクの二次小説であり、作者の妄想の一部でもあります。きんいろモザイクに男はいらねぇぇぇ!!　や、不快に思われた方はブラウザバックを推奨します。それ以外の方はお菓子を片手にごゆるりと閲覧していってください。

２０１５年１２月３０日：タグ一部変更致しました。

２０１８年６月１５日：タイトルを「きんいろモザイク　～ＴＨＥ　ＡＮＯＴＨＥＲ　ＳＴＯＲＹ～」から「きんいろモザイク　～ＴＨＥ　ＧＯＬＤＥＮ　ＳＴＯＲＹ～」に

変更致しました。

目次

番外編
Ｅｐｉｓｏｄｅ　ｅｘｔｒａ　休日の邂逅 ―― 1
本編
Ｅｐｉｓｏｄｅ１　プロローグ ―― 9
Ｅｐｉｓｏｄｅ２　個性豊かな少女達 ―― 15
Ｅｐｉｓｏｄｅ３　ツッコミ所が満載 ―― 24
Ｅｐｉｓｏｄｅ４　個人的なイメージ ―― 34
Ｅｐｉｓｏｄｅ５　もう一人の金髪少女 ―― 48
Ｅｐｉｓｏｄｅ６　過去の話を少々……。 ―― 66
Ｅｐｉｓｏｄｅ７　カオス空間 ―― 76
Ｅｐｉｓｏｄｅ８　休日の過ごし方？ ―― 87
前編
Ｅｐｉｓｏｄｅ９　休日の過ごし方？ ―― 104
後編
Ｅｐｉｓｏｄｅ１０　姉妹とは？ ―― 125
Ｅｐｉｓｏｄｅ１１　テストのお時間

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２　学校祭　前編　162
Ｅｐｉｓｏｄｅ１３　学校祭　後編　177
Ｅｐｉｓｏｄｅ１４　お泊まり会……それは地獄の始まり？　198
Ｅｐｉｓｏｄｅ１５　先生と占い　224
Ｅｐｉｓｏｄｅ１６　女子に体重を聞くのはご法度　248

番外編

Ｅｐｉｓｏｄｅ ｅｘｔｒａ 休日の邂逅

「……暇」

休日の昼の一時、不意に口から一言出る。

俺は現在、絶賛フリーな状態だ。何故なら、朝は普段通りに起き、そのまま課題をやり済ませた後、昼食の準備をして姉さんと一緒に昼飯を食べた。その後、食器を洗い終わった次第、今に至る訳だ。

姉さんは勇さんと勉強しに行って、更にはカレンは何やら『ちょっと旅に行ってくるデース！』とか言って、二人は家におらず、話し相手もいない。べ、別に友達いない訳じゃないからね！

だから精々スマホでゲームするか、もしくは静かに読書をするかどちらかだ。別にそのどちらかで時間を過ごすのも構わないのだが……

「あ、久し振りに〝あそこ〟行くか」

不意に思い立った。よくよく考えれば今言った場所でまったりと読書をすればいいじゃないか。そういう所でゆっくりと時間を過ごすのも悪くない。

そうと考えたら思い立ったが吉日、財布と鞄を持ってその場所へと向かった。

☆☆☆

「……着いた」

家から出て約数十分後、目的の場所へと辿り着いた。店の名前が、喫茶店『ラビットハウス』と言う。

実は何気に、俺はここの常連だったりする。きっかけはぶらりと良い喫茶店を無いかと探している時、木組みの家と石畳の街が広がる地域で偶然この店に目が留まった。

以前ここで飲んだコーヒーが美味かったんだよなー。

外見は外国みたいな洋風建築で、店の前にはカップを持ったうさぎのような看板がある。

「ちわーす」

シックな感じの扉を開け、カランコロンと小気味良い音を立てる。そしていざ入ってみると、何処か質素だけど風味がある良い店だと毎回思う。

「あ、いらっしゃいませー！」
店のカウンターに立っていたピンクベージュ色の髪の女の子がこちらに気付き、笑顔で対応してくれた。
取りあえず、適当に空いている席に座ると、先程の少女がメニュー表を渡してくる。
「健君来てくれたんだね、ありがとー」
「なんの」
ニコニコと笑う少女に、俺も笑みを返す。
彼女はこのラビットハウスでバイトをしているらしく、名前をココアと言う。俺と同じく高校一年生らしい。
え？　何でお互いの名前を知っているのかって？　そりゃあ何度も来ていつの間にか常連になってたから互いの名前を知っちゃったんだよ！
……といった事はさて置いて、メニュー表を見る。様々なバリエーションのコーヒーがあって選ぶのがちょっと楽しい。
「取りあえず、アイスカフェオレを一つお願いできるかな？」
「かしこまりましたー」
俺がココアに注文すると、そう言いながらカウンターへと戻っていく。今日はたまたまカフェオレが飲みたい気分だった。

別にコーヒーが飲めない訳ではないからな？　ってさっきから誰に対して言ってんだ俺は……。

彼女が戻って行ったカウンターには、ココアの他に黒髪ツインテールの少女と青髪ロングの少女――――順番にリゼとチノだったような気が。毎回チノの頭の上に載せてる物体の正体が気になる……

取りあえず待っている間が暇なので、持ってきた本を鞄から取り出し、読む。

「あの～、それは、何の本でしょうか？」

「え？」

いざ読もうとすると、俺の後ろの席に座っていた女性――――傍から見て、椅子を除けば背中合わせのような形で話し掛けてきた。

い、いつの間に……結構真面目に気付かなかったぞ。

振り返ると、眼鏡をかけた髪がベージュ色の女性が此方を横目で窺っていた。逆に女性の方は万年筆を持ち、机の上には原稿用紙がある。小説家だろうか？

「えっと、推理小説ですけど……」

取りあえずそう答えておく。俺は推理小説だけじゃなくて、他の本も読んだりする。だからといって文学少年という訳でもないんだけど。

「そうでしたか。私、小説を書いているんですよ。閃きを求めて……」

「という事は、小説家さんですか？」
「はい」
おっとりとした感じで話す女性。どうやら俺の目は一応狂ってなかったらしい。
しかし、〝閃きを求めて〟、というのは放浪してるみたいな言い方だな。
「小説家ですか、凄いですね。じゃあペンネームとかあるんですか？」
「はい、〝青山ブルーマウンテン〟と言います」
……不思議な名前だ……
「今、不思議な名前だと思いました？」
「えっ、いや、てか何でそう思ったんですか？」
「顔に出てました」
「……マジっすか」
てっきり心読まれたのかと。どんな顔してたんだよ俺。
と、俺が自己落胆してた時だった。
「チノちゃん大変だよ！」
カウンター付近でココアの声が響く。何があったんだ？
「ミルクが足りなくなっちゃった！」
「なんでやねん！」

ハッ！　ついいつものノリでツッコんじまった。しかも関西弁風で。
てか、ミルクって喫茶店で確実に必要だろうよ！　それが足りなくなるって一体何したらそうなるんだよ！
「まさか、ラテアート作りすぎてそうなったんじゃ……」
「多分そうだろうな……」
チノとリゼが冷や汗を掻きながら推測していた。
って、いやそうじゃなくて！　冷静に考えるんじゃなくて誰かツッコんであげましょうよ！　まだ客が俺と青山さん二人だから良いものの、これ以上だったら結構やばかったぞ！
しかもラテアートって……明らかに仕事から外れた趣味だよね!?
「微笑ましいですね～」
「いや何和んでるんですか!?　そこは注意とかをですね……！」
青山さんが何故か和んでいた。この人もしかして天然？
「いやあ、リゼちゃんみたいに戦車を書こうとしたらちょっと上手くいかなくって……」
「戦車!?　何でラテアートで戦車書こうとするの!?　てか書いた方も書いたほうだよ!?」
随分大層な事をしようとしたなオイ！

――――更に。

『皆！　大変よ！』

「千夜ちゃん!?」

突然扉をバーンと開けて和服姿の少女が入ってきた。

いや、何で客が居るのにさも当然のように入ってくるの!?　いつもこういうノリなのか!?

「ど、どうしたんだ！」

「試作品のコーヒーあんみつをシャロちゃんに食べて貰ったら酔っちゃった！」

「あへぇ～」

千夜と呼ばれた和服少女が制服姿の金髪少女を引き連れ、明らかに酔ってますって言った感じの表情。

もうやだこの空間……

「千夜！　シャロはカフェインで酔うはずだったろ！」

おおっ、リゼが代わりのツッコミを入れてくれた。あなたが神か。いや癒しか。

「あっ、素で忘れてたわね」

「テヘペロしながら言うな！」

ワタシもう、ツッコミし過ぎて息が荒くなってるぞ。

「そんなにツッコんで疲れませんか？」
「疲れますよ！　ていうか見てたなら少しぐらい助けて下さいよ！」
「私、ツッコミの才能は無いので……」
「そういう問題!?」
終いには、青山さんの言葉にすらツッコミを入れる始末だった。

結局その後、無事に注文した品はくれたものの、落ち着いて本は読めないのだった。
休日が、疲れた日になってしまった……

本編
Ｅｐｉｓｏｄｅｌ　プロローグ

『大宮忍って言います。――君って呼んでいいですか？』
『ああ、構わないよ』
……なんだ、この随分と懐かしい記憶は……。
今、話しかけてきたのは天然でおかっぱ頭の少女。
『お、お気遣いなく！』
真面目だが、人見知りでおっちょこちょいな少女。
『なあ、――。この部分教えてくれない？』
『お前な……そこは前に教えたばっかりだろ……』
明るくてムードメーカー的な存在の少女。
それが俺――八坂（やさか）健（けん）と彼女達の出会いだった。

☆☆☆

「ん……」

闇の中へ沈んでいた意識を覚醒させる。目を開けるとそこには天井が。まあそりゃそうか。自分の家だもんな。

それにしても、本当に懐かしい頃の夢を見たな～。俺が中学の時の夢を見るなんて、何か起こりそうな予感。

そんな謎の期待を抱いていた俺だったが、今頃になって俺の腹の部分が何か重い物が乗っかっているような感覚に気がついた。

これは一体……？　と、首だけを上げてその正体を知ろうと確かめたら……。

「やっほー。弟クン」

「ッ!?　ね、姉さん！」

そこにはセーラー服を着ており、黒いショートカットの少女……もとい、俺の姉である八坂（やさか）瑠美（るみ）が俺の上に跨（またが）っていた。

「あのー、姉さん？　なんで俺の上に跨ってるの？」

「えー？　だってぇ、姉弟っていえばこういうシチュエーションをするもんじゃないの？」

「しねぇよ!? 姉弟でこんなところ見つかったら色んなものが壊れるわ!?」
顎に指を添えながらあっけらかんと言う姉さん。それに対し猛反発する俺。
「いいじゃない。ほらその、姉弟のスキンシップってよくいうでしょ? これもその内の一つだという事で……」
「いや認めねぇよ! 普通姉弟のスキンシップでこんな事はしないからね!?」
「いっその事、ここで襲ってもいいかもね……ふふ」
「よくねぇよ!? てか、いい加減俺の上から降りろよ!」
俺は何やら邪な考えをし出した姉に対し、勢いよく起き上がり手で払いのける。その際、「あうん」とか変な声を出したのはスルーする。
「全く、朝飯なら作るから一々寝床に来ないでくれよ……」
「あ、分かっちゃった?」
「何度もやられてる内に覚えるっつーの。ほら、着替えるから部屋から出ていった出ていった」
「いや、確かに朝ご飯もそうだけど、そのついでに我が弟の雄姿を確かめたいと思ってな……」
「何が雄姿だよ!?」
俺はその場に留まろうとする姉さんを自室の外へつまみ出す。

「もう、健は反抗期なんだから～……」
そう言いながら階段を降りていく足音が聞こえたため、諦めたようだ。
「全く、姉さんは相変わらずだな……」
つい溜め息を吐く俺。そう、姉さんは偶に……ではなく、かなりの頻度であんな事をやってくる。
よく分からんが所謂ブラコンって奴かな？　朝夜隙あらば忍び込み、襲い掛かってきた出来事がありまくって困る。その度に追い返したけど。
でも、流石に貞操を姉に奪われるのはご勘弁願いたい。いくら年頃の男女だからといって血の繋がった姉弟となんて……。
……いかんいかん、これ以上はよそう。邪な考えは捨てよう。今日も学校があるんだし。
「時間は……七時二十分か。時間的に大丈夫だな」
時間を見て朝食を作るのに時間があると思った俺は着替え終わった後、下の階へと向かう。
リビングに着き、台所へと向かう。周りを見渡すと、姉さんがテーブルに座りながら携帯でポチポチと文字を打ちこんでいる姿が窺えた。
実は両親は朝からいない。母さん、父さんはお互い先生をしており、母は家庭科の教

員で、父は大学で教授をしている。
出勤はかなり早く、朝の七時前から家を出て夜遅くに帰ってくる。その間、母さんがダメなお姉ちゃんをよろしくーって言っている。……つまり朝夜は基本的に俺が姉の世話を任されたという事だ。
今もこうして自分と姉の分の朝食を作っている。まあこれぐらい別にいいんだけどね。
ちなみに昼食となる弁当は母さんが作っている。しかも二人分。……今でも本当に頭が上がらない。
そうして、料理を淡々と作り続けて十分後、滞りなく料理は出来た。今日は簡単にベーコンエッグとトースト、野菜サラダだ。
「いただきます」
二人で手を合わせた後、味を確認する。
うん、大丈夫だ、問題ない。料理の献立を考えられるように、母さんが家庭科を教えているためか俺に料理をいくつか教えてきた。
何故俺に、なのかというと姉がだらけているから……らしい。姉さんの威厳ェ……。
まあ何はともあれ、二人で他愛もない会話をしながら食事を続ける内に食べ終わり、片付ける。

「それじゃ、行ってくるわね」
「行ってらっしゃい、姉さん」
姉さんは食べ終わり次第、すぐに学校へ行った。一度食器を洗おうかと聞いてきたが、俺だけで大丈夫と言ってあるため一人でやっている。
これが俺の家の日常だ。何もおかしなところはなく、一般の家と変わらない。
食器も洗い終わり、時刻を見ると八時過ぎ。頃合いだな。学校は歩いたら十分ぐらいで着く距離にあるから。
「さて、じゃあ今日も張り切って行くか！」
いつもと変わらない、金色の日常の始まりだ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２　個性豊かな少女達

家を出て、道を歩いていると十分もしないで学校が見えてきた。

学校がある地域は比較的下町の雰囲気があるが、だからといって田舎っぽい雰囲気ではなく、辺りに住宅街がある場所にある。

俺はそんな高校に通いやすい場所に家があるため恵まれているように思える。

……まあ他の高校が、家から公共交通機関を使わないと行けないぐらいかなり遠い距離にあるからこの学校に選んだだけなんだけど。

そんな中、この高校に通う生徒達の人混みの中に紛れ、玄関口に着いた後、外靴を脱ぎ、中靴に履き替える。そして自分達の教室に行こうとした時――――。

「あのー……そこの方」

「ん？」

俺の後ろから声をかけられて振り返る。するとそこには、目が青色でウェーブがかったような金髪ツインテールの少女が佇んでいた。よく見るとツインテールの左側には黄色い箸と茶色い箸みたいなかんざし二本を挿していた。

帰国子女かな？　金髪の髪なんて学校では滅多に見ない。でも彼女はこの学校の制

服を着ていて、その上からピンク色のカーディガンを羽織っている。
「シノブという女の子を知りませんか？」
「え？　忍？」
俺がこの子の外見を眺めていると、彼女が質問してくる。その内容が忍という女の子を知らないか、と。
俺は別に知らない訳ではないんだが……。
「写真が無くて申し訳ないのですが、この人形にそっくりな子です」
そう言って金髪の女の子がぶら下げているバッグから取り出したのは一つのこけし。
「いや、人をこけしに例えるのは流石に失礼じゃないかと思えるんだけど」
思わず俺がそうツッコみを入れた直後――――。
『先生に聞きましょう！　その方が確実だわ』
『そんなに急がなくてもー』
『皆さん待ってください～』
玄関口から聞き覚えのある声がいくつか聞こえ、横を見る。
すると、紺色のセーターを着た黒髪のツインテールの女の子と、茶色いようなショートヘアの女の子がお互いに言い合いながら歩いてきて、彼女達の後ろから目と髪が黒いおかっぱ頭の少女が小走りで近づいてくるのが見えた。

「って、よう健！　お前早いな～」
「あら、健おはよう。しのが来るのが遅かったからこっちも遅れちゃったのよ」
「あれ？　健君。来るのがお早いですね～」
俺の存在に気付いた三人が俺に挨拶してくる。今挨拶した順番で言うと、茶色いショートヘアの女の子が猪熊陽子（いのくまようこ）、黒髪ツインテールの子が小路綾（こみちあや）、そしておかっぱ頭の少女が大宮忍（おおみやしのぶ）だ。
彼女達とは中学校から知り合っており、そのためこうやって普通に挨拶できている。
「おはよう。てか来るのが早いんじゃなくて、俺は寝坊なんかしないで普通に来たぞ？
大方忍が二度寝でもして遅れただけなんじゃないのか？」
俺がとりあえず予想として言葉を吐き捨てておく。すると忍は「ギク……」とわざわざ効果音紛いの声を口から漏らした。分かりやすい反応だなオイ。
「……シノブ？」
すると俺の体で後ろに強制的に隠された金髪の少女がひょこっと姿を現す。そういや忍に用があるって言ってたな。姿を隠して申し訳ない。
「ああ忍、どうやらこの子がお前に用事があr「シノブー!!　久しぶり！」うわっとぉ!?」
金髪の女の子が忍を眼中に捉えると、凄く喜びながら忍に勢いよく突っ込んでいった。その行動に俺はビクッと驚いてしまう。

「わあアリス！　本当に日本に来たんですね！」
忍も知っているような感じで、アリスという金髪の女の子に嬉しそうに話しかける。
そういや、忍は中学生の時一週間程イギリスに滞在していたって言ってたっけ。その時恐らくこの子の家にホームステイしていたんだろうと思う。
忍とアリスと名乗る少女はお互い楽しそうに話している。その様子を見ていた綾と陽子が疑問を浮かべていた。
「ねえ綾あれ……」
「陽子も気付いた？　あの子うちの制服を着ているわ。もしかして……」
二人も察しがついたんだろう。
だがそれよりも、俺は先程アリスが見せたこけしを見てしまってからは、見れば見るほど忍がこけしにしか見えなくなってしまったんだが……。
「失礼だなおい！」
「ていうかそっち!?」
二人がそれぞれに突っ込みを俺にぶつけてきた……って心を読まれた!?　それとも声に出てたか!?
その後、自分達のクラス担任である鳥丸（からすま）先生がアリスを職員室へと連れて行く形になった。でも、相変わらずだなぁ。個性豊かな少女達は今日も普段通りだ。

☆☆☆

教室へと行った後、俺はバッグに入った持ち物を整理していた。
ちなみに綾と陽子の席は窓際で、忍が先頭の列にいる。
それで俺はというと綾の隣となっている。まあ順番だからそうなったんだがね。
「おはよー皆ー」
先生が入ってきた。忍は「先生おはようございます！」と元気よく挨拶し、先生もそれに対し微笑み返す。本当忍は烏丸先生が好きなんだなと思う。
その時、何やら転校生を紹介したいと言う。誰なんだと思うと、教室の扉から入ってきたのは金髪のツインテールの女の子――――ってさっきの女の子じゃないか！　忍や綾や陽子も驚いていた表情をしている。
「初めまして、アリス・カータレットと申します。イギリスから編入してきました。よろしくお願いします」
「え――――――っ!?」

アリスが丁寧に挨拶すると、どうやらイギリスから編入してきた事に気付いていなかったらしく、驚きの声を上げる忍。
「気付くの遅！」
それに対して気付いていなかった彼女に突っ込む綾。
「手紙に書いたよ？」
「英語だったので……」
本場の英語。確かにそれは中々読めないな。
「そう思って二枚目はローマ字で書いたよ」
「ええっ？」
「綾……」
アリスが説明すると何故か綾が顔を青くし、ニヤニヤと小馬鹿にしたような顔をする陽子。
何があったんだ？　疑問に思った俺は陽子に小声で尋ねてみた。
「ああ、しのがアリスからエアメールをもらったんだよ。そしたらさ、しのの代わりに綾が読んだけど上手く読めなくてさー……うくくっ、見事にしのの期待を裏切ったな」
「う、うるさい陽子！」

笑いを堪えながら言う陽子に顔を真っ赤にしながら声を上げる綾。
そういう事だったのか。ローマ字の文があるにも関わらず、ガチで読んでしまって綾が混乱してしまったのか。それは何というおっちょこちょいなミスなんだ……。
何はともあれ、無事アリスの紹介も終わり、ホームルームも終わった所でアリスが彼女達の元へと歩いてきた。
「ごめんね、やっぱり日本語でかけばよかったねー」
「文字も書けるの？」
「すっごく遅いけど」
アリスがそう言うものの……。
「いや、書けるだけでも凄いと思うぞ。何せ、今も日本語上手く話せてるし」
「そ、そうかな……」
俺が褒めるように言うと、アリスがてへへと照れ臭く笑う。綾や陽子もうんうん、と頷いた。
「すごいですねー」
「しのは英語苦手だから、ホームステイの時は助かったんじゃない？」
「その頃はわたしも日本語、全く喋れなかったよ」
「……あれ？　それじゃあどうやってコミュニケーションを取ってたんだ？」

綾とアリスの会話を聞いていて、ふと気になった点があったので尋ねてみる。
「えっと、アリガトとコンニチハくらいなら喋れたから……」
「私もハローくらいなら」
そんなんでお互い話せてたの？　つーか、忍は仮にも中学生なのにそんなんで大丈夫だったのか？
と、皆で談笑し合っていると、一時間目の予鈴がなる。
「おっと、そろそろ授業だな」
「やったぁ、一時間目は英語です！」
「シノブ英語好きなの？」
「しのはからすちゃんが好きなんだよねー」
「カラス？」
どうやらアリスはさっき案内された先生が烏丸先生だと分からなかったらしく、疑問を浮かべる。と、そこへ綾が説明を加える。
「烏丸先生、このクラスの担任よ」
「メガネかけてる人？」
「そうです！　優しくて美人で、英語ペラペラで、大人で、ジャージで……。私あんな人になりたいです！」

「おい忍、ジャージはいいのかよ……」

とりあえず嬉しそうにしている忍を俺がジャージを含めるのかとツッコみを入れておく。

忍の天然発言に皆が苦笑いをした後、それぞれの席に着き授業の準備をする。

こうして、一時間目の授業が始まった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３　ツッコミ所が満載

烏丸先生による一時間目の授業。忍は他の授業となると睡魔に襲われて寝てしまうのに、英語の時間は真面目だ。

だからといって英語自体が出来る訳でもないのだが。

「本場の方が居ると緊張しますねー。ねえアリスさん、先生の英語はどうかしら？」

先生が一しきり黒板に字を書き、クラスの皆に説明した後、アリスを見据えて訊ねる。

「先生の英語は日本一です！」

「まあ、ありがとう」

（いや忍何で某スタンド漫画のドイツの大佐である台詞みたいに言ってんの!?　というかそこは世界一ィィィッ!!　だろ！　後先生もアリスに質問したのに呑気に答えないで!?）

俺は心の中で自分でも謎におかしい盛大なツッコミを突いてしまった。アリスは忍の返事によって先生の質問に答えられなかったのか「ぐぬぬ……」と唸っているみたいだった。

「ハイッ。Ｍｓ．ｋａｒａｓｕｍａ――――」

と、そこへ何やら意を決したアリスが挙手をしながら席から立ち上がった後、先生に向けて滅茶苦茶良い発音の英語で話した。

全く分からない訳ではないが、全て読み取れる程の読解力はなかった。

「まぁ、すごいわアリスさん。皆さん、アリスさんがお手本を見せてくれますよ」

「――――えっ？」

「何故言わせたし!?」

先生も驚いたのか、拍手をする。だが何故かアリスに説明を求めるように言わせるような物言いに、つい俺が声を上げる。意味が分かんないんですけど!?

ほら、アリスが恥ずかしがって頬を赤くなってるよー！　ていうか、クラスの皆も先生のノリに乗るなよ!?

その後、アリスがこの授業を仕切る形になって終了した。

☆☆☆

「やっぱ凄いなアリスは。本場の英語を話せるなんて。自慢できるんじゃないか？」

「えへへ……」

休み時間、俺はアリスに称賛の言葉を告げる。

一時はどうなるかと思ったが、何だかんだ今アリスが喜んでいたのでよしとしよう。

「しの、アリス、健、早く行こー」

「しの、筆箱は？」

「あ、忘れてましたー」

次の授業は移動教室なため、それぞれが教科書や筆記用具諸々を持って準備する。

てか忍、お前筆箱を持っていかずに授業行こうとしてたのか……。

「ねえケン、どうしてみんな「しの」って呼んでるの？」

アリスが俺に質問してくる。

「あれじゃないか？　忍のあだ名、要は仲良し者同士の呼び方だと思う」

「でもケンはシノブって呼んでるよ？」

「これは俺の昔からの呼び方だ。アリスも忍の事を自由にに呼んでいいんじゃないか？」

以前、俺が試しにしのって呼んだことがあるが、綾と陽子に白目で見られてしまった。

何故だ、男の俺じゃダメなのか……。

「あ、先生だー」

と、忍が俺達の前方で歩いている烏丸先生を見つけた。そこへ、アリスが先生の元へ駆け寄り呼びかける。

「先生！　わたしシノブの事、シノって呼びます！」

先生は一瞬アリスの言葉に呆然としていたが、すぐに笑顔になる。

「ま～、仲がいいのね～」

忍も次いで、ほんわかと温かい目でアリスを見つめた。微笑ましくなるのも分かる気がする。

「えっ!?　何この反応ー!!　さっきケンが忍のことを好きに呼んでいいって言われたから呼んだのに～！」

「ちょおま!?　別にそれ言わなくていいから！」

何故か俺に飛び火してしまった。単に助け船を出しただけなのに！

「まあ、八坂くんが助言してくれたのね～。偉い偉い」

「ちょっと先生!?　俺を子ども扱いしないで下さい！」

俺とアリスは同時に恥ずかしい思いをしてしまった。アリスの気持ちも分かった気がする。

☆☆☆

学校が終わって放課後、俺達は教室で皆と一緒に談笑していた。
「アリスもえー」
「えぇー」
と、突然陽子がアリスに抱き付いた。
「もえーって何？」
「さあ、何だろう。可愛すぎて燃えるって意味かと思ってた」
「馬鹿ねえ、字が違うわよ」
「……何か違わないかそれ!?」
綾が黒板に正しく「萌」えるって字を書こうとするが、草冠（くさかんむり）に非って書いたり、草冠（くさかんむり）に月を二つ書いたりしていて何か違っていた。
そこへ忍が黒板に正しく萌えーと書いて皆に説明する。
「これは当て字なんですよー」
「えっ、そうなの？」
「元はピューンみたいな効果音が語源です」

「いや、何の効果音だよそれ……」
「しかもあからさまな嘘をついてるし……」
忍のどうどうと胸を張った説明に俺と綾は同時に呆れる。
「可愛い物を見た時の効果音がこれです」
忍はもへ～と両手を握り合わせながら微笑む。
「なるほど、もへ～が変化してもえになったのか。誰が考えたんだ？」
「私です！」
「なるほど、じゃあどう考えても違うな。アリス、信じるなよ、そいつの言葉を！」
「はあ……」
ちなみに、今言った事は全部嘘なので皆さんは勘違いしないで下さい。

☆☆☆

「……ゲーセンでも行こうかな」
今日は休日。とりあえず朝早く起きて宿題をやり終え、やる事がなくなり暇になった

ので、ふと呟いた。

ちなみに、姉さんは忍のお姉さんでもある大宮（おおみや）　勇（いさみ）さんと一緒に遊びに出掛けている。

勇さんは俺が一度忍の家に遊びに行った時があるが、その時は忍と同じようにからかわれた思い出がある。俺って年上にからかわれる傾向にあるのかな……。

まあそれはいいとして、俺はショルダーバッグを肩に担ぎながら私服姿のまま家を出るとする。

姉さんがいない時は基本暇なので一人で外出することが多い。弁当も作らなくていいし。

とりあえず近所のゲーセンへと向かう。こう見えても俺はＵＦＯキャッチャーが得意だ。ちょうど目の前にピ〇チュウの人形があるから小銭を入れて始めようとした所。

「あー、健じゃないかー。何やってんのー？」

「って陽子!?　それに皆まで……」

隣の方から声が聞こえたかと思い振り向くと、陽子だけじゃなく綾や忍やアリスもいる。女子達で買い物に来てたのかな。

だが、その中で俺は一際目立つものがあったから尋ねる事にした。

「忍、その恰好は一体……」

俺が気になったものというのは、忍の恰好の事。現在の彼女の外見はというと、ゴスロリなのかメイドなのか私服なのか訳分からない衣装を身に纏っていたのだ。
「健君は似合うと思いますか？」
「いや、似合うとか似合わないとかそれ以前の問題なんだが……。何その恰好？　コスプレか？」
「違いますよ～。これはですね、外国人の格好なんです！」
「分からんわ!!」
ざっくりと言う忍だが、普通に聞いても分かんないと思うぞ！
「それより、健はどうしてゲーセンに来たのかしら？」
「姉さんが勇さんと遊びに行ってるからさ。俺は暇だったから来たんだよ」
「ああ、勇姉（いさ）と瑠美（るみ）姉が……」
あの二人なら納得……と陽子がうんうんと頷く。まあ、姉さんが親友と自負してるぐらいだしな。
「ねえねえケン」
「ん？　どうしたアリス？」
アリスが俺の服の裾をクイクイッと引っ張ってきたため振り返ると、キャッチャーのガラスにくっつきながらピカ○ユウ人形を見つめているアリスの姿が。

「あれ、可愛いね」
「……もしかして、欲しいのか？」
「え!?　いや、そんな事は……ないよ？」
　両手を振りながら焦りの表情を見せるアリスだが、人形に目を泳がせている。分かりやすい反応だな。
「遠慮しなくていい。もしこういうのが欲しいと思うなら取ってあげるから」
「……いいの？」
「健は元々こういうのが得意なんだよなー。健、私たちの分も取ってー？」
「お前は俺の財布を空にさせる気か!?」
　陽子がとんでもないことを言ってくる。まだ学生なんだからそういう余裕はありません！
　ま、アリス一人のために取るぐらいの金はあるからいいけどな。
　そんな訳で始めるとする。まず百円を入れてアームを横に動かし、一直線上にある人形の所まで止める。続けて奥の方へ向けてアームを再び動かす。そして、人形の少し後ろ側まで動かしてからアームを止めた。そのままアームは見事人形を上手く掴み、穴の所まで落ちずに運び、何事もなく一発で手に入れるのに成功した。
「わー」パチパチ

「わあ～……ありがとう！」
忍が拍手し、アリスがお礼を言ってくれる。
「どういたしまして。ふっ……まだまだ俺の腕は衰えていないな」
地味だけどこの特技のお陰ですぐ取れるし金の無駄遣いをしなくて済むし、ある意味一石二鳥だな。
「私たちの分は……」
「だから無いって……」
陽子は相変わらずだな。
その後、折角だからと彼女達の買い物に付き合う事になった。途中、ペンの補充をしておこうと色ペンを何本か買おうとした所、綾の指が当たってそっぽを向かれたり、忍が外国人旅行客であろう人達に訊ねてみたが、分からずじまいで結局アリスを頼ることになったことがあったりして一日が終了した。
ツッコミ所が満載な一日だったな。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４　個人的なイメージ

「陽子ちゃんって髪染めてます？」
波瀾万丈のホリデイの翌日、学校でいつも通り席に女子四人と男子一人が談笑し合っていると、不意に忍が陽子に質問を訊ねた。
「いや、これ地毛だよ。校則違反になるし……」
まあ茶色に近い赤色の髪だからな。そう思うのも仕方のない事だと思うのだが。
ちなみに、唯一黒髪なのが忍、綾、俺という感じになっている。
「私卒業したら、染めようかなって思ってるんですー」
「へー、どんな色にするんだよ？」
俺が忍に聞いてみると、返答は予想の遥か上を行くものだった。
「金色です」
「!!」
「……」
綾と陽子は驚愕しながら絶句。質問した俺も開いた口が塞がらなくなってしまった。
「……えーと、忍？　お前金髪にするつもりなのか？」

「んー、金って言うよりも金に近い茶ですね」
「変わんねーよ！　お前超サイヤ人にでもなるつもりか!?」
「「健ナイス（よ）！」」
　ファッション雑誌の一面を指差し、憧れの表情を浮かべる忍にツッコミを入れると何故か綾と陽子がナイスと言ってくれた。二人も同じ考えをしていたのだろうか。
「シノ……金髪にするの？」
　と、そこへアリスが忍に質問を投げ掛けた。
「はい！　アリスとお揃いですねっ」
「似合わないよー！」
「はっきり!!」
「流石!!」
「いやほんと!!」
　忍の金髪発言に似合わないと言うアリスの返答に、綾、陽子、俺の順番でツッコミが通った。
　その瞬間、忍の中からガラスの砕け散ったような音が聞こえた……気がした。
　あ、忍がショボーンと窓辺で途方にふけちまった。
「まあまあ、似合う似合わないは人それぞれよ」

「そうだよっ！　シノ、昨日の服はすっごく似合ってたよー！」
　そこですか!?
　アリスのピントがずれている発言に内心で言う俺だが、綾と陽子も同じ事を思っていたのか、何とも言えない表情をしていた。
「ほ、ほんとですか～？」
「うん！　あんなに可愛く着こなせるのはシノ以外にいないよ！」
「あの服は金髪が似合うって思うんですよ！　だから私も金髪に……」
「ＮＯ金髪」
　基準が分からないが、笑顔のアリスのダメ出しに再び大ダメージを受ける忍であった。

☆☆☆

「んぅ……もう朝……？」
　わたし、アリス・カータレットは朝の日差しに目が覚め、ポストに入っているであろ

う新聞を目を擦りながら取りに出掛ける。
日本に来て数週間が経ち、生活にもだいぶ慣れてきました。日本はとても暮らしやすく、周りの人もみんな優しいです。
そこで、わたしの周りにいる仲良しの皆を軽く紹介するよ。
ヤマトナデシコの鑑でもある大宮忍。あだ名はシノ。そのシノの姉でモデルの大宮勇。二人は姉妹だけどあんまり似ていないんだよね。
小路綾ことアヤ。アヤは頭も良くてしっかり者なんだけど、時々凄くおっちょこちょい。
猪熊陽子ことヨーコ。ヨーコは明るくて元気。朝ご飯を食べたのに弁当を食べるほどの大食漢。いっぱい食べるのはいい事だと……思う。
そして、唯一の男友達の八坂健ことケン。ケンはシノ達と仲が良くてわたしも話しやすい。でも……皆の都合に付き合わされたり、振り回されたりする事も多くて少し苦労人。わたしも結構な頻度で助けてる気がする。
そんな感じで皆と一緒に暮らしていますが、わたしは日本、大好きです！

☆☆☆

「進路希望の紙、明日までですよ～」
ホームルーム。烏丸先生が進路希望の紙を皆に渡しながらそう言ってきた。
その際、忍が先生に質問を投げかけた。
「はい先生、質問です。先生はどうして教師になろうと思ってたんですか？」
「そうねえ……先生は気付いてたらなってた……そんな感じ？」
さ、参考にならない……教師なのに。
「でも学生時代が一番楽しいわよ。学生で大変な事と言えば……睡魔との……戦い、ぐらいだものね……」
「先生、今も眠そうです！」
先生がうつらうつらしながら発言し、今にも眠りそうな先生を忍がフォローする。
大丈夫なのか、一つの教師として心配になってきた。
そんなこんなでホームルームが終了した後、進路希望の紙に目を通す。
ほうほう、見た感じだと第三希望まであるのか。まあ流石に全部書かなくても大丈夫だろう。
他の皆の様子は……？

「進路なんて考えた事ないよー」
　アリスは悩んでいる。そりゃそうか。最近日本に来たばっかりで今後進む道なんて考えるには難しいからな。
「アイドルになって武道館でライブかなー。冗談だけど」
　陽子、それジョークにしてはレベル高過ぎなような気が……。
「うーんどうしよう……」チラッ
　綾は真面目だから凄く悩んでいるな。
　……時折彼女の熱い視線が此方に来ているような気がするのは俺の気のせいだろうか。
　え？　忍？　あー……私、知らないー。通訳者とか聞こえないデース。
「ケンは何になるつもりなの？」
　俺が皆の様子を眺めているとアリスがこちらに来て、尋ねてくる。
「俺？　そうだなぁ……参考になるか分かんないけど、今のところは無難に先生かな？」
　親も先生だしなと伝えると、何故かアリスが目を輝かせた。
「先生！　凄い！　ケンは真面目だからきっと叶うんじゃないかな!?」
「いやいや……そんな事ないって」
「そんな事あるよ！　だって、皆を注意するのに向いてるから！」

アリス……それって遠まわしにワタシのツッコミの事を言ってるんじゃないですか？

「そういうアリスは決まったのか？」

「えーと……まだ決まってないけど明日まで時間はあるからもう少し考えてみようと思ってる」

「そっか。ま、じっくり考えてみるのも一つの手だな」

「うん！」

アリスは純粋で真面目だなーなんて心で思った。恥ずかしいから直接言う訳ないじゃん。

「ねえねえ、アリスと健……随分と意気投合してるな」

「……そうね。これって有り得るかもね」

「ずるいです健君！　私を差し置いてアリスと仲良くならないで下さーい！」

「お前等は何言ってんだ!?」

陽子と綾は何やら耳打ちでひそひそ話をしているし、忍は慌てながら俺とアリスの元へ駆けて来る。意味分かんないです……。

☆☆☆

「……」

翌日、学校へ来るとアリスの様子が可笑しかった。何やらアルバムを眺めながら途方に暮れているような気がしているのが窺える。

「アリス一体どうしたんだ？」

「朝から元気ないんですよね……」

忍が溜息を吐きながらアリスを心配そうに眺めている。

「いやいや忍、お前アリスがホームステイしているんだから一番理由を知ってるんじゃないか？」

「いえ、アリスが見ているのはイギリスのアルバムよ。あれにヒントがあるんじゃないかしら」

そこへ綾が介入し、アリスが元気のない原因を推測する。

「答えは……時差ボケね！」

「いや……無理ないかそれ？」

どう考えてもズれた発言をする綾に俺はとりあえずツッコんどく。

「フツーに考えてホームシックだろ」
　腰に手を添えて答える陽子の意見がごもっとであった。
「そうだったのですか、アリス！」
「昨日マムと電話で話してたら懐かしくなっちゃって」
「マム!?　何だか美味しそうな響きっ！」
「忍……それはお母さんの事だろ」
　通訳者ェ……。
「ポピーは元気にしてるかなあ……」
「誰!?」
「多分犬の名前ね」
「わ、わんわん！」
「声真似!?」
　飼ってる犬の真似までするとは……忍の過保護には困ったものだ。まあ、故郷から離れて寂しくなっているアリスを励ますつもりでやったんだろうけど。
「ごめんね心配かけて……。もう大丈夫、元気出たよ！　それに日本には皆がいるし毎日楽しいよ」
「アリス……なんていい子！」

忍、お前はアリスのお母さんかっての。
「そうだ。私達は独りじゃない」
「力を合わせて～」
「そうだよね！」
「「頑張れアリス！」」
陽子、忍、アリスが円陣を組み、三人一緒におー！　と掛け声をかける。
「何なのあれ……」
「ある意味、微笑ましい気がしなくもない」
「えっ」
「えっ」
綾と上手く話が噛み合わなかったのか、口どもる。本心から言った事なのに……。
「ま、まあいいか。それよりもアリス、アルバム見ていいか？」
「いいよー」
アリスから許可を貰い、赤いアルバムを手に取り開く。すると、幼い頃のアリスと美人な女性の姿が写っていた。
「この人アリスのお母さん？」
俺の背後から顔を出しながら覗き込む陽子がアリスに声を掛ける。

「そうだよー」
「すげー綺麗ー」
　その気持ちは分かる。お母さん滅茶苦茶若く見えるし。すると陽子が何かに気付いたのか写真を凝視している。
「……アリスは父ちゃん似かなー」
「え？　そんな事初めて言われたよー」
「何でそう思ったんだ？」
「察しろよ!?」
「あばすっ!?」
　陽子にスパーンと頭を叩かれ気持ちのいい音が鳴る。俺にとってはかなり痛い上、察しろと言われたけど一切分かりません。
　何だってんだ、もう。
「あれ？　この子は誰ですか？」
　すると不意に忍が写真に写っている幼い頃のアリスと一緒にいる金髪の少女を指差す。
「イギリスに居る友達だよ」
　へえ。そりゃそうか。アリスの故郷にも友達がいない訳ではないよな。

「……友達!?　アリスの!?」
「そうだよ」
「フレンド!?」
「イ、イエス」
「……アリスにイギリスの友達が居たなんて、何かちょっと切ないです」
「何で!?」
　質問責めする忍に対し、アリスが簡単に答えると、しゅんとしてしまう忍。いや流石に居るだろうよ……ぼっちな訳じゃないんだし。
「名前をカレンって言って、パパが日本人のハーフなの。カレンのパパはわたしの日本語の先生なんだよ」
「へえー」
　……ん?　カレン?　何処かで聞いたような聞いたことないような……。
「もし会ったら、シノも仲良くなれると思うよ」
「……アリスの友達の金髪少女、私も友達になれたら……両手に花じゃないですか!」
「あー、いつものしのだ」
　落ち込んでいた忍だったが、アリスの言葉によりパアッと明るい様子になる。金髪少女どんだけ好きなんだよ。

一通り写真を眺めた俺達はアルバムをアリスに返した。
「写真ありがとな。見せてくれて」
「今度皆のアルバムも見せてね」
アリスが皆に訊ねてくる。そんなのお安い御用だと答えようとしたが――。
「嫌よ!!」
「!?」
綾がくわっと目を飛び出さんとするばかりに声を張り上げる。俺は今の声に驚いて固まってしまう。
「ちょ……お前どんだけＫＹ……」
「ごめんなさいっ！　でもだって裸が写っているんだものっ！」
「赤ちゃんの時の写真だろ!?」
我に返った綾はあわあわと弁明しようと慌てふためき、それに陽子がツッコむ。何だ。そんな事で気にしてたのか綾は。
「……健、今変な事考えてなかった？」
「え？　イヤアソンナコトナイヨ」
「何故片言……？」
今の心を読まれたの？　女ってのは感が鋭いですねー（棒）

とりあえず、アリスの機嫌は直ったってことでいいのかな？　そう思った俺は安心する事にしたのだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５　もう一人の金髪少女

「熱い……もう夏か～」

俺は通学路を歩きながらそんな一言が口から漏れた。

ミーンミンとセミの鳴き声が辺りに響き渡り、もう夏だという事を嫌でも実感させられる。更に、日差しも強く皮膚から自然と汗が滲み出ているのがはっきりと分かる。

……それにしても相当熱いな。こんな暑さに対してアイスやジュースなどが恋しくなる。まあ、制服も必然的に夏服になって多少ながら凌げる訳になったんだけど。

そんな風に俺が暑さについて悟りながら歩いていると、眼前に見慣れた姿が映ってくる。それと……後、もう一人……？

『え……カレン？』

『アリスアリスー！　……って誰？』

『しのは関係ないだろ！』

長い金髪でパーカーを身に着けている少女がアリスに抱き付いて、忍が次いで少女とアリスの輪にひしっと抱きつくような形で加わっている光景が窺えた。

「……って何やってんだ忍!?」

遅れて俺は忍の突発的行動に声を荒げてしまう。初対面の少女に抱き付くなんてあまりに失礼過ぎると思うんだけど！

……いや、忍は金髪少女を見つけるとすぐ興奮するからかな、はたまた単に可愛い外国の子が好きなのかもしれないが。

そんな事を考えていると、俺の声に気付いた皆が此方を振り向き、陽子が挨拶を交わしてくる。

「お、健じゃん。おはよー」

「おはよう。んで、一体どうしてこうなった？」

「いや、私にも何がなんだか……」

苦笑する陽子。そうか、流石にこの状況は皆でも分からんか。まあ金髪少女がアリスの事を一番に気付いたらしいから彼女が事情を良く知っていると思う。

そう思いながらアリスに聞こうとすると、その少女がきょとんとしながらも俺の事をじーっと凝視してくる。

「な、何……かな」

ジッと見てくる少女に気恥ずかしさを覚えながら尋ねると、ぱあっと表情を明るくし、俺に向かって駆け寄ってきて――――。

「ケン――――！　久しぶりデース！」

「おわっと!?」

『『『ええええ――――――っ!?』』』

正面からハグされた。一瞬頭が真っ白になったんだけど一体何事!? てか他の皆が驚愕の声を上げてるけど驚きたいのはこっちだよー。どういう事なのこの状況!?

「ええええーと……なんで急に抱き付いてきたの?」

焦りながらも聞き返そうとするが、突然の事で最初の方の言葉を上手く言い出せなかった。しかし当の本人は俺が焦っている事に関係なく、笑顔のまま俺に話してくる。

「ウン? そりゃあケンに久しぶりに会ったカラデスよ」

「えと、君と俺は初対面のような気がするんだけど……?」

「何言ってるデスかー。私は九条カレンデスよ。覚えてマセンか?」

「あ……」

そうか思い出した。以前アリスからアルバムを見させてもらった時、イギリスに友達が居るって言ってたけどその子か。

だけど、俺にはそれ以外に心当たりがあるような気がしなくもないんだよな……何だったけか。確か、小学生だった頃――――。

「……はっ!? け、健君いつまでくっついているんですかー! 離れてくださいー!」

だが、俺の思考は硬直から復帰した忍の荒げる声と、カレンと名乗る少女を俺から引き剥がすことによって遮られてしまった。

「くっついてねえよ！　向こうから来ただけだっての」

「それでも、健君が金髪の女の子に抱き付かれるなんてずるいです！　私もあんな風に抱き付かれたいです！」

「意味分からんわ!?　お前は一体何を想像して言ってんだよ！」

俺と忍の討論。ただでさえ熱いのにこうして言い合う事でさらに熱くなるから勘弁して欲しい。

全く、忍は時々突飛な言動をする事があるからな……。金髪だったら誰でも見境ないのかおめぇは。

因みに、カレンはハワイへ旅行へ行き、その旅行のお土産を渡しにアリスの家を訪ねた所、アリスの母から日本へ留学へ行っていると聞いて、自分も日本に来たらしい。

というかカレン一人でよくここまで来れたな。普通なら不安で両親も来そうなものだと思うけど……ん？　一人で来たという事は、誰かの家にホームステイすることになるのか？　アリスがいい例だし。まあそれは後にでも聞くとしよう。

余談だが、カレンの父親は俺の父さんと古くからの知り合いで実業家を営んでいるらしい。結構どうでもいいことかもしれないが。

紆余曲折ありながらも、俺達は今日から通うことになったらしいカレンと一緒に学校へと向かった。

☆☆☆

お昼休み。

残念ながら俺や忍達と同じクラスではなく、隣のクラスへと決まったカレンが俺達のクラスへとわざわざ来てくれた。

……忍は相変わらず、ずっとカレンの事が気になっていたらしく、しばらくデレデレとした様子であった。

その様子にアリスは項垂れていた。恐らく、金髪少女に見境ない忍に焼きもちを焼いているのだろう。

「それにしてもカレン、日本語上達したねー」

「毎日勉強頑張ったデスよ」

「カレンはイギリスで育ったの？　ハーフにしてはカタコトだけど」

「ウン。家ではパパも英語喋ってたカラ、アリスみたいに日本語ペラペラになりたいデス」
　そう話すカレンだが、俺達に十分伝わるだけでも中々上手いと思う。
「カタコトがいいんですよ、可愛いじゃないですか！」
「……わ、わたしもまだまだデス。日本語難しいデス」
「対抗しなくて良いからな？」
　忍の言い分にわざとらしくアリスが呟き、俺は苦笑しながらアリスに伝えとく。対抗心燃やしてんなーおい。
「そういえばさ、ハーフの子って日本名でも外国名でも通じる名前だよね」
　そう陽子が切り出す。
「それな。リサとかナオミとか色々あるよな」
「パパが名付けてくれまシタ。漢字では『かれんな花だ』のカレンと書くデス」
　ムズかしい字だとカレンが付け加えて説明する。
「『可憐』ね。綺麗な名前」
「『可憐な女の子に育つように』って意味を込めて付けたのですよ、きっと！」
「シノ、わたしは？」
「アリスは『リスのように小さく可愛らしく』という意味ですね！」

「『あ、リス』じゃないわよ」
忍の適当な名前の由来に、綾のズバッと的確なツッコミが炸裂する。
しかしアリスはそれっぽい言い方をする忍に納得したような表情をする。いやいや、そこは納得しちゃダメでしょ。
それに、アリスはハーフじゃなくて生粋のイギリス人だろうに。色々と間違えすぎ……。
するとカレンは少し考えた素振りを見せると、それぞれ皆の名前を呼び始める。誰々の名前を覚えるために、だろう。
「ヨーコ、シノブ、えっとー……」
「綾よ」
カレンは綾を指差すものの、名前が分からず詰まっていた所に綾が自分の名前を言ってフォローしてくれる。
「アヤヤ?」
「一文字多いわ。綾よ」
「……プッ」
「な、何よ……」
カレンの呼び違えた所に俺がつい吹いてしまい、ジト目で見つめられる。

「い、いや……アヤヤって何か芸能人でいそうだなって思って」
「違うわよ!?　ていうかそんな風に言われると地味に傷つくんだけど!?」
「アヤヤー！」
「アヤヤ！　アヤヤ！」
「だから止めて……」
　カレンがパーッと笑顔を浮かべながら呼び間違えた名前を連呼し、陽子も悪乗りで連呼する。その様子に、綾は顔を真っ青にし震えながら引いていた。
　きっと彼女の心情は＼（・ω・＼）ＳＡＮ値！（／・ω・）／ピンチ！　……きっとこうなんだろう。
「私のことは『しの』って呼んでください！　仲良しのあだ名です」
　忍が笑顔でカレンにそう呼び掛けると、アリスは面食らったような表情を見せる。
あ、ショボーンってなってしまった。
　しかしそんな様子を気にも留めず、女子の輪は話を進める。
「シノはニンジャ？　壁歩ける？」
「あー、『忍』だからか」
「それはちょっと……」
「シノできないデスかー」

カレンがエーと軽いブーイングを漏らすと、アリスが声を張り上げる。
「そんなことないよ！　シノはスゴイから何でもできるよ！　さあシノ、壁を歩いて！」
アリス？　流石にそれはいくら何でも忍にとっても無茶ぶりだと思う……。
「どうしたのアリス……何だか様子が変よ」
綾がアリスにそんなことを尋ねる。流石に彼女も気付いてしまったか。
「アリスはカレンに妬いているんだよー」
「!!」
陽子がアリスの両肩を掴んで「なー」と言うと、アリスは顔が真っ赤になった。
「そうなんですか？」
「気付いてないのか？　お前さっきからカレンばっかに夢中で、アリスが必死にアピールしてんのに気付いてやれよ……」
俺が嘆息しながら忍に言葉を伝えると、あはは……と自覚したようなしてないような複雑な笑みを浮かべる。
「確かにカレンは身長も平均的ですし、アリスよりも外国人らしくて魅力的です」
忍が言ったアリスよりも外国人らしいという部分は多分、片言＝外国人らしいといった部分が大きいのだろう。
「でもアリスにはアリスの良い所がいっぱいありますよ！　だから自信持ってください

！」
「まったくフォローになってないわ……」
綾の意見には俺も頷いた。カレンのことばっかり口に出してアリスの良い所を言っていない。果たして本当にフォローしているのかどうか……。
「そういえばさ健、さっきの事についてなんだけど……」
「さっきの事？」
すると、ふと陽子がそんなことを聞いてくる。さっきの事と言われてもいつのことか分からないのだが……。
「おいおい、覚えてないのかー？　さっき、カレンが健に抱き付いていただろ？」
「……あ」
そうか……朝の出来事。アリスに次ぐもう一人の金髪少女が急に俺に抱き付いてきた事。あれは衝撃的過ぎて本当にビックリした。
「そ、そうでした！　どうして急に健君に抱き付いたんですか？」
「私も気になるわ！　男女が抱きつくっていうあんな少女漫画的な展開は実際に見た事ないから……」
「カレン！　教えて！」
忍、綾、アリスが（ついでに陽子も）カレンに詰め寄り、真意を聞き出そうとする。て

いうか抱き付くって連呼されて、聞いてるこっちがめっちゃ恥ずかしいんですけど……。

カレンは少し考えた後、皆に伝えた。

「ンー……あれは私が小さい頃でシタ。前に一度日本に旅行に来た時があったデスケド、パパとママとはぐれちゃって……。その時に、ケンと会ったデース」

「そんなことがあったのね……」

「……」

――――

『ひっく……うぇっぐ……』

『どうしたんだ？　大丈夫か？』

『……エ？』

『何で一人なの？　お前の父ちゃん母ちゃんは？』

『――――！』

『な、何言ってるか分かんねえ……。親とはぐれたのかな？　なら一緒に探してやっから』

『――？』
『言ってる事分かんねえけど、迷子なんだろ？　だったら一緒に探そうぜ。父ちゃん母ちゃんを。手握ってやっからさ』
『――！』
『俺に任せろ』
『！　ウン！』
『よし、じゃあ行くか』

――

……思い出した。俺が小学校の頃に通学路から帰る途中、公園で金髪の女の子が泣いていたのを目撃して慰めてあげた後、手を引いて一緒に彼女の両親を探しに行ったんだっけか。
あの時は、カレンは片言ですらなかったけど、そこは何とか誤魔化した。
それでも、彼女が付いて回ってる時に笑顔を見せていたって事は微かに覚えている。
その後、カレンの両親らしき人達を見つけて、無事に事が済んだ訳だ。余談だが、その時にカレンのお父さんが俺の父さんの息子だと見抜き、現在こうして事情を知ってい

る。

待てよ？　そうなると、先程アリスを追いかけて自分もやって来たと言ってたけど、求めたのはアリスだけじゃない気がしなくもないような……？

「ケン？　どうかしたデスか？」

「ん？　あ、ああ……何でもない」

カレンに呼び掛けられて自分が如何に思考に耽っていたかが思い知らされた。

皆に心配かけるかもしれないしこの考えは一旦放棄する事にしよう。彼女にも深い事情があるかもしれないし。

その後、昼休みが終了しカレンは自分の教室へと帰って行った。今後とも、カレンと仲良くやっていけるといいな。そう思った俺は午後の授業に打ち込みを入れた。

――しかし、まさかあのような事態に陥るとは、思いもよらなかった。

☆☆☆

「お家こっちデスー」

「そっか、じゃーな」
「また明日ねー」
放課後、カレン含めた女子五人グループと一緒に帰っていた。……最近思うのだが、女子の輪に男一人いるのって異様な光景に見えるような見えないような。
そんなことはさて置き、駄弁りながら帰路に着いていると、カレンが俺達とは違う道から帰るらしい。因みにその行き先は俺の家の方向なのだが、きっとその前後にあるのだろう。
じゃあ何故同じ方向に帰らないって？　買い物をするためだよ！　両親が帰宅するのが遅いから、常に俺が買い物をしている。姉さん？　言わずもがな。
と、カレンと別れようとすると俺の方に駆け寄ってきて――――デジャヴ？
「マタ明日！」
ちゅと、俺の頬にキスをした。……ってええええええ!?　本日二度目の大驚愕!!
「外国人！　外国人だ!!」
「カレン!!　日本人の挨拶は軽く手を振って『さようなら』だよ！」
俺が呆然としている間、陽子が声を張り上げ、綾が頬を赤らめ、アリスがもーっと軽く怒りながら正しい作法を注意する。
他の人達が盛り上がっている中、忍がわなわなと俯いている。一体どうしたのだろ

う。

俺が彼女に向けて訊ねようとした瞬間――――

「健君!!」

「は、はい!!」

突然、忍が憤怒の形相になったと同時に怒りの声を上げ、俺はつい身じろぎ、敬語で返事をしてしまう。

「なんで健君ばかりそんな羨ましいことをしてもらえるんですか!? 私にもされてみたいのに……。ちょっとＯＨＡＮＡＳＨＩする必要がありますね……」

「待て待て忍！」

ちょっ!? 忍がキャラ崩壊を起こしてる!? 最後の方はドスが効いていて、しかもゆらゆらと背後から何か見える！ 奴はスタンド使いのようだ……じゃなくて！ やばい！ 目にはハイライトが見えない！

俺何も悪くないよね!? 何で何もしていないのに逆鱗触れた、みたいなことになってんの??

とにかく逃げねば！ 先程お話って言っていたけど、お話程度で済む訳がない！

「し、失礼しまーす!!」

「待ちなさーい!!」

俺はその場から一目散に逃げ出し、忍も後を追ってきている。
「ねえ……二人追いかけなくていいの？」
「いいんじゃない？　楽しそうだし」
「だよなー」
ちょ……この裏切り者共め！　くそ、俺の味方はいないのかぁぁぁ!!
こうして、俺は強制（？）マラソンをさせられる羽目になってしまった。

☆☆☆

「はぁ……酷い目に遭った……」
両手に買い物袋を携えた俺は溜息を吐いた。
あの後、そこは男子と女子の差が功を制して、全力疾走したお蔭で何とか撒くことに成功。そして、現在こうして無事に買い物を済ませたのだ。しかし、買い物する前に何であんな目に遭ったのか……
ガサガサと小刻みに品物が揺れる音を何度も聞きながら、家に着いた。

今日のメニューはスパゲッティだ。しかし、ミートソースかナポリタンかどちらかに迷いながらも、玄関前のインターホンを押す。

すると、タタタッと走って来る音が家内から聞こえた。姉さんは既に帰宅しているようだ。

そう思いながら内側の鍵が外れる音と共に、玄関前の扉が開くと――――

「いらっしゃいデース！」

「……は？」

目の前に、ユニオンジャックの模様のパーカーを羽織っているうちの学校の制服を着た金髪の美少女が――――ってｗｈａｔ？

あれ……何処かで見たような子だな……？　確か、今日皆と一緒に駄弁っていたような少女のような……？

手の甲で目をゴシゴシと擦る。しかし、眼前に佇む金髪少女は依然としてニコニコと笑顔を浮かべている。

……やっぱりカレンだぁぁ!!　多分、きっと家を間違えたんだろう。うん、そうに違いない。

「えーとカレン？」

「どうかしたデスか？」

「えっと……俺個人の予想では、家を間違え「いいえ間違えてないわ」……ね、姉さん？」

俺が言葉を紡ごうとすると、廊下の奥から姉さんが額に手を添えながら此方へと来る。

「間違えてないって、どういうこと？」

「実はね……」

姉さんから聞かされたのは、驚愕の新事実だった。

「父さんから『言い忘れてたけど、今日父さんの古くからのよしみの娘さんが来るそうだ。急なことで済まないがホームステイさせてほしいと頼まれてきてな。そういうことで、今日早く帰る父さんと母さんが来るまで待っててな☆』って……。しかもご丁寧に星マークまで……」

「……勝手に何やっとんじゃあの父親はァァァァ!!」

俺の叫び声が家中に木霊した。凄まじいカオス的展開に、卒倒しそうになったのは言うまでもない。

「コレカラヨロシクオネガイシマス！」

余談だがその後、早めに帰宅した両親はカレンを大歓迎し、外国人少女と同棲が決まった。その際、姉が「ぐぬぬ……」と歯噛みをしていたのは見なかったことにする。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６　過去の話を少々……。

「むーん……」

自室のベッドで寝返りを打ちながら健は口元から寝言が漏れる。

締め切られたカーテンが日差しに照らされ、窓の外からチュンチュンと聞こえる小鳥のさえずりに朝を感じさせる。

そんな心地良い朝を感じさせる中、健は寝息を立てていた。

時刻は六時半過ぎ。目覚まし時計は七時に設定しており、大体毎日その時間に起きている。

そして、この気持ちが良い朝を少し寝て過ごそうとしようとした瞬間だった――――。

「ケン――――！　オハヨウゴジャイマ――ス！」

「おぐわぇッ」

バーン！　とカレンが勢いよく扉を開き、走りながら寝息を立てながら寝ている健のベッドに向けて大の字になりながらダイブし、のし掛かれたせいで〝く〟の字になりながら苦悶の声が漏れ出る。

目を飛び出さんとするばかりに見開き、強制的に起こされた健。重い物を落とされた

ような衝撃に腹部を押さえようとするが、寝起きの彼の上にはカレンが居る事が把握できずに、彼女の背中に手を回し抱き締める形になってしまう。

「ケ、ケン!?」

彼の突然な行動にカレンは驚愕の表情を示す。健は単に腹部を押さえようとしていただけの筈が、しがみ付くようにカレンが彼の上に体を預ける形と化してしまう。

「ぅうぐ……ってカレン!?」

漸く気付いたのか健も驚愕の表情になる。気付けば金髪の少女が自分の体の上に乗っかっていたなど誰が予想出来ていただろうか。

以前にも姉に何度かこんな目に遭った事があるが、昨日から居候してきた外国人の美少女がこんな事をする等思いもよらなかった。

取りあえず何故か頬を朱に染めているカレンをどかそうとしようと、手を彼女の背中から肩へと移動させる。

「か、カレン?　取りあえずそこからどいてくれるとありがたいんだけど……」

「け、ケンは大胆デスネ……」

「その言い方ヤメテ!?　とにかくこの状況を何とかしないと姉さんが……「私が何だって……?」……来ちゃったよぉ」

傍から見ればカレンが健をベッドに押し倒している形。それを自身の姉に見られて

しまった。思わずしまった……と言わんばかりに冷や汗を流しながら遠い目をする健。

プルプルと震えている瑠美を見て、怒られるのを覚悟するが――――。

「健ずるいわよ！　カレンは襲うのになんで私は襲ってくれないの!?　でも今からでも遅くないし、私も混ぜてよ――！」

「何もかもが違うわあぁぁぁ!!　襲ってもねぇし、服脱いでこっちくんなぁぁぁ!!」

……勢いで姉弟の範疇を超えようとしたアホな姉と、純粋な金髪少女の行動に朝からカオスな目に遭い、頭を抱える羽目になったのだった。

☆☆☆

「ケンゴメンナサイデス。私のセイで」

「いやカレンは別に悪くないよ。ただ、後から来た姉が予想外過ぎた……」

色々とやばい展開になりそうだったあの後、俺が必死に説得してあの状況をやり過ごした。

しかしカレンをどかせるのには難は無かったが、下着姿にまでなった姉さんを何とか

するのは苦労した。思い返してみると冷や汗を掻いてしまう。
今はこうしてカレンと一緒に登校しながら会話している。姉は俺達とは別の学校なので居ない。
朝のあの出来事を有りのままに説明してもらい、現在こうして両手を合わせながら謝ってくるカレンに別に悪くないと言い伝える。
あれは外国人であるカレンなりの行動なため、次第に慣らしていけばいい。それに彼女は一切の悪気はないし、こう言っておかないとカレンが悪いと思い続けるかもしれない。
え？　姉はどうなのかって？　何度も同じ目に遭っているからそこは察して。
「あ、忍達だ」
カレンと談笑していると、前方に見知った後ろ姿を見掛けた。その声に気付いたのか、皆が此方を振り向いてくる。
「おはよう健。って、ん～？　それに……カレンもいる？」
「皆サン、オハヨウゴジャイマス！」
陽子が俺とカレンが一緒にいるところを見て怪訝そうな表情だったが、それを遮るようにカレンが間違った挨拶をしてアリスが指摘をする。
「カレン！　ゴジャイマスじゃなくてゴザイマスだよ」

「あー、そうだったデスね」
「あれ？　アリス知らないんですか？」
恥ずかしさに口元を押さえるカレンだが、忍が何やらのほほんとした様子で言った。
「ゴジャイマスの方が正しい日本語なんですよー」
「えっあっそうなの!?」
「まるでダメな日本人じゃねーか！　アリスもあからさまな嘘に乗っかからないで!?」
忍の目に明らかに嘘って字が見えるのに、純粋故かその言葉に信じ込んでしまうとまずいと思い、取りあえず突っ込みを入れる。
……最近このキャラが定着しているように思えるのは気のせい？

☆☆☆

学校にて。何事もなく授業を受けて時間は刻一刻と過ぎていき、あっという間に昼休みになった。
その時にカレンも俺達の教室に居た。

「クラスの子と仲良くしたいケド、上手く出来ないのデス」
「転校生の辛い所だな」
　不意にカレンが苦笑いをしながらそんな事を言ってきた。まあその気持ちも分からなくもないかな。
「外国の方ってだけで話しかけ辛いのかもです。カレンは外国人オーラがバンバン出てますし」
　正確にはハーフだけどな。てか、カレンばかりに意識が向いているためか同じ外国人であるアリスが「あれ……私は？」と手を挙げながら彼女に問う。
「動物に例えると鹿の群れにライオンがいるみたいで――――に、逃げなきゃ……」
　忍が思考を巡らしたすぐ後、顔面蒼白に成り体を震わせる。その例えは流石に間違えていると思うんだが……。
　しかし、忍はすぐに立ち直ると綾に向けて手で差し示す。
「そういえば、綾ちゃんは転校経験者なんですよ」
「中一の時に引っ越してきたんだよなー」
　次いで陽子も言葉を紡ぐとカレンが顔を綻ばせながら綾に質問を求めてきた。
「ゼヒ、仲良くなるアドバイスをお願いシマス！」
「そ、そうね……一番大切なのは――――空気を読むこと、かしら」

綾は何かを悟ったッ。みたいな表情でカレンに告げる。……まあ彼女らしいっちゃ彼女らしい、か？
「つまりカザミドリデスね！」
「風じゃないわ空気よ！」
そこを強調されても……とは口には出さなかった。
「まあでも、綾は転校してきた当初は本当に話さなかったからなー」
と、そこへうっかりと口に出してしまった自分が居た。皆が此方を見入っているし。まあここまで話したならしゃーない。続きを話すか。
「確か最初に話しかけたのが忍だったか？　その時はめっちゃぎくしゃくとしててまるでコミュ障と思ったな」
「だっ、誰がコミュ障よ！　それに古傷を抉らないで!?」
綾が話し続ける俺に怒声を上げる。しまった、冗談のつもりがつい癖で言ってしまった。
「でも実際さぁ、綾が学校に慣れるまでずっと私と健の側に居てさ、何かもう捨てられた子犬状態で！」
「嘘よ！　デタラメ言わないでっ！」
「だって本当の事じゃん。しかも健には引っ付くみたいに甘えてたし」

「陽子おっ!!」

散々からかう陽子に対し、顔を真っ赤に染めながら声を上げる綾。

……確かに今思えば一時期、俺の中学時代は結構やんちゃ気味だったからか、綾にしつこいと思われるぐらい質問した記憶がある。

忍が最初に話しかけたすぐ後、無理矢理引っ張っていった陽子とはまた違った方向で攻めていった。

理由は簡単な事。転校して間もなく、周りに馴染めていない綾に少しでも雰囲気に溶け込めるように積極的に俺が話したまでだ。

そして、陽子も同じだ。ちょっと馬鹿だけど彼女のその積極性は大した物だと思う。

「そう……だよな」

「？　健君、どうかしたんですか？」

口から漏れた呟きが忍に届き、首を傾げながら俺に問う。どうやら素直に思った事が口に出てしまっていたらしい。

「ああいや……」

即座に俺は手を振って何でもないという事を示す。

「まあ何にしろ、クラスに馴染むには場の雰囲気に慣れるとか、笑顔で接するとか、そういう風に他の人達と気軽に話し掛ければいいんじゃないか？　時間は掛かるけど、そう

やって徐々に慣れていく事によって他人と親しい関係を得られると思うし、それに、カレンはカレンなりの対応で他の人達に話し掛ければ友達も作れるのも夢じゃないと俺は思う」

俺が自分が思った事を長々と皆に伝える。事実、俺は俺なりの対応でこうして皆と話してきた。その結果、忍や陽子達と一緒に親しい間柄になる事が出来た。

今言った言葉は長々だったから屁理屈に聞こえるかもしれないけど、他の人と仲良くなる一番の最善策だと思う。

「って、何言ってるか分かんなくなったな……あれ皆どうした？　そんな面食らったような顔して……」

「「……」」

女子勢皆が呆然とした表情で此方を見ている。

「いや……健からそんなアドバイスを聞けるとは思わなくてな……」

「いやいや！　別にいいだろ、アドバイスくらい」

「私も陽子と同意見だわ。健の口から真面目な言葉が出てくるなんて」

「綾ぁぁ!?　俺の事を一体何だと思ってたんだよ!?」

何故か陽子と綾の同時攻撃によりＳａｎ値が削られる羽目になってしまった。くっそう、男か!?　俺が男だからか!?　世の中不公平だぁぁぁ！

更にはアリス、カレンの金髪コンビは目をキラキラと輝かせて「ケンカッコいい！」なんて呟いてるし、忍に至っては俺の言葉の意図が伝わらなかったのか、小首を傾げているし。もうやだこのカオス空間……

余談だが昼休みが終わり、最後の授業が終わった直後、カレンが居るであろう隣のＡ組から『みんなと仲良くなりたいデス！　お気軽に話してくだサイ！』という大きな声と共に歓声と拍手が聞こえる程、筒抜けだった。

アリス曰く、カレンは昔からハッキリした性格らしい。その事を俺が褒めたら何故か抱き付かれた。その後、嫉妬に駆られたのか忍が怒りながら追いかけ回された。……デジャヴ？

どうやら上手くやっていけそう、かな？

Ｅｐｉｓｏｄｅ７　カオス空間

「よし、準備ＯＫかな……。カレン、そっちは準備いいかー？」
「バッチリデース！」
日曜日の朝、俺とカレンは忍の家に行くための身支度を整えていた。
理由はこうだ。何やら忍がテストでまさかの０点を叩き出し（しかもこの時、当の本人はこれ以上下の点数が無いのにあまり良くないと言っていた）、追試に向けて綾が一生懸命忍に教えるために勉強会を開こうと申してきた。
そのため、現在こうして忍の家に行く前に軽い準備をしている訳だ。
しかし、忍があまりに酷い点数を叩き出した所為か、綾が『この点数は信じられなす……』と噛んでしまう程動揺していた。
しかもその後、忍が綾に勉強を教わっている際に、忍が『はいナス』とか、そういう風に語尾に一々『ナス』を付けるという、無意識に揚げ足取りをしてしまいツッコミを入れる綾の姿は鮮明に覚えている。綾、お疲れ様です。
その後に、綾の教え方が上手いためかアリスや陽子達からも教えてときた。まあ、綾は頭良いからな。

え、俺？　半分以上の点数だったが、自負出来るものでもないですがね。
「あら健にカレン、これからどこ行くの？」
とまあ、そんな感じで俺達二人がリビングで準備を整えると、俺の実姉、瑠美姉さんが声を掛けてきた。
「ちょっと忍の家で勉強会をさせてもらうとの事で、綾が」
「あら、忍ちゃんの家で？　いいわねぇ、青春してるわね……」
「そんな言い方だと、姉さんが青春してないような言い方に――――あっ」
「……どういう意味かしら、健」
口は災いの門。姉さんの言葉に思わず率直に反応し、言い過ぎたとピタリと止めるものの、時既に遅し。
姉さんは額に青筋を浮かべて、笑顔だが明らかに怒っている様子が分かった！　怖え！
「ヒッ!?」
カレンは姉さんの迫力に押され、服の裾を掴みながら俺の後ろに隠れてしまう。かく言う俺も眼前に佇むホラー度全開の姉にじりじりと後ろに後退する。
「ちょっとデリカシーが無い弟クンにはお仕置きが必要みたいね……」
「ご、ごめんなさいごめんなさい！　不躾な我が発言に誠心誠意を持って謝ります!!」

何をしてくるか分からない姉に恐怖心を抱いた俺は、平身低頭して謝る。

許してくれとは思わない。これは俺の落ち度なのだから。それでも、僅かながら許して欲しいという思いもあった。

「あらぁ……別にそんなに謝らなくてもいいのよ。ただ、ちょっとあんたの身体を貸してもらえばそれでいいの……」ジュル

「……ちょっ、ちょっと待て。今何か変な擬音が聴こえたんですけど!?」

一瞬姉さんが舌舐めずりをしたのを見逃さず、俺は寒気を覚える。更に抗議の声を上げるものの、何か変な方向に走っている姉さんはゆっくりと此方に歩み寄っている。

このままだと俺、（また）貞操の危機!?

「か、カレン！　急いで忍の家に行くぞ！」

「は、ハイ！　分かったデース！」

とにかく目の前の存在（姉）から逃げたい一心であった俺は、カレンを引き連れて家から出た。そう、出掛けるという名の逃げる形で。

……家に帰ってきた時が怖いな……

☆☆☆

「はーっ、はーっ……。ごめんカレン……面倒事に巻き込んで」
「い、イエ……」
家から脱出してきた俺とカレンはダッシュで忍の家までの道を走っていた。その途中で、息を整えるために立ち止まる。
「ふう……。これは俺と姉の問題だから、カレンは関わらなくても大丈夫だよ」
その際、カレンに誤解を招かないようにきっちりと説明をするのも忘れずに。
「分かったのデス！」
「よし、じゃあ行こうか」
俺にとっては『よし』じゃないんだけど、納得した表情を浮かべるカレンの様子に俺は安心し、忍の家へ向かう。
ちなみに、忍の家は俺の家からそう遠くはなく、増してや先程走ったために距離が短縮された。
そのお陰で、忍の家の前に佇む綾と陽子が窺えた。俺は二人に声を掛ける。
「よっす、済まん待ったか二人共？」
「おお健。いや、私達もさっき来た所だよ」

どうやら待たせていなかったらしい。良かった。
「しかし何だか緊張するわ。健って、何回か会ってるんでしょう？」
「ん？　ああ、まあな。何回かって訳でもないけど。そういえば綾って、勇さんに会うのは初めてなんだったっけ」
「そうよ。雑誌では何度か見た事あるんだけど……」
「私、ファッション雑誌とか読まないからなー」
陽子はそう言うが、俺も何分男だから、ファッション雑誌は好んで読みはしない。
と、ここでカレンが綾の発言に「イエス!!」と便乗してくる。
「女子高生カラ絶大な人気を誇るファッションモデル、イサミに憧れる女の子は多いデス！　サインは何枚までＯＫデスかね!?」
「……カレンが日本に来たのって最近だよね？」
陽子が苦笑いしながらカレンにツッコむ。確かにいつ調べたと言いたい。後、そのサイン用紙出掛ける前に用意してたの？
後どうでもいいけどファッションモデルって部分、発音良かったな。
取りあえず忍の家の玄関を開け、お邪魔する。
『『お邪魔しますー』』
「いらっしゃいー。今日は何の集まり？」

皆で声を揃えて家に入るとすぐ、勇さんが出迎えてくれた。
彼女は忍の姉である大宮　勇さん。身長も高くて、黒髪ロングヘアー。そして容姿は忍の姉さんと言った所か、かなり美人だ。
「忍ちゃんの部屋で勉強会をさせて頂こうと。これ、皆で食べて下さい」
「あらあら、ご丁寧にどうも」
綾がバッグを差し出し、勇さんが礼を言う。多分バッグの中身は皆で食べてって言ったからお菓子の類だろう。
「九条カレンと申します。イサミさんの事は雑誌でお見かけしてすぐファンになりました。よろしければ、サインを頂きたいと……」
「カレンのこの上ない流暢な日本語を初めて聞いた!?」
いつもは多少ながら日本語慣れはしていないのにも関わらず、勇さんの前では上手い日本語でもじもじしながらサイン用紙を差し出して、お兄さん驚愕しちゃったよ。いや、カレンは兄妹ではないんだけど。
陽子や綾も何で!?　とばかりに驚いている。それもそうか。
取りあえず結果としては、カレンの期待に背く事ないようにサインを残して貰いました。その時のカレンの様子はめちゃキラキラ状態だった。そう、まるで艦隊をコレクションするような……

「健君も久し振りねぇ」
「あ、はい。ご無沙汰してます」
「瑠美に何かちょっかい掛けられてないかしら？」
「……それはもう何回も」
　勇さんがその事を聞いてきて俺は遠い目になる。この人も姉さんと俺の事情を何となくとはいえ、知っているのだ。人前で言える事じゃないし。
「でもあんなマイペースな瑠美に比べて、健君はしっかりしてるじゃない。うちの忍に見習って欲しいわー」
　あなたがそれを言いますか!?　……とは言わない。
「どう？　健君、うちの義弟にならない？」
「いや何でですか。第一、俺がいなくなったら姉さんの世話が出来なくなりますし」
　唐突な勇さんの義弟宣言。俺は驚きながらも対応する。
「いいじゃない。妹二人に弟一人が出来たみたいで可愛いわ。それに、瑠美がぼっちになってどういうおろおろするのを見てみたいし」
「そんなんでいいんですか……？　いや、なりませんけど。てか、何気に姉さんをディスってないですかね!?」
　そう、勇さんはこういった突拍子もないＳ発言をするため、毎回驚かされてしまう。

まあ、対応には馴れたけど。
「そういえば、今日瑠美は来ないのかしら？」
「ああ、姉さんなら、用事があるって言ってましたよ」
「そっかー。あの子ちょっと勉強不足だから、多分図書館辺りで勉強してると思う」
勇さんが顎に指を添え、考えながら言う。確かにうちの姉さんは自分でも勉強不足って言ってたし、勇さんと同じ大学に行けないとか何とか。
「それじゃ、ごゆっくり～」
「はい」
「あ、いっその事我が家の一員としてうちに泊まっていってもいいからね～」
「いやだから何で勝手に同居人にしてるんですかアンタは!?」
「健と勇姉相変わらずだな……」
勇さんを相手にしていると、疲れるな全く。

☆☆☆

～その後回想～

「おい忍。何で勉強会なのにメイド服なんだ？」

「え？　この服似合いませんか？　皆さんが来る前、アリスと一緒に外国人っぽい服を選んでいたんですけど……」

「普段の服でいいだろ!?　どう見てもそれファッションセンス間違った方向に行ってるわ!?」

勇さん曰く、最近熱中出来るものが見つかり、昔に比べたらしっかりしてきたが、妹の将来が心配だとか。いや当たり前でしょ!?

――更には。

「綾ちゃんは和服が似合いそうねー」

「えっ……この服、似合わないでしょうか」

「そんな事ないわ。自分に似合う服を選んで着れてると思う。やっぱり、似合う服を着るのが一番だと思うわ……」

「……えへっ、そんなに似合います？」

「何で照れるん!?」

勉強の合間に覗きに来た勇さんが、綾の服装を見て似合うと言い、顔を赤くしながらも照れる綾。対して、忍の服装を小馬鹿にしたように横目で見ると、何故か忍まで照れ

た。何処にも照れる要素ないと思われる……

……更に更には。

「どう？　　お弁当の味は」

「あー……うん、まあうｍ――――」

「これ味付け薄いよー」

「正直に言うのはやめて差し上げよう？」

綾が、今回の勉強会でありがたい事に弁当を作ってくれて、感想を求めてきた。実際のところ味が薄かったが、折角作ってくれたんだし美味いと俺が言おうとしたところ、純粋な外人っ子二人が正直な感想を言って、綾がショックを受けてしまった。

とまあ、そんな感じで、カオス空間を繰り広げていったのだった。

「ケン大丈夫？　少し痩せたように見えるよ」

「……そう？　まあ……色々あったからな」

夕刻。短いようで、長い勉強会の時間が終わり、忍の家の前で皆が帰ろうとしている所で、何故かアリスに心配された。

まあ、ツッコミし過ぎたのが理由の一つだと思う。

「大丈夫かしら健君。良かったら家に泊まる？」
「だからその話はもういいですって……」
何回だろうか、勇さんのその話。
「大丈夫ですよお姉ちゃん！　健君は打たれ強いですから！」
「どういう意味だよそれ!?」
忍の意味不明な発言に、思わず卒倒し掛ける。
「えと、ケン……確かこういう時に、セイロガンがいいんだっけ……？」
「それは食あたりの時とかに使われる薬です！」
アリスの気遣いはありがたいが、間違った知識にツッコんでしまった。
結局、俺は大宮家の皆さんに振り回されっぱなしなのであった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８　休日の過ごし方？　前編

「オハヨウゴジャイマス～♪」
　カレンと一緒に登校して早々アリスと会い、間違ったのかわざとなのか分からないが、そんな挨拶をした。
「カレンったらそれわざと言ってるでしょ」
　アリスがカレンにツッこむ。あ、結局わざとなんだ。
「カレンちゃん、オハヨーゴジャイマス」
「ゴジャイマース」
「って流行ってる!?」
　何かカレンのいるクラスで誤った挨拶広まってたっぽい。そんでもってアリス驚愕。
「私が流行らせたデス！」
「こういうのはクセになっちゃうんだよー」
　ドヤ顔を浮かべるカレンに対し、もーっと言いながら反論するアリス。
　まあアリスの気持ちは分かったりする。流行りモノって伝染（うつ）るものでもあるから。
「おはよー、皆ー」

おっ烏丸先生だ。俺も挨拶を交わそうと思った時だった。
「あっ、先生オハヨウゴジャイマス！」
「「あっ」」
「？」
早速伝染ってしまったのか、アリスが先生に間違った挨拶をして、俺とカレンは間の抜けた声を出してしまう。ちなみに先生は唐突の事で訳ワカメ状態。
その後、恥ずかしい思いをしてしまったアリスは間違いを正すために、忍達に挨拶を交わした。
「皆様お早う御座います！」
「おっはよ～！」
「おはよ……どうしたの？　何か堅苦しいわね」
陽子と綾に改まった挨拶をし、綾が不信感を抱く。まぁその気持ちは分かる。
「おはようございます、アリス」
「美しい日本語ー！」
「??」
忍らしい、大和撫子と言わんばかりの綺麗な日本語に、思わずアリスが抱きつく。ちなみに忍は訳（以下略）。

「カレン、健、何あれ」
「アリスはゴジャイマス否定派なんデスヨ～」
「……だ、そうだ」
「はぁ？」
　流石にこの状況には、陽子には付いていけなかったようだ。
「そういえば、今度お姉ちゃんがハワイに行くんですよ。モデルの撮影で」
　忍がふと、そんな事を言ってきた。
「勇さんがか？　流石はモデルなだけあるな」
「いよいよグラビアデビューか！」
「いや違うだろ。お前どんだけグラビアに拘ってるんだよ……」
　陽子はこうやって勇さんにグラビアを求めてたりする。ファッションモデルなのに……。
「あれ？　ハワイじゃなくてグアムじゃなかった？」
「え？　グアム？　ハワイ？」
「どっちも有名なリゾートね。勘違いする気持ち、ちょっと分かる。サイパンとか……」
　アリスと忍が戸惑ってる中、綾が補足説明をする。
「そうそうタコスとかー」

「それは食べ物だ忍！」
これ完全に知ったかぶってる。うん、きっとそうだ。
そんな他愛ない会話で時間を過ごしつつ、ホームルームが始まった。

☆☆☆

「いいなー、海。行きたい」
授業後。横隣の陽子がふと、そんな事を呟いた。
「その気持ちは分かる。確かに海いいよな、泳げるし」
「おお！　やっぱ健もそう思う!?　綾だったら嫌って言いそうだったけど」
「あー……多分焼けるとかで嫌って言うかもな」
話の内容は先程の勇さんがハワイに行くって話の続き。それに陽子が触発されたらしい。
ちなみに、話に綾が出てきたが、その当の本人は授業中に分からないところがあったらしく、烏丸先生に質問に行っている。

「健、陽子ー！」
「八坂くーん、猪熊さーん！」
「わっ！　何なに!?」
　と思ってたら、突然バーンと綾と烏丸先生が飛び込んできた。マジで何事!?
「な、何があったんすか」
「実はね、烏丸先生がギャグを言ったんだけど、私先生にツッコミ出来ないから、ツッコミ得意な健と陽子なら何とか……」
「おい！　俺をツッコミ要員とか何かと勘違いしてねえか!?」
「そうだそうだ！　ツッコミは健一人で十分だし！」
「何言ってんだ陽子ッ!?」
　どうやら先生がツッコミ待ちのようで、それを綾に頼んだが、それが出来ないから俺と陽子に頼んだらしい。
　が、それに対して陽子が自分が守備範囲外だと言わんばかりに俺を貶したような言い方をした。
　実に不憫……。
「やっぱり八坂くんなら私のツッコミを受け入れてくれる……！　トーテムボール！」
「何故にトーテムボールってどこに関係が……ハッ!?」

しまった、さっきまでのノリがまだ続いてたからか、烏丸先生のギャグにすら反応してしまった。
「流石八坂くんだわ！　どう？　先生の一発ギャグは」
「いや突然過ぎて何がなんだか……。何かあったんですか？」
困惑と同時に、流石に疑問に思い、先生に訊ねる。
先生曰く、最近では教師にも「笑い」が必要になってきて、面白い先生は好かれやすいとの事。
それに便乗して、先生が一発ギャグをかまして、それが綾に聞かれてしまったという。それが一連の流れである。
「うーん、確かに先生の気持ちは分からなくもないですが、さっきのだとスベるかもですよ」
いきなりバッと言われても、他の人には何のこっちゃと反応返しされて白けるのではと思い、俺は言った。
仮に、俺が他の人の立場に立っても、多分そう思うだろう。
「まあ、そうなの？」
「はい。けど一発ギャグとは別に、他の方法で笑いを取るって事もできますから、それをやってみたらいいんじゃないですか？」

とりあえず指を立ててそう先生に教える。笑いを取る方法なんていくらでもあるからな。冗談を言ったりとか。

「なるほど～。それは確かにいいですね。八坂くん、私が何をしたらいいか教えてくれる?」

「いや、流石にそこは先生が考えて下さいよ。笑いの取り方も色々ありますし」

先生が生徒に教えられたいとはこれ如何に。

「健、そりゃないだろ、からすちゃんに教えてやれよ」

「そうよ。健だからきっといい案を出すと思ったのに」

「この上ない理不尽を見た気がする」

二人に酷い言い草をされた。人には限度ってものがあるんだよ。

こうして、俺は先生に助言をしてひと仕事はしたものの、休み時間なのに休みが取れず逆に疲れてしまう羽目になったのだった。

☆☆☆

「来週から夏休みです！　皆で遊びに行きたいですねー」
　昼休み、忍がそんな提案をしてきた。
「はいはーい！　海行こうよ海！」
「え～っ、私は山がいいデス！」
　しかし、陽子とカレンの意見が分かれてしまった。
「山手線ゲーム『夏に行きたい所』！　海！」
「山！」
「海！」
「山デス！」
「それ以前に何で山手線ゲーム!?」
　反抗するにしても唐突すぎるぞ。
「あー……それはさっきしのと、アリスがしてたからよ。……暑苦しかったけどね」
「なるほど、つまりその影響って訳か。……いつものだな」
　綾が助言してくれて納得した。後、忍とアリスは相変わらず仲が宜しいでござんすね。
「や～～～ま～～～」
「ガンコか！」

おっとそうしている間に二人が取っ組み合いになってた。
「二人共ケンカは止めなさい！　……そうだわ。ここは間を取って家って事でどうかしら！」
「どことどこの間なんだ!?」
インドア派にも程があるぞ。
「ならばこうしましょウ。トランプで勝った人の言うコト聞くデス！」
「望むところ！」
カレンが懐からサッとトランプの束を取り出して、陽子に勝負を挑んできた。確かに平和的な勝負だがカレンよ、それずっと仕舞ってたの？
――ちなみに結果はカレンの惨敗。おい当事者弱いぞ。
「……山がいいデス……山がいいんデス」
「負けを認めろよ！　もー、仕方ないなぁ。じゃあ、山でいいよ」
が、カレンが呪詛みたいに泣きながら言ってたのが利いたのか、溜め息を吐きながらも陽子が泣くカレンに折れてそう言った。
「フジヤマ～！」
「それはちょっと!?」
カレンの規模はデカかった。

「ま、別に何処でもいいけどな」
皆と遊びに行けるなら、俺は何処でも良かった。実際、皆と遊ぶのは楽しいものあるし。
「じゃあ、家でいいわよね？」
「綾はインドアから離れて!?」
「なんで私に協力してくれないんだよ！　山手線ゲーム！」
「入り込む余地なかったから――――ってそっちかよ!?」
「ケンもフジヤマ行きマショウ！」
「いきなりは行けないから!?」
皆を尊重して言ったつもりだったのに、どうしてこうなった。
「はぁ、はぁ……」
やばい、ツッコミし過ぎて息切れと汗掻いちまった。
「ケン大丈夫？　汗拭いてあげるよ」
「おおありがとなアリス」
アリスがハンカチを手に俺の汗を拭いてくれる。ありがたい、好感度アップですよ。
「ケンがツッコミしずらいなと思ったから」
「台無しだよ!?」

ゲージダウンでした。

☆☆☆

時は少し過ぎて、夏休み。そんな訳でやってきました、山。勿論富士山じゃないけど。

「あ……暑い……」

「この暑い中、何で山なんかに」

陽子と綾が何これと言わんばかりに、しんどそうに歩いていた。

気持ちは分からなくもない。雲ひとつない晴天で強い日差しに当たりながら、山の中をひたすら歩く。

これには確かに薄着でも辛いものがある。熱中症とか脱水症状とかにも気を付けないとな。

「とりあえず日陰に行こうか……ってうおおい忍!?」

ミーンミーンと騒ぐセミとジリジリと真夏の日差しに参っている中、忍が長袖で純白のお嬢様のような服な上、フードを被っていて如何にも暑そうな格好でびっくり仰天。

「しの暑くないの!?」
「どう見ても山に行く服装じゃないぞ！」
綾と陽子も同じ事を思っていた。確かに驚く格好だが……何かのコスプレか？
「森の妖精……ですよ？」
「何言ってんだ！　頭やられたか!?」
息もはあはあと荒げてるし、結構な量の汗も滲ませている。無茶しやがって……。
「またの名を森ガールです！」
「それって森ガールなのか？」
「どうして山ガールじゃないの？」
綾の物言いに俺も頷く。忍が森に拘っている理由でもあるのかな。
「森の方が可愛いからです」
超単純だった。
「シノ可愛いよ！　妖精にしか見えないよ！」
「えへへ、そーですか？　はー、はー」
「こんな苦しそうな妖精嫌だ」
「確かに」
さっきから息が荒い忍に陽子はそんな事を呟き、俺も頷くが、アリスは忍の格好を素

直に褒めていた。
　純粋なアリスには痺れる憧れる。
「女の子はオシャレの為ならちょっとの我慢はいとわないのですよ！　お姉ちゃんが言ってました！」
　……何でだろう、勇さんなら今頃家でアイス食いながらゴロゴロしてそうなイメージを持ったんだが……きっと気のせいだろう、うん。
「別にその格好はいいけど、倒れるなよ」
「はい！」
　とりあえず、念には念を。俺は忍に注意を伝えといた。
「暑いけど登りきったら達成感ありそう！」
「そうだな」
「そうね」
「頑張ろー！」
「おー！」
　そんなこんなで俺達が意気込んでいた時、向こうの方から声が響いた。
「おーい！　そっちじゃないデスヨ、こっちデス！」
「カレン？」

「ここで渓流釣りが楽しめマス！　釣りの準備も用意してマス～。パパが！」
「こっちが目的だったの!?」
実に用意周到なカレンに綾が驚く。あれだけ山に拘っていたのはこの為か。それなら納得。
てっきり今ちょうど登山道と渓流の方向を道を示す札があって、俺達は登山道の方を行こうとしてたのだが。
ちなみに彼女の近くには送り迎えしたとされるカレンのお父さんがいらっしゃった。
「だからカレンはあんな朝早くから出てたんだな」
「そうデース！」
何を隠そう、山登りの今日、朝早くからカレンが「ケンー！　山登りの準備してくるデース！」とか言って、家を飛び出したもんだから何かと思ってたけど、この事だったんだな。
だから昨日電話してたのか。その相手はカレンの父さんだった訳で。頼んで貰った訳で。
俺がその事を言ってくれれば良かったのにと半ば呆れている中、俺の姿を見つけたカレンのお父さんが近づいてきて、話しかけてきた。
「やあ健くん。久しぶりだね、元気にしてたかい」

「あ、此方こそお久しぶりですカレンのお父さん。俺は大丈夫です」
俺は少し緊張しながらも受け答える。こうして直接話すのは俺が小学生以来かな。
「いやあ、急なお願いをして済まないね。君の家に居候させて貰って」
「あ、いえ。親が何も言ってこなかったのでびっくりしましたけど、気にしてないです」
話しているうちにあの時の事を思い出す。転校してきたカレンと会って、小さい頃と今とは違うなと思って、その後忍とのリアル鬼ごっこ……は余計か。
そして、家に帰ると姉弟にはカレンが居候すると伝えなかった親のびっくりサプライズ（？）などと、色々あった。
「そうか。何にせよ、君はカレンを救ってくれたんだ。その恩だと思ってくれるかな」
「救ったって、そんな大袈裟な……」
俺は苦笑いを浮かべるが、この人はきっとカレンを大事な娘だと思っているはずだ。しかも小さかった彼女を見失ったって事もあったんだから、そりゃ心配もするだろう。
しかし、腑に落ちないところもある。
「だけど、何で俺のところにカレンを居候させようと？」
そう、大事な一人娘を俺――――八坂家に居候させた理由だ。居候せずとも、親子で一緒に暮らしてもいいとも思うんだが……。
「なあに、君と君の父さんと縁もあるから、大丈夫だと思ったんだよ」

「どういう事ですかそれ……」
「ははは。それもあるが、一番の理由はカレンが言い出した事を尊重しただけだよ。友達のアリスちゃんと君に会いたいってね」
「ッ……」
その言葉を意味を理解して俺は恥ずかしくなってしまう。
「カレンは日本に来て日が浅い。だから誰かが側にいてくれたらって思い、君が適任だと思ったんだ。……急なお願いをしたけどね」
そうか。もし俺が小さい頃、カレンを慰めてなかったら、今頃こうしてカレンとの生活ができなかった。
ただ、俺の家に居候させたカレンのお父さんの理由も何となく分かった気がする。
「しばらくの間、カレンを宜しく頼むよ」
「は、はい。俺が務まるかどうか分かりませんが、俺にできる事なら」
「堅いよ。もっと柔らかくてもいいんだよ。リラックスリラックス」
「あっはは……」
思いのほかカレンのお父さんがフレンドリーだった。
何にしろ、こうして直々に任せられたんだ。上手くやっていこう。
「おーい健ー！　何してるんだよー！　こっちきなよー！」

話をしていたら、向こうにいた陽子に呼ばれた。
「ほら、君も行っといで。呼んでるよ」
「はい」
俺は軽くカレンのお父さんに礼をして、呼ばれた方向に走っていった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９　休日の過ごし方？　後編

「健、カレンのお父さんと何を話してたんだよ？」
「まあ、色々とな」
夏休み、俺達は皆で企画した山へと遊びに来て、その際にカレンのお父さんと話をした。
内容としては、簡単に言えば〝改めてカレンを宜しく〟という事。この一言に尽きる。
確かに大事な一人娘を我が家に居候させてるんだ。勿論それを蔑ろにするつもりはないけど。
そんなこんなで話をしてたら、陽子に呼び戻されるような形になった。確かに目的は山遊びだったな。場は渓流だけど。
折角皆と遊べるんだから、俺も羽目を外す……という訳でもないけど、思い切り楽しもうと思う。
「ところでアリスは釣りすんのか？」
ふと疑問に思った事として、アリスの方を見ると、釣り竿を持っていた。多分カレン

のお父さんが持ってきたものだろう。
「うん、そうだよ～」
「確かアリスの家の近くには川があるんですよねー」
「うん！　釣りの事なら任せて！　イギリスにいた頃はちょっとぶいぶい言わせてたんだよ！」
「ぶいぶい？」
へえ、そりゃ頼もしいな。アリスにもこんな意外な特技があった事に少し驚いたが。
後、間違った知識だろうが、ぶいぶい言わすのは不良の言葉だからな、忍。まともに捉えるなよ。
「私も釣るデスー。釣った魚でお昼ご飯デスーー！」
と、そこへ同じく釣り竿を持ってきたカレンが来た。
しかし意外。多分偏見だけど外国人が釣りをしてるのってあまり見ないな。
確かよく分からないけど規制や法律とかがあって、漁業は禁止されているんだっけ？
流石にそれだけじゃないんだろうけど、そういうのも含めてあまり見ないな。あるとしたらテレビでぐらいか？
まあ今回は遊びに来てるんだし、難しい事は抜きにしていこう。
「大きいの狙いマース♪」

純粋に楽しそうにしているカレンを見ていたら、何故かアリスがキッとカレンを見ていた。
対抗心だろうか。そんな風に考えていると、アリスからゴオオォと擬音が付くような何やら炎のようなものが出ていた。
「あっアリス、暑いです……」
「何故だかそう思ってしまう自分が怖い」
忍は単に真夏の温度でそんな厚着に近い服装だからそう感じるだけかもしれないが、俺の方にも伝わってきた。
……慣れなのか知らんが、そう感じた自分が怖く感じた。
そんな、内心で恐怖（笑）を感じていた俺に、カレンが質問してきた。
「そういえば、ケンは釣りしないんデスか？」
「ん？　釣り？　釣りなら少しだけやってた感じかな」
釣り自体は父さんが趣味の一環で付き合ってやってたって感じだな。小学生の頃。
その後は頻繁にって訳じゃないけど、休日たまに父さんと一緒に釣りをするようになった。
「ケンも釣りやった事あるんだね。どれくらい釣れたの？」
「最初は小さいの一匹だけしか釣れなかったさ」

初めて釣りをやった時は、小さいの一匹だけしか釣れなかった。ま、一匹だけでも十分だったし、何処かやりきった感はあったな。

「一匹だけでも凄いよケン！」

「そ、そうか？」

たかが一匹だけしか釣れなかったのに、何故かアリスに褒められてしまった。何か照れるな……。

「わーい！」

「おぉ、カレン釣れたか」

アリスと話をしてたら、カレンがまず一匹目を釣って喜んでいる様子が見られた。

しかしその後も絶好調だったようで――――。

「また釣れまシター！」

間もないうちに二匹目を釣れて。

「またゲットー♪」

三匹目と、次々と釣っていったのだった。

「ケンどうデスか？　イッパイ釣れまシタよ！　どうデス？　スゴイデス？」

「お、おおそうだな。カレンは凄いぞ～」

「エへへ～」

カレンが魚が入ったバケツを俺に向けて掲げながら得意気な表情をし、何故そこまでと思いながらも俺は褒めてやる。
多分だけど、カレンはアリス程釣りはしないんだろう。だから、こんなに喜んでいるのかもしれない。
一方、そのアリスはというと。
「……」
俯いて、項垂れたまま釣り糸を垂らしていたのだった。
何か……南無。
「わぁ～っ、カレン凄いです！」
「えへーっ、釣りは小さい頃カラ得意だったデス～」
成果を上げられていないアリスを尻目に、忍がカレンを褒め称えていたのを見る。
ていうか、カレン釣り得意だったのか。隠れた能力発揮ってか？
それと忍、少しはアリスの方を励ましてあげたらどうなのよ……。
「ア、アリス……こんな日もあるって、な？　だからもうちょっと我慢して――――」
「ケン、パス！」
「わわっと!?」
何か知らないけど俺がアリスを励まそうとした時、俺に釣り竿を突き出されるように

渡され、驚きながら両手で受け取る。
その後アリスは『わあああん！』と泣きに近い叫び声を上げながらザバザバと川の中に入り走っていく。
「アリス!?」
「待っててシノ！　今すぐおいしい魚を捕まえるから！」
「手掴みでか?!」
「その気持ちだけで十分ですよ!!」
突飛な行動に出たアリスに俺と忍はすぐさまストップを掛ける。
手掴みで取るだなんて熊じゃあるまいし……。いや、陽子なら出来るかもしれない。苗字が〝猪熊〟だから出来るかもな？
「おおっと手が滑ったぁ！」
「え――――うわぁぁっ!?」
不意に見ると近くから陽子の声とヒュンという風切り音と共に、顔面に向かって何か割と大きめのナニカ(石)が飛来し、反射的に態勢を低くしてそれを避けた。
あ、あぶねー……。もしかして今のは陽子が投げてきたのか？　綾と昼食の準備をしていて、そこで川原から十メートル以上はありそうな距離で？
「済まーん健ー。今何かついカッとなってやったー」

「それにしては随分的確ですね!?」

陽子は手を振りながら棒読みで言う。だが俺は見てしまった。俺が振り返った瞬間に陽子が投擲モーションを取っていた事を。

今のは確実にｈｅａｄ　ｓｈｏｔを狙っていたな……的確な投石で（白目）。

女の勘ってどうしてこうも鋭いんでしょうかねぇ……。今後はあんな考えは控えよう。

……ところでこの持っている釣竿どうしよう。

その後、やらないよりはマシという事で、俺もカレンと同様に釣りをする事になったのだが、カレンと同じくらい釣れて、アリスに『なんでそんなに釣れるのー!?』とポカポカ叩かれたのは割愛。

☆☆☆

『いただきまーす!』

お昼。先程釣った魚を焼き、皆で集まって昼食を摂る。

「はむっ……んん～！　美味しいデス！」
「だな。それに自分で取れたものを食うのはまた違う美味さを感じるよな」
「あ、それ分かるー！」
「陽子は綾の準備手伝ってただけだろ……」
そんな感じで皆と話し合っていると、此方に対して重い視線を感じた。
見ると、やはりというべきかアリスが俺を恨めしそうな顔で睨んでいた。
それもそうだろう。あの後、結局アリスが釣った魚はゼロではなかったが、一、二匹ぐらいだ。しかも途中参加の俺が偶然にもアリス以上にかなり釣れたという。
これには流石に同情せざるを得ない……ってこうなったきっかけ俺じゃん。
取りあえずこうなったからには仕方ないと収拾して、アリスに手で「ごめん」のジェスチャーを取ったが、確か外国人は拝み手のようなジェスチャーをしないんだっけか？
その事に疑問を持ったが、アリスの表情が少し緩んだ事から、多分理解したのだろう。
アリスの日本好き感性が功を制したのかな。
でもそれだけでは何か悪い気もするし、後でアリスにちゃんと謝ろう。
そんな風に考えていると、綾が荷物から風呂敷包みを取り出す。
「あ、そうだわ。私、皆にお弁当作ってきたの」
「わーい」

今回釣った魚に加えて、綾が弁当を作ってきたという。それに対し何故か陽子が棒読みで言う。

「何よ。少しは上達してるんだから！」

どういう事かというと、以前忍の家に招かれた際、綾が弁当を作ってきて皆で食べた事があった。

その時、見た目は豪勢だが味付けは薄いという、アリスとカレンのずばっと純粋な反応があった。

俺はその事にずっとツッコんでいた記憶がほとんどで、あまり覚えていない。

唯一覚えているとしたら、陽子の『いいお嫁さんになれるなー』という冗談を真に受けてから、俺を見て『そんな事ないわよバカッ！』って滅茶苦茶良い笑顔だった事ぐらいか。

「まあまあ。折角作ってくれたんだから食べない訳にはいかないだろ？」

「それはそうだけどさ……」

「健……」

折角綾が作ってくれたから、それを無碍にしない言い方を陽子にすると、綾は何故か綻びながら俺を見る。

そして、開けてから見ると、多分前回と同様の豪勢さ。とても美味そうだ。

陽子は弁当の中身の一つである芋を取ると、意を決したように食べる。
「ほんとだ美味い！」
「おいしいです綾ちゃん！」
陽子と忍はそれぞれ素直に美味いという感想を言う。どうやら高評価だったようだ。
「綾は私のアレになって欲しいな～」
「アレって何よ」
「えっと、お母さん！　おふくろの味！」
陽子は笑いながら綾に告げていた。対して綾は何処となく呆れながら見ていた……ような気がした。
二人の様子を尻目に、俺も弁当の卵焼きを取って食べてみる。
「んっ、マジ美味い！」
「本当？」
自分の口から出た感想に、綾が反応する。
「ああ、本当だ。味付けも良いし、全然問題ない。毎日食べたいぐらいだ」
「ま、毎日!?」
俺が最後の方で笑いながら冗談交じりで答えると、綾が顔を真っ赤にして驚く。
今のは冗談のつもりだったんだが……。

「い、いや毎日は流石にじょうd――――「抜けがけはずるいぞ健！　私も綾の飯を食べたい！」……抜けがけってなんだよ!?」

慌てて俺が言おうとすると、陽子が突っかかってきた。何なんですか一体。

「け、健がそんなに食べたいなら考えてやらない事もないわ」

陽子の言った事はスルーしたのか分からないが、綾は依然として顔を赤くしながらそっぽを向く。

「い、いやそのだな……」

「綾ちゃんにそんな事言うなんて健君は大胆ですね～」

「お前に言われたくない！」

突拍子もない事を言う忍に言われたくない。

「ＨＡＨＡＨＡ、さすがケン！　私達にできない事を平然とやってのけるッ！　そこにシビれる、あこがれるゥ、デース！」

「カレンもノリに乗るなぁ!?」

家にある某スタンド使いの漫画の影響を受けたカレンが、外国人笑いを含めながら言ってのけた。

うーん、この訳が分からない流れ。マジで冗談を言っただけなのにどうしてこうなった……。

☆☆☆

「ふう……」

俺は川原の岸辺で座りながら息を吐く。

先程の流れから取りあえずは解放され、ツッコミ疲れで今こうして一休みしている。

忍はアリスと、綾は陽子といった感じで二人ひと組の形で一緒にいる。カレンは……父親のとこかな。

俺はそんな彼女らの様子を見ながら半、日向ぼっこをしている。……決して仲間外れという訳ではない。多分。

「虫いっぱいいるね」

「そうですねー」

お、あの声はアリスと忍だ。どうやら夏ゆえに周りに飛ぶ虫……主に蚊に飛び回られているらしい。

全く迷惑な話だ。予め虫除けスプレーと蚊取り線香持ってきて正解だったぜ。

そこで、不意にアリスが忍を見て何か気付いたらしい表情をすると。
「シノ、危ない！」
アリスが忍の頬を思い切り叩(はた)いた。って、おおい!? 今のは蚊を注意してやったんだろうけど、やり方が唐突すぎるぞ！
「アリス……？」
「ごっ、ごめんね！ 蚊が……蚊がぁぁぁ!!」
アリスも震えた声（多分涙目）で慌ててプルプルと震える忍をフォローする。それこっちから見てもビックリしたわ。
ふー……。それにしても、声に出さずとも、内心でツッコミを入れるとは。俺もツッコミを控えた方が良いのかな？
「にしても、暑いな……」
流石にさっきの内心ツッコミの影響はないものの、こうゆっくりしててもじんわりと暑さが自然と湧いてくる。
更に地べたに座っているだけでも、地面が陽光に照らされているので暑さが伝わってくる。心なしか陽炎も見える気がするし。
こうしていても暑さに参るだけなので、少し趣向を変える事にする。
俺の格好は、半袖のYシャツ一枚に膝までのズボンを履いているが、靴を脱いで裸足

になり、足を捲ってから川の方へと向かう。
　川に入ると、それが功を制したのか、膝までいかないが、足に水が浸かっていく。
「あぁ気持ちいぃ～……」
　足を通して冷たい温度が伝わり、気持ち良さを感じてくる。そのせいか、自然と声が漏れて出た。
　所謂、足湯の真逆の温度の感じだ。よく見ると、川に何人かの小さい子供がいるようだが、水着にならずとも、これはこれで気持ちよさを感じる事ができる。
「あ、健」
「ん？　ああ綾と陽子か」
　足水（造語）に浸かっていると、そこに綾と陽子の二人がやってきた。
「何やってんだー健？」
「見れば分かる通り、足を水に浸からせてる。水着無いし、だからと言って何もしないのも暑いだけだし、それよりかはマシと思ってな」
　本当なら首に冷たいタオル巻いたりするのも効果的だとは思うけど、暑さのせいでそれすら面倒だと思ってしまっているからなぁ。
「そうだよなー……。こんな事なら水着持ってくれば良かった！」
「もー、小さい子供じゃないんだから。……それに健に見られると恥ずかしいし」

陽子が川で遊んでいる子供達を見て「いいなー」と言うが、綾が溜息を吐きながらそう言う。

そんなに泳ぎたかったのか？　陽子の奴。

あと最後の方綾が何か言ってた気がするけど気のせいか？

「飛び込み場所から一緒に飛び込もうとしたら綾に止められたし」

「だからあそこからは行ける訳ないでしょ……」

陽子はそう唸るものの、綾からは呆れられる。

もしかして、少し遠めだけど、あそこにある高さ三メートル以上はあるであろう飛び込みポイントから飛び込もうとしたのか？

「あれの事か。やろうと思えばできるかもしれないけど」

「おお！　健ならそう言ってくれると思ってた！　じゃあ早速……」

「水着無いんで行きません」

陽子が俺の言葉に期待の眼差しを込めて言うが、〝止まれ〟のように手を出してピシャリと言った。

そんな風に喋っていると、横からカレンが川に向かって走っていく様子が窺えた。

「ここは水遊びで我慢しまショー！」

「おおっ、カレンナイスアイディア！」

カレンが「青春っぽいデス！」とか言いながら俺達に水をバシャバシャとかけてくる。
陽子もそれを喜々とした様子で、裸足になると同時に川へと走っていった。
「ま、服のままじゃ入れないし、それはそれでありかもな」
俺は独り言のようにポツリと呟いた。
そんな風に二人がはしゃいでいる光景を見てると、不意に綾が俺の横に座り、同じように足を水に浸からせた。
「……綾は行かないのか？」
「私は……別にいいわよ。元々あんな風にはしゃげないし」
綾は、何処か物憂げな様子で、二人を見つめている。
「そうか？　綾だったら何だかんだで楽しそうにやると思うけどな」
「何を根拠に……。やらないわよ。そういう健だって、陽子やカレンと一緒に遊ぶと思ったけど？」
「はは、たまにはこういう風に眺めるだけでも乙なもんかなーってな」
「……そうね」
そう言って、二人で笑い合っていると、陽子が俺達に向けて手を振っていた。
「おーい！　健も綾も来いよー！気持ちいいぞー！」
「おっ、陽子がお呼びだ」

俺は背伸びをすると、足を川に浸からせたままその場に立ち上がる。
「ちょっと……健？」
「ほら、折角だから綾も行こうぜ。陽子にお呼ばれしたんだしさ」
俺は綾に向けて、一緒に行こうというサインで手を差し出す。
「……少しだけよ」
綾は何故か頬を赤くしながら、手を躊躇いがちに差し出そうと少々戸惑っていたが、そう言いながら俺に手を差し伸べた。
俺は遠慮がちに出された綾の手を握る。……今思ったが、姉さん程じゃないけど我ながら大胆だよなこれ。
綾の手は女の子特有……なのかは知らんけど俺と比べたら小さな手だ。不意に中学校の頃の記憶が蘇る。
あの時、右も左も分からずおろおろしていた綾を、俺はリードしていた。その時も、こうして手を握っていた。
あの時は別に手を握るくらいどうって事ないくらいに思っていたが、今考えると相当大胆だったか、あるいは楽しむためにやっていたか。
俺は後者だと思う。綾を場に馴染ませるために、楽しませるためにやっていた事だ。大袈裟かも知れないけど。

「……どうしたの、健？」
「あぁ……いや、何でも」
いかんいかん。つい物思いに耽ってしまった。
ともかく、中学校の頃の記憶は未だに残っているが、こうした思い出があった、という事だけを伝えておく。……って、だから誰に言ってんだ俺は。
今は皆で遊ぶ事を考えよう。
俺達は陽子とカレンの方向に向けて、一緒に歩みを進める。……のだが。
「綾、大丈夫か？」
「え、ええ。何とか……」
綾はスカートの裾を掴みながらゆっくりと進んでいる。加えて、スパッツも履いているから、さっきの陽子やカレンみたく走ったりしたらすぐ濡れるだろう。
「健！　綾ー！　早く～！」
「まあ待てって！　今そっちに行くから――――」
その時だった。横でバシャーンと水飛沫の音が聞こえたのは。
「「え――――」」
俺と綾は音がした方向を見据える。するとそこには――――忍がラッコの如く川流れ

していた。
「忍――――!?」
「シノ――――!!」
俺と側にいたアリスの叫び声が木霊した。
すぐさま、川の流れに従いながら流れていく忍を救助する。
……余談だが、忍は救出されるまで目を丸くしていたのは何故だろう。そこは分からない。
「服が水を吸ってすごい重さに……」
ぼたぼたと水を垂らす純白の妖精服（？）を掴んで泣き顔をする忍。
尚、一応助けたのは俺で、川から救うのと染み込んだ濡れた服を掴んだ影響で、大した事はなかったもの俺も濡れた。
服以外大事に至らなかったから良かったものの……。
「シノ大丈夫？　ケガはない!?」
そんな間違いなくブルーな忍にアリスが慌てて駆け寄っていく。
「おい、そんな慌てたら……！」
そこで俺は勘付いた。どうして俺達は川の岸辺にいたんだろう。後一歩踏み出せば川に入る位置で。どうしてそこでアリスに落ち着くように言わなかったのだろう。

焦って、たたっと駆け寄る彼女にもっと注意していれば。
「あっ」
「ｏｈ？」
「えっ」
「お？」
「ちょっ」
　アリスが石で足を滑らせたのを初めに、カレン→綾→陽子→俺の順に、引っ張り合いに発展するという事はなかったのに。
『わぁ――――っ！』
　皆一斉に、川に落ちる事はなかったのにな。
　こうして、全員びしょびしょになる羽目になってしまったのだった。
「も～～～っ」
　綾は服全体が濡れてしまった事に不平を垂らす。
「ごめんね、みんな」
　アリスが、川に浸かりながらも謝罪の言葉を言った。
　尚、脳天気にもカレンはＨＡＨＡＨＡＨＡと外人笑いをしていた。
「あはは、まー夏だしすぐ乾くよ！」

陽子がフォローするように、そう笑って言う。
「でも汚れてしまった服は戻らないです～……。うぅ、ショックです……」
「そんな服着てくるから！」
「服なんてなくても、シノは妖精だから大丈夫だよ！」
嘆く忍を、陽子とアリスが宥める。ただ、アリスの慰めは何かズレてる気がする……。
そんなハプニング紛いな出来事がありながらも、山での遊びは、とても有意義なものだったなと感じたのだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０　姉妹とは?

「あれはわたしとカレンがベンチに座っている時だったの……」
「え、待っていきなり何その流れ」
「という訳で回想スタート!」
「聞いて!?」

「ねえねえ、あの子達って姉妹かなー」
　それはふと、わたしがカレンと一緒にベンチに座っていた時、道を歩いている人達にそう言われていた。
　他にも「そっくりー」だとか、「どこの国の人?」と言われていた。
　別に悪口とかそういうものじゃないから悪い気はしないけど。
「日本ではわたし達よく姉妹に間違われるねー」
「きっとアリスがちっちゃいからデスね!」
　そうわたしが言ったら、カレンが小馬鹿にしたように笑いながら言った。
「えっ?」

「同い年に見えないデスー」
カレンにそう言われてちょっとムッときた。
「なっ、何言ってるの、お姉ちゃんはわたしだよ！」
「えーっ、アリスは妹デスよ！」
「違うよわたしがお姉ちゃん！」
そう言い合っている内にざわざわと人混みができた事を知ったのは、わたし達が落ち着いた後だった。

「……と、夏休み中こんな事があったんだけど！」
「そ、そうだったのか」
本当にいきなりだった。アリスがナレーションっぽく回想を始めたと思ったら、夏休み中に起こった出来事だった。
しかし、どちらが姉かについて言い合ってたのか。素朴な疑問だがどちらが姉かと言われれば――――。
「うーん、多分誰に聞いてもアリスの方が妹って答えると思うなー」
今の考えを代弁するかのように陽子が言った。アリスには悪いけど。
「そうね。可愛い妹……みたいな」

「ほらーっ！　妹デス！」
綾やカレンも同意していた。逆にアリスは困っている表情だった。
「全世界の妹……」
「全世界の!?」
忍が目を輝かせながら言った言葉に、思わず俺が反応してしまった。
「ケンはどうなの!?」
おっと思わず俺にも意見を求めてきた。
「悪いけど、俺も妹かなって思う。ていうか、なんでそんなに姉にこだわるんだ?」
「だって……だって昔は……」
「健君、小さい頃はアリスの方が大きかったんですよ。写真で見ました」
アリスがどう言おうか困っていると、忍が代わりに話してくれた。
そうだったのか、小さい頃は自分が大きかったからそれを譲らないと。
「昔は泣きながらわたしの後ろをついてきたのに！」
……前に自分もその事に似たような事があったから、何か想像できちゃうな。
「……。もーっ、こんなに大きくなっちゃって！　おねーちゃんは悲しいよ！」
「?」
と、アリスが何か考える間があった後、カレンに向けてそんな事を言った。言われた

当人は疑問符を浮かべていたが。
てか、今の間は何？

???

「最近日本語に慣れすぎて、英語がカタコトなんデスよー」
「そんな事ってあるのか？」
カレンがふと、そんな事を言ってきた。ごくたまに英語を話している場面はあるが、別にカタコトでもないような……。
「でもカレンは日本語もカタコトよね」
確かに綾の言う通り。まだ何処か不自然な感じがするというか。
「何語なら上手く喋るんだよー」
「陽子、そう言ってやるなって」
何かちょっと煽りに聞こえた笑いながら言う陽子に軽く忠告。
が、カレンがちょっと考える素振りをすると。

――――場所は変わって図書館。
「アリスー、勉強教えて下サイー」
「いいよ。何の教科?」
「英語」
「えぇー!?」
というやり取りがあったとか。
ハーフとはいえ、笑いながら言う事じゃないでしょカレンよ……。
実はついこの間、テストがあったのだ。その答え合わせついでに図書館に来ている、という訳だ。
意外な事にカレンが英語の点数が低かったらしく、こうしてアリスに教えて欲しかった……らしい。
「カレンったら解答欄ずれて答え書いちゃってるよー」
「せっかく合ってるのに!」とテスト用紙を見ながら言うアリス。確かにそれは勿体無いな。
「アリスは頭良いんですよねー」
忍の言う通り、綾と同様に成績が優秀だ。こないだのテストでも良い点を取ってい

た。
「アリススゴ〜イ！」
「！」
忍が言った事を受け止めたカレンが、目を輝かせながら素直にアリスを褒めた。
多分だけど成績は自分の方が上、と思っていたのかアリスはえへへと照れてはいたものの———。
「私も一緒に勉強します！」
てへへーと忍が笑いながらテストプリントを持ってくる。
「シノ、私と同じところ間違ってマス！」
「本当ですねー」
きゃあきゃあと笑いながら言い合う二人。いやそんな笑い事になんないとは思うんだけど二人共……。
「辞書取ってくる！」
しゅんと落ち込んだ気分でアリスが席を立つ。何か蚊帳の外のような状態だったからなぁ。
「分からないとこあったから俺も行くわ」
「あっ、私も行くデス！」

俺とカレンも席を立つ。
それから俺が探している中、近くでアリスが「ん～～～っ」と棚の一番上まで手を伸ばしていた。
「私が……」
「いいよっ自分で取れるからっ」
「だから私が肩貸すデスよ!」
まだ自分が姉だという事が抜けきれていないのか、アリスがぷんぷんと何処か可愛らしい怒りを見せたが、カレンは肩車で助けるという。
「これで取れマス」
そう言ってアリスを肩に乗せるが――――。
「あぶっ、危ない!」
「!?」
アリスが態勢を崩した。流石に見捨てる訳にもいかず、カレンが立ち上がる時限りだが、アリスの背中を俺が手で支える事にした。
そうして無事、辞書は取れたのだった。
「あ、ありがと、ケン」
アリスが何処か申し訳なさを含めたお礼をしてきた。きっと、間接的にとはいえ手で

支えた事だろう。
「いいって。ああでもしないとアリス怪我すると思ってな」
「流石デス！　ケンの前世は王子だったのデスね！」
「んな大袈裟な。てかカレン……また少女マンガ読みすぎたな」
今カレンが言った事。実はカレンは最近マンガを嗜んでいる。正確にはホームステイするようになってから、だが。
少年少女マンガは特に指定なく読んでいるから多分その影響だろう。
「まあいいや。俺は他に探すもんあるからあっちに行くわ」
そう言って移動しようとしたら――――。
「エロ本デスか？」
「えっ!?」
「違うわ!!　参考書だから！」
とんでもない発言しやがったよこの子。アリスは一瞬で顔赤くなったし。
多少ながら血が上がった事で、後になって図書館で大声だした事に気付く。罪悪感が……。
と、参考書を探していると、同じく参考書を取ろうと綾が手を伸ばしているという、先程の似たような光景が。デジャヴ？

「綾、取れないのか?」
「え」
周りに誰もいないし、とりあえず俺なりの善意で助けようと声をかける。
すると、突如として綾が顔を赤くし荒げた声を出す。
「じっ、自分で取れるわよ!　肩車なんかしなくても!」
綾、実はさっきの光景見てたんじゃないのって思えてしまう。
「いやしないぞ、恥ずかしいだろ……」
そのために踏み台を持ってきた。
「えっ、しないの?」
「しないわ!」
恋人や同性ならまだしも、流石にねぇ。

???

「ふうスッキリ……ってあれ?」

中休み。トイレで用を足し、教室に戻ってくるとアリスが窓際で黄昏ていた。
何か様子がちょっと変に思い、声をかける。
「アリス、どうした？」
何か溜め息も吐いていた。
「うん……ちょっと……」
アリスもなんというか、物憂げしている様子。
「アリスが良ければなんだが、話してはくれないか？」
何か悩んでいるのであれば、力になってあげたい。そう思っての言葉だった。
アリスは少しの間逡巡していたが、話してくれた。
――何でも、つい先程アリスとカレンで忍にサプライズプレゼントをしたという。
これはアリスの提案で、彼女は扇子を、カレンが外国の切手だったらしい。
で、アリスのプレゼントを喜んだが、カレンのプレゼントの方がもっと喜んだという。
その際の忍は「エスパーみたいですー！」……との事。
「それで、わたしがカレンみたく超能力が使えたらなと思って」
「いや普通使えないからね？　あとそれ超能力じゃないからね？」
アリスがガーンとくる理由は分からなくもないけど、どうせ忍の事だから外国のものが欲しかったんだろ。丸分かりだ。

「まあでも、それはちょっと酷いよな。忍に注意してくる」
今は教室にいない忍に注意しようとアリスに背を向けると。
「ケン、それはダメ！」
制服の端をアリスに掴まれていた。
「え、でも……」
「シノが悪い訳じゃないの。でもやっぱり、カレンの事をシノは……」
そうして再三溜め息を吐くアリスにどう声をかけたらいいか迷っていると。
「あ……アリス！」
後ろから聴き慣れた声が。忍だ。
いきなり声をかけられたアリスはビクッとした。
「さっきはごめんなさい！　切手に舞い上がってしまって。アリスもプレゼントくれたのに……」
俺がさっき注意しようとした事を忍は謝罪した。別に伝える必要なかったな。
ちなみに俺は、割と大事な話だからさり気なく気を遣って、離れたところで見ていた。
「でも……シノはカレンのプレゼントの方が嬉しそうだったよ。もしかしてシノ、シノは……カレンの方が好きなの!?」
「！」

もしかして、これはアカンやつ？
「え……えっと？」
軽く泣きながら唸るアリスに、キョドる忍。
「!?　!?」
「なあ健、何だこの修羅場？」
綾も陽子もタイミング悪く今の様子を見に来たようだった。
その後、更にカレンも合流して、どうしてそうなったと言わんばかりに二人して忍を取り合っていた（その時の忍はめっちゃ穏やかな笑顔で、綾曰く台風の目）。
「アリス朝の事まだ気にしてるデス？　私が妹でもＯＫデスよ？」
「そっ、そーゆー問題じゃないのっ」
どうやらカレンの言う通り、朝話した事について気にしていたようだ。
「二人共！　ケンカはダメですよ！　アリスはアリス、カレンはカレンです」
が、そこへ忍がキリッと真面目な顔で言い、そして言い放った。
「みんな違って――みんな良いんです」
パァーッとまるで後方に光源があるかのように、忍は輝いていた。
二人はその様子を茫然自失といった感じで眺めていた。が、更に忍は続ける。

「カレンはアリスを追って日本に来たのもそうだし、アリスがカレンの事が大好きなのも私知ってますよ！」
「シノ……」
軽くアリスが忍に照れていると、今度は忍とカレンを交互に見据える。
そしたら二人をぎゅーっとお互いの腕を抱きしめる。
「シノも好きだけど、カレンも同じくらい好き！」
「アリス！　私もアリス大スキ！　シノの事も大大大大スキ！」
「『大』が多いよ!!」
「えー」
「うふふ、ケンカする程仲良しさんですねー」
と、俺が見ていない間にいつの間にか仲直りしていた。
後、朝から二人が一触即発の雰囲気だったと見破った烏丸先生が、カレンに癒しアイテムであるという猫耳をプレゼントされたが、仲直りしていた時点での話だったので、意味なかったらしい。

???

「もうすぐ秋だなー」
「そうねー」
放課後。皆して帰ってる最中にそう呟いた。それに綾も便乗。
「健、お前何お爺ちゃんみたいな事言ってんだよ」
「しっつれいなー!」
陽子にそう言われ、思わず反応してしまった。
「でも確かに、少し肌寒く感じてきたね」
「そうですね〜」
アリスも忍も、夏の暑さを感じてきてなくなっていたのか、そう言っていた。
いつの間にか夏も終わって、いよいよ秋になる。木の葉も散り、いよいよ冬に近づいてるって時間が湧く。それが秋……って何語り部みたく言ってるんだよ俺は。
「こういう時は、肌で温めればイイってパパから聞いたデース!」
「うおぅ!?」
そう思ってた矢先、カレンが勢いよく俺の腕に抱き着いてきた。いや、しがみついたっていう方が正しいのかな?

ていうかカレンのお父さんは娘に何変な事言っちゃってんの!?
「あーっ！　健君ずるいです！　アリス、私も！」
「シ、シノ……くすぐったいよ～」
あっちで忍からアリスにくっついて頬撫でしている……アレは肌で温め合うってより、まるで飼い主に懐いた猫だな。
「ていうか前から思ってたけど、カレンってやけに健に懐いてるよな」
「そうね。まるで健に飼い慣らされてるみたい」
「失礼だなオイ！」
さっきから俺を苛めたいんですかあなた方は！　陽子が切り出した事に、今度は綾に失礼な事を言われた。
ふと見ると、忍が頬を膨らませながら言った。
「むう～。私だってカレンとベタベタしたいです」
「いや公共のど真ん中だろうが。それに忍にはアリスがいるでしょ」
「そ、それにカレンが健君とくっついてると金髪の色が落ちていくと思ったら……！」
「訳わからん!?」
すっげー理不尽な事言われた。泣いていい？
「でも、ケンとカレンを見比べても、ケンが兄でカレンが妹って感じがするね」

「あー確かに。分かる分かるー！」

アリスが言い出した事に、陽子が笑いながら同意する。そうかな？

「まあでも、わたしが姉って事は譲れないけどね！　ふふん」

「ホント揺るがないよなぁ」

アリスがドヤり、陽子が苦笑いでツッコんだ。でも済まんアリス、今のドヤ顔可愛かった。

「私とケンは一心童貞デース！」

「こらカレン!?　それを言うなら『一心同体』な！」

カレンは前より日本語に慣れつつあるが、たまにこういう爆弾発言をしてくる。俺が即言わなければ一瞬で辺りが冬景色に変わっていたかもしれない。

「本当に仲いいわよね。もしかして、しのみたく一緒にホームステイしてるとか……？」

『!?』

あっ、また爆弾発言を。それも綾の追撃。

「あー……えっと……」

俺がいつか明かさないととは思ってたが、まだ覚悟してない時にいきなり言われ、戸惑ってしまう。

綾の投下により、カレンを除いたメンバー（俺含む）が驚愕した。そして、約一名以

外が俺に視線を一斉に向けてきた。
「健君……本当に?」
「私達に今まで隠してきて?」
「しかもよく考えれば男女の二人……」
うぐ、三人の視線と言葉が痛い。誤魔化したいが事実は事実なので言葉に困る。
「わ、わたしとシノとお揃いだねっ」
ありがとうアリス。毎回助けられてる気がする。
だがバレたのなら仕方ない。溜め息を吐きながら正直に言う事にした。
「はぁ……こんな形でバレるとは思わなかったが、確かにその通りだ。俺、ていうかカレンの家族側の提案で、俺ん家にホームステイする事になったんだ」
「だから家も同じ方向だったり」
「山登りの時にカレンのお父さんと話してた訳だな」
綾と陽子が言う。二人の意見も当てはまるから頷く。
「健君～どういう事ですか～！　私を差し置いてカレンと二人きりだなんて～！」
「ヴェアアアア忍落ち着けぇ!?　揺らすなぁぁ！」
忍が俺の体をグワングワンと勢いよく揺さぶる。嗚呼、視界が上下に――――。
「って！　違う！　二人きりじゃない！　姉さんもいる！」

忍が言った事に何とか揺さぶりを留め、且つ俺は言い放った。
「ああ……そっか、瑠美姉がいるなら大丈夫だな」
「ええ……なら問い詰めなくても良いわね」
良かった。どうやら姉さんがいる事で、変な気を持たれるっていう事はなさそう、だな。てか綾よ、問い詰めるって何。
まあその姉さんにもよく襲われてるけどね！　……俺の体持つかなぁ。
「うぅ～」
まだ忍は納得できず唸っている。が、次の瞬間にはとんでもない事を言ってくれやがった。
「なら！　私とアリスで！　健君の家に住みます！」
「シノ!?」
「おい馬鹿やめろ!!」
まーた忍のキャラ崩壊始まっちゃった。
こうして何だかんだありながらも、何とかホームステイしているのを打ち明けられたのは良かった。
後、断固として付いてこようとしているこいつ(忍)をどうにかしたいです、まる

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１　テストのお時間

「秋ですね～」
「んだな」
忍が外の景色を見てそう切り出す。
確かに木の葉が紅色に染まったのを見て、秋だという事が実感させられる。
「秋といえば――」
陽子がそう言ったのと同時に、俺を含んだ各々が言い出した。
「芸術の秋」
「食欲ー」
「紅葉～」
「読書の秋？」
「スポーツ！」
忍、陽子、アリス、俺、カレンの順に言った。
「アヤヤは？」
またも〝ヤ〟が一つ多く言ったカレンが、参考書を片手に持つ綾にも意見を求める。

「勉強の秋」
「えー、もっと楽しい事考えよーぜ！　綾はマジメだなー」
陽子が不平の声を上げる。が、俺は先程までから彼女が参考書を持っている事から、この先〝ある出来事〟が待ち受けているのを知っていた。
「皆、来週からテストだけど大丈夫なの？」
『え……？』
そう、綾の言う通り、来週からテストがあるのだった。俺除いた四人は呆けた表情をする。
「しまった。すっかり忘れてたよー」
陽子がやだなーと言いながら頭を抱える。
「私はテスト大好きデスよー」
「ええっ何で!?　仲間だとばかりっ」
「確かにな。カレンってそんなテスト好きだったっけ」
陽子が驚き、俺も明るく笑う彼女の言葉に疑問を覚える。
「テスト期間大ースキデス！」
「どんなとこが好きなんだ？」
俺が聞くと。

「静まり返った教室、ペンを走らせる音……そして、お昼寝に最適♪」
「「問題解けよ！」」
　陽子と俺の上げた声がハモった。問題を全て解き終わったとかならまだ分かるんだけどなぁ。
「私もテスト好きです」
「えっ」
　忍の意外な一言に俺はそんな間抜けな声を出してしまう。
「テスト前にはシノが問題出してくれるんだよー」
　ねー、とアリスは言うが、肝心の忍の点数は……。
「忍、それやるのもアリだけど、自分の方は大丈夫なのか？」
「大丈夫です」（キリッ
「嘘おっしゃい。しのにはそんな余裕無いはずよっ。それにこないだも赤点だったでしょ！」
「なっ、何故それを!?」
　あー確かにそうだったな。敢えて言わなかったけど、綾の言った通り以前行ったテストで見事に赤点を叩き出していた。
「どうやら私の座右の銘を教える時が来たようですね！」

忍はそう言うが、忍に座右の銘なんてあったっけ？
「ケセラセラ『なるようになる』ですよ！」
「なってないから言ってるのよー！」
綾が声を上げる。うん、それは真面目な奴に対して使うのが多いだけで、抜けている忍が言うのは間違っていると思われる。
よく見れば、綾が忍のテストを眺めながらそう言ってた。具体的な点数は言えないけど一桁台だったという事を言っておこう。

そんなこんなで勉強を始めようとする俺達。
「勉強してると意識が飛ぶのですが～」
「それって知らない内に寝てるのよ」
うつらうつらとする忍に、寝ちゃダメよと注意をする綾。
忍の言葉ってダメな奴の典型的な台詞なんですがそれは。
「でも今からやっても……」
アリスの言う通り、来週からテスト。大抵準備期間が必要になってくるものだろう。
「一度でいいからアリスみたいに９０点台取ってみたいです」
「（シノ……！）分かったよ、わたしも協力する！」

お？　涙ぐみながらアリスが忍の勉強に協力してくれるようだ。いやまあ壊滅的な成績だから、見てくれない方がある意味問題だが。

「わたしの答案……カンニングしていいよ！　隣の席だから！」

「だめだめ！　勉強しなさい!!」

今度は陽子と綾の声がハモった。うん、カンニングはいけない（確信）。

余談だが、忍が日誌を烏丸先生に出しに行った際、彼女が将来通訳者になれるかと問いたら、「せ……先生は信じていますよ！」と泣きながら言っていたらしい。これには流石に前途多難であると思ったのは別の話。

???

「テスト範囲どこ？」

「そっからかよ!?」

カレンが肝心のテスト範囲が分からず言ってきたので、流石に俺は声を上げてしまう。おかしい、テスト範囲は疾うに配られたはずなのに……。

これには綾もそこから!?　という表情だった。
「シノおかえりー」
近くでアリスの声が。どうやら忍が帰ってきた、が……?
「何だ、あの顔」
今まで見た事もない、忍の顔に思わず声が漏れてしまう。
「えっ、しのがどうした……の……?」
綾も忍の違和感に気付いたのだろう。呆然とし始めている。
「どうかしたの?」
とぼとぼと歩く忍に、アリスは声をかける。
「アリス……私に英語を教えてください」
何と、勉強ご教授の宣言。
「しのが突然やる気に……!」
「シノ〜〜〜!」
陽子もカレンも忍がおかしくなった（?）事に気付いたのだろう。
「ていうか、本当に何だあの顔!　寧ろ……誰だよ!?」
俺も更に言う。今までかってない程のきりりとした表情の忍。何かを決意したかのような……そんな顔だった。

???

そして――――テスト当日。

え、描写が少ないって？　強いて言うなら自分の勉強とカレンの勉強を見てあげた事ぐらいだったから特にめぼしいものはない。

それはさて置き、皆と待ち合わせの時間。俺とカレンは一緒に登校し、その後に綾と陽子とも合流した。そして肝心の者はというと――――。

「おはよう皆」

この声はアリスだ。

「おはよー。しの、アリス！」

陽子がその挨拶を返し、皆が声の方向を見やると。

「って……大丈夫か忍は!?」

忍は単語カードと睨み合いながらブツブツと呟いていた。それも顔に影を浮かべながら。

「きっと勉強の成果を出す時が来たのよ！」
「頑張ってシノ！」
綾もアリスも忍の真剣（ガチ）目な雰囲気を感じ取ったらしい。
そして、忍は一つ、呟く。
「……ジュテーム」
「それはフランス語！」
やる科目は英語なのに、フランス語を言っていた。余談だが確か意味は、「愛している」だったような覚え。
それはともかく、間違っている知識も入っているんじゃないかこれは!?　綾も陽子もあわわと驚愕と怯えが含んだ表情だった。言ってしまえばこれは期待できない、みたいな。
忍は皆と登校しながらも単語帳と睨めっこしており、学校に着いて席に着くまでほとんど勉強していた。
「シノ、頑張ろうね！」
「はい！　私もやるだけの事はやりました。今なら何だってできる気がする……アリスのお陰です！」
何だアレ。あんな綺麗な忍見た事がない。いつも以上にキリリとしていてまるで本

来の忍とは思えない程の変わりよう。
　アリスも同様の気持ちなのか焦っているような表情だった。
「あっ、あそこに金髪のお姫様が!!」
「えっ!?」
　アリスがそう言うと、忍は目を輝かせながら反射の如く振り返る。
「あれ……覚えた単語……忘れ……」
「うわあああっ、ごっごめんシノ～～～!」
　アリスの言葉で絶望した表情を浮かべる忍。アリスも必死こいて謝るが、どうやら根の方まで変わり映えしていない事に安心した自分がいる。
「陽子はあまり勉強している感じではなかったけど?　大丈夫なの?」
　隣の席の綾が後ろの席にいる陽子にそう言っていた。
「家ではしたよー。でも私の頭でも限界があるというか」
　それって陽子が今の忍みたいまでやれてないだけなんじゃ……。
「そこで考えた!　前の席の綾を見て答えを透視する!　名案名案～!」
「!?　そんな事ができるの!?」
「気合だよ気合～!」
「いや無理でしょ」

陽子はガッツポーズで気合だとか名案だとか言うが、そんな超能力紛いな事は普通できないと思い、俺はツッコんだ。
「むっ。そういう健はどうなんだよ？」
「俺？　まあボチボチかな」
「ボチボチとか言っときながら全科目平均点以上出すのよね健は……」
癪に障ったのか陽子に訊ねられ、俺は答えるが綾に呆れられた。
「はぁ!?　羨ましい！　私にその頭分けろ～！」
「なあぁ!?　止めろ――――！」
無理なものは無理と言おうとしたが、その前に陽子が俺に掴みかかってくる。女子の中でもかなり力が強いからなコイツは！
全く、テスト前に変な汗掻いてしまった。

???

「始め！」

そんなこんなでテスト開始。……何やら此方に視線を向けている訳ではないのだが、隣から圧が感じるのは如何なのだろうか。

もうテスト中だから隣見るのはカンニング行為とみなされるので厳禁だが、やはり陽子が綾の答えを透視しているのだろうか。

あれだと綾がやり辛そうな気がするが……ひとまずは自分のやる事に集中しよう。

尚、この後で「いい点取れなかったら綾のせいだから……！」「こっ、こっちの台詞よ！」とか言っていたのは割愛。

ある程度割と難なく記入した後、ふとこう思ってしまった。

――カレン、鉛筆転がして答え書いてないよな、と。

???

その後も二教科目と続いていき、三教科目。遂に英語。

――この文法は……仮定法過去だな多分。Ｉｆと過去系でｗｏｕｌｄ／ｃｏｕｌｄ／ｍｉｇｈｔが含まれて……るな。確定。んでこっちが……ん？　ふと担当の烏丸

先生を見ると、小さい旗を振っていた。応援のつもりかな？　何とも励ましとなる。皆はテストに集中しているが。

テストに集中といえば、この科目は忍が最も勉強し、奮起のきっかけになったもの。勉強の成果が試される。

彼女はそこそこ前の席なので、解答は見えない。なので一瞬だけ見ると、必死に手を動かしていた。忍も頑張ってるんだな。

さ、俺ももうひと頑張りしますか。えっと、この文の意訳は――――っと。

???

「はい、そこまで。手を止めてください」

終了のチャイムが鳴ると同時に、先生が言う。

クラス全員のテスト用紙を回収し、先生が教室から出て行くと、陽子が「ん――――」と体を伸ばす。

「終わったぁぁ～。テスト後の解放感好き！」

「同感。やりきった感というか」
「まだ明日もあるのよ」
俺と陽子が余韻に浸っていると、綾に釘を刺された。
「分かってるって」
「もうテストやりたくない……健、明日私の分も頼んだ」
「無茶言うな!?」
陽子に無茶苦茶な事を言われた。分身の術でも使えってか？
「シノ、お疲れ～」
と、そこへアリスが忍の様子を窺いに行く。
皆も釣られて見ると、そこには真っ白になっている忍の姿があった。
「シノが――――抜け殻に……！」
満身創痍っていうか、完全に燃え尽きたというか……そんな姿になっていた。
「一気に老け込んだな！」
「!?」
「こら！　気にしてるのよ！」
陽子の失礼な言葉にハッとなる忍。綾も注意するが地味にフォローになっていない気が。

ともあれ、残った科目分は明日だな。乗り切るために頑張るか。

???

そして、テストの結果発表にて。

忍は何と、英語で９６点の点数を叩き出したのだった。後から聞いた話だが俺は愚か、綾よりも良い点数だったという。

「本当に良い点取った！」

「シノすごい！」

「ＯＨ～！」

他の皆も忍の点数を褒めていた。

「ありがとうございますアリス！　こんな点数始めて……！」

「シノの努力の成果だよ！」

当の本人も感激しており、アリスも同じ気持ちだろうなと思う。

「うう……」

テストを配り終えた烏丸先生も泣いていたが。
「あれっ！　先生!?　泣かないでくださいー！」
「いや、多分先生も嬉し泣きだと思うぞ」
今までの点数がアレだったから、その分反動がきたのだろう。
「そ、そうなんですか～？」
「ああ。きっとそうだ」
ただ、毎回こうだといいがな。

次いで、数学はというと。
「シノはどうだっ……た……」
英語に打ち込み過ぎた結果、一桁台だったらしいが。
アリスが点数の後ろに０を付け加えた。
「これでお揃い！」
「アリス……」
じーんと感涙する忍。確かに英語は良くても他の点数が悪くちゃ、な。
「あぁ……いつものしのだわ……」
綾もこういうところを見るといつもの忍だと実感させられたらしい。

???

「そうーいや、健はテストの結果どうだったの？」
テスト全教科返還後、陽子がそう聞いてきた。
「俺？　一応全教科八十点越えたかな」
「はぁっ!?　なにそれ!?」
いや、そんなに驚かれても……。
「健カンニングでもしたのか!?」
「してねーよ!?　冗談にしても酷ぇよ！」
いやそもそもカンニングしたらノーカンになるだろうし、厳しい罰則がある。どうやったらカンニングして切り抜けられんの……。
「でも、確かに健君は普段から点数いいですよね。アリスや綾ちゃんと同じです」
そう話していると、忍も輪に加わってきた。
「そうか？　アリスや綾が頭いいのは知ってるが、二人と肩並べられる程か？」

「はい。きっと二人も健君が頭いいの知っていると思いますよ」
　そうなのか。そこまで頭いいと思ってなかったが、忍がそう言うって事はそうなんだろう。
「健も結構謙遜してるよなー」
「謙遜……してるつもりはないと思うんだがな」
　自分でも無意識にそうしてるとか？　でも思い当たる節はないな。
「ところで健君はなんでそんなに頭いいんですか？」
「唐突だな」
　本当に唐突な忍の問い。
「んー……思い当たるとすれば、定期的に予習復習してるから、かな」
「でた、勉強バカ」
「言い方ァ！」
　そこまで勉強バカではない。
「でも、それを続けられるのは凄いですね」
「割と基礎的なものだと思うが……そうだ、忍もそれやっとけば点数もっと上がるんじゃないか？」
「続けられる自信が……」

「あと英語とかでもやっとけば海外旅行とかに役立つと思う。お前が中学生の時みたいにまたホームステイする時いいかもな」
冗談交じりにそう言ったら陽子がははっと笑う。
「健、流石にそれは安直すぎだろー」
「それもそうだよな――――」
「私、予習復習やりますっ！」
「「えぇ……（困惑）」」
もうアリスがいるからホームステイしないと思ってたが、忍、ちょろすぎない？
「何なに、何の話？」
そこへ、とてとてとアリスも加わってきた。
おおよその事を伝えると、アリスは悲しそうな表情を浮かべた。
「シノ……違う人の家にホームステイするの？　私がいるのに？」
あれ、これどっかで見た事があるぞ。そう、ヤンデレみたいな。
「健君が言ってくれたんですよ～。ホームステイする時に、勉強の予習復習が役立つって！」
「違う！　いや意味合いは違わないのかもしれないけど、とにかく違う！」
忍が両手を組みながら笑顔で言うが、俺は自分で言っててよく分からない支離滅裂な

言葉でツッコんだ。
「ケン、ちょっといい？」
「アッハイ」
威圧のあるアリスの物言いに、俺は従わざるを得なかった。
このあと滅茶苦茶怒られた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２　学校祭　前編

どうも、八坂健です。今日は選択科目の音楽で歌のテストがありました。

「緊張しましたねー」

テストも終わり、教室に戻る最中、忍がそう言った。俺も音楽を取っているのだが、カレンも同様に音楽を取っていた。

「何か黒いオーラが……」

ふと、忍とカレンが一緒に歩いていた時、アリスが不審に思ったのかそう言う。うん、まあ気付くよね。

「わあっ!?」

「ウタナンテウタナンテウタナンテウタナンテウタナンテ……」

アリスがある方向を見据えると、ブツブツと呪詛の如く呟いている綾がいて驚きを見せる。

うん、綾が歌に自信が無い事には気付いていた。音楽の時間が始まる前にも何かボヤいていたし。

「引きずってるのがここに一人」

「陽子、それは言わないお約束」
「うう……どうせオンチよ」
「そんな事ないよ！　アヤの歌良かったよー」
綾が悲しみに嘆いていると、アリスが励ましの言葉をかける。
「すっごくアヤ！　って感じだったよ」
「そうそう、綾ちゃんっぽい歌声で」
「これでこそ綾！　みたいな」
「Ｔｈｅ？　アヤヤ！」
「絶対褒めてない!!」
俺省いた皆がフォローのようで全くフォローではない言葉をかけられ、尚も黒いオーラを出しながらツッコミの声を上げる綾。
「綾……次があるさ」
「健、もしかしなくても諦めてる!?」
うーん、俺もかける言葉をミスったか？
なんて、思ってる間に綾がふんっとそっぽを向きながら声を上げる。
「陽子は声が大きくて凄く楽しそうだったわね！」
「ありがと～。これって褒めてるんだよねっ」

照れ隠しなのか、皮肉のつもりが陽子の事を褒めていた。
「ケンはバスの大砲デシタね！」
「大砲⁉」
大砲って……野球とかじゃないんだから。いやまあカレンにそう言われてあまり悪い気はしないんだけど。
「シノはまるで歌うパイプオルガンだったよ！」
「えぇ～そうですかぁ～？」
「人の声じゃねぇ！」
忍がアリスにそう褒められてテレテレするが、陽子のツッコミ通りそれは最早人の声じゃない。
「アリスはクラス中が笑顔だったな」
「すごいヒーリング効果だったわ」
陽子と綾の言う通り、アリスの歌は聴いていて凄く和やかな気分になれた。クラスの皆がほわぁ～っとなる程だ。
「そうだ！　録音して全国放送で流したらどうでしょう！　世界中を笑顔に！」
「それはやめて！」
忍の突拍子もない提案にアリスが顔を赤くしながら制止の声を上げる。歌の代表か

何かかな？

「カレンはすごく上手でしたね！」

「それほどデモ～」

「所々日本語カミカミだったけどな」

確かに。それでも聴いていて思わずカレンに感動を覚えてしまったぐらい上手かった。

「二人のデュエット聴いてみたいわ」

そんな綾の申し出にアリスは賛同の声を上げる。

「いいよ！　じゃあわたしソプラノね」

「ええー私もソプラノがいいデス！」

カレンが不平を言うと、二人が何故か喧嘩を始めた。

「私が上デス～」

「わたしだよー！」

譲り合いの精神はいずこへ。

「二人共ケンカはだめです。では私が――――合いの手を担当します」

「アルトじゃなくて!?」

忍が思ったのと違う発言をすると、綾がツッコんだ。

とりあえず、アリスとカレンが共にソプラノを歌う事に落ち着いた。
「♪～」
「☒～」
「金！」
――――ん？
「♬～」
「♪～」
「金！（パン！）髪！」
んん？
「きん――――「しの！　二人の邪魔しないで！」」
合いの手っていうからにはただ拍手とかするのかと思ってたんだけど、思った以上に違ってたみたい。
その後、俺に対してカレンがワライタケの話をしたりと、駄弁りながら自分達の教室に戻る。
「早弁しようと思ったらもう弁当がありませんでした」
「何やってんだ陽子」
どうやら得意の早弁を陽子がしようと思ったら、既に平らげていたらしい。昼にすら

なってないのに……それにしても燃費悪くない？
「私、授業中に早弁するの得意なんだよね」
　自分で得意って言っちゃダメなような……。
「授業中にお弁当食べちゃだめだよー」
　アリスの発言はごもっとも。
「でも悪い事ばっかりじゃないんだぞ！　集中力と反射神経が養われるし～」
　いや、それもっと別なところで使おうよ。
「確かに」
　確かに、じゃないアリス。
「何より勇気レベルもぐんと上がる！」
「勇気レベルも……!?」
　陽子がテッテレー！　とレベルアップのＳＥを口にすると、アリスが驚愕の表情になる。
「まさか早弁にそんな利点があったなんて……わたしも……」
「いや利点じゃないと思う。だからしない事を推奨する」
　俺がそう釘を刺すが――その後の授業中。
「一片の悔いなし！」

「――そこの二人！」

何故だか忍も一緒に授業中に弁当を出し、先生に注意されてしまった。なんで忍も一緒に出したんだろ？　旅は道連れ世は情け……は流石に言い過ぎか。

大方、勇気レベルを上げたいがためにアリスが早弁をし、それでアリスだけが怒られないように忍も弁当を出したとかその辺かなぁ。

「授業中は授業に集中しなさい！」

授業終わりの休み時間。忍、アリス、陽子の三人が先程の事で綾に怒られた。

「陽子が不真面目だから気になっちゃうじゃない」

「ごめん」

陽子がてへーと能天気そうに謝る。

「アリスが問題当てられた時ちゃんと答えられるか心配だし、しのはよく居眠りしてるし」

ん？　何かおかしな展開に。

「気になって気になって！　もーっ！」

「授業に集中しなよ」

周りを注意しすぎて逆に授業に集中できていないっぽい綾に陽子のツッコミが炸裂した。揚げ足取られたなコレ。

「確かに早弁は色々と不味いな。腹減るのは分かるけど、我慢しないと」
俺も陽子に注意換気する。先程陽子が言った通り、早弁自体が悪い訳ではないが、その分早く眠くなったりする等不便な点が多いのは確か。
「でもやめられない、とまらない」
「かっ○えびせん!?」
いきなりカ○ビーネタをぶっこんできたよこの子。
「おお、流石は健。いいツッコミ。その調子でツッコミキャラを続けてこうなー」
「何なの!?」
陽子にポンと肩を叩かれそう言われた。てかツッコミキャラってどういう事なの……。

☆☆☆

「もうすぐ学校祭だね！」
アリスがふと、開口一番で言い放つ。

そう、もうじき我が高校で秋の学校祭が始まる。テストも終わり、イベントの季節がやってきた。
「日本のお祭りは初めてなのー」
「それは楽しみですねー」
アリスが気分が浮かれている中、忍が笑顔で言う。意外だな、てっきりアリスはもう日本のお祭りを楽しんでたとばっかり。
「ところでアリス、何やら勘違いある気がしてならないのですが……学校祭はそういう感じじゃないです」
「え」
ああ、流石の忍も今のアリスの格好を見て気付いたか。他の皆も敢えてなのかツッコまないでいたけれど。
今のアリスの格好はというと、鉢巻に法被という如何にも日本の祭りらしい感じだが、学校祭はそこまで大層なものじゃない。
「そ、そうなのケン？」
アリスの近くにいた俺に彼女は訊ねてくる。
「まあな。普通、学校でやる祭りは法被・鉢巻は着ないわ。そういう本格的なのは町内とかの祭りで着るのが正しいな」

「そんなぁ……」
アリスがショボくれてしまう。
「……まあ、まだ祭りのシーズン終わった訳じゃないし、今度そういうイベントに参加してみたらどうだ？」
「！　うん！　そうする！」
祭りに参加する機会はまだあると伝えると、アリスはぱあっと明るくなる。コロコロ表情が変わりやすいなぁ。
そうして、さっきまで着ていた祭りの衣装から普段の制服に着替え終わると、綾が言ってくる。
「私達のクラスの出し物は喫茶店。今のところ、メイド喫茶か甘味処で意見が分かれているわ」
クラスの皆で話し合い、出し物が最終的にその二択になったのだ。どちらかといえば、男の俺でもある程度気楽でやりやすい甘味処が良いと思ったのだが……。
「二人はどっちが良――――」
「メイド喫茶！」
「甘味処！」
綾が言い終わるよりも先に忍とアリスの言葉が被る。

そして、二人との間にピシャアと電撃が走った……ような気がした。
「争いたくはありませんが仕方ありません……。アリスとて容赦はしませんよ！」
「何の勝負だ」
忍が謎のファイティングポーズを取ると、陽子がツッコむ。
直後、忍が先攻とばかりに声を上げる。
「引いてくれなければ夜トイレについてってあげません！」
「っ!?　今その話は関係ないでしょ！」
恥ずかしい話を暴露され、きゃ～っと顔を真っ赤にするアリス。
「甘味処にしてくれなきゃシノの事嫌いになるから！」
次いで後攻。アリスが言い放つ。あれ、雲行きが怪しくなってきたぞ。
「なっ、私だって!!」
忍も対抗して言う。
「……！」
「……ッ」
そしてとうとう涙が溢れ出す二人。
「か……かんみ……」
「メイド……」

「そんなに深刻な問題なのこれ!?」
泣きながら言う二人に見かねた綾が言う。って、確かに二択でここまで深刻になるなんて思ってなかったぞ!?
「い、いや別に一つにこだわらなくても……二ついっぺんにやればいいんじゃ……」
「そうだな。健の言う通り、二つに混ぜちゃおうよ。まさしく異文化交流！」
流石に危ない雰囲気になってきたので、俺が意見を述べると陽子がありがたい事に意見を付け足して言ってくれる。
「良いですね。それなら二人共納得です」
「そうだね！」
良かった。何とか二人共納得してくれた。
「あっ、こういうのはどう？」
すると、アリスが祭りの提案をする。
「メイド服を着たシノをお神輿に乗せて皆で担ぐの！」
「アリスの祭りのイメージとも合って良いかもなー！」
陽子も便乗して言うが、そのイメージを想像をしてしまったら――――。
「そんな喫茶店、嫌だ……」
「……だな」

綾も同じ考えをしていたのかそう呟いていたので、俺も頷いといた。さっき本格的な祭りじゃないっていう話をしたのに、しかも何で忍が神輿の上に？　あれか、巫女とでもいうのか？

とまあ今の意見は即却下され、アリスが再びショボくれたのは言うまでもない。

ちなみに下校途中で教えてくれたのだが、カレンのクラスは劇をやるらしい。彼女が自分達のクラスに来る代わりに是非とも観に来て欲しいとの事。何の役かは秘密らしいが、「まあ期待してくれちゃってＯＫデスよ。良い席取って置きマス」と女優オーラを出しながら良い席を取っておくという。

……勿論観に行く予定だが何となく嫌な予感がしたのは気のせい？

☆☆☆

そうして、学校祭の時が刻一刻と近づいていく。

我が県立もえぎ高校では、学校内中に各教室や部活の案内の張り紙が至るところにあった。これぞ学校祭の醍醐味といったところか。

そんな中で、俺達のクラスでもある一年Ｂ組でも着々と準備を進めていた。
「おーい八坂ー、これ運んでくれー」
「分かったー！」
「八坂くーん、衣装のサイズこれでいいかなー？」
「ちょっと待ってー！」
役割分担もしっかりと分け、教室の装飾や備品管理等も進めている。
俺はというと、男なので備品運搬とかの力仕事や飾り付けがメインなのだが、メイド服等の衣装の管理調整も行ったり、料理ができると周りが知ってたのか、その合間にメニュー作りを手伝ったりした。
「んー、丈がちょっと長いかな。もうちょっと短くすれば床擦らないと思う」
「うん、分かった！」
また、その衣装も皆で分担し、大体半々ぐらいで和服の甘味処組とメイド組に分かれるようになった。といっても男子が甘味処で、女子の方はメイドが多数となっていたのだが。
ていうか、今クラスの女子と衣装のサイズ確認をしていたのだが、俺ばっかりに任されているのは気のせいか？　俺、クラスの実行委員とか進行係じゃないのに……。嫌な訳でもないし別にいいんだけど。

何はともあれ、学校祭開催まであと少しだ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１３　学校祭　後編

学校祭の準備も滞りなく進み、祭りを翌日に控えるようになった。

夜、俺の家にて。晩飯を作ったのも含むが、準備期間で疲れてソファで寛いでいると金の髪が目の端に映る。

「ケンー、学校祭、楽しみデスね！」

「そうだな。カレンも、劇の方は大丈夫か？」

「ハイ！　バッチリデース！」

学校祭の前日という事もあって、家にホームステイしているカレンがリビングにてそう言ってきた。

家でも元気なカレンは、学校祭を余程待ち遠しく思ってるのか、ウキウキしていた。

「この際だからカレンの演目と役を教えてくれないか？」

何の劇をやるのか気になった俺は意地悪くカレンに聞いてみる。

「ＮＯー！　ケンでもダメデース。明日を待ってくだサーイ！」

だが胸の前で×の印を作り、家でも頑なに劇の詳細を教えてくれなかったカレンだった。

「健、明日学校祭なんだっけ」
ふとそこへ、姉の瑠美姉さんが俺の側までやってくる。
「そう。ところで姉さんは学校祭に来るのか？」
唐突に言われたので、もしかしてと俺は聞いてみる。
「そうね。明日は休みだし行ってみようかしら。カレンと一緒に」
「いやカレンも明日劇だから」
この人（姉）は素でボケているのかわざとなのか分からん。
「そうだったっけ？」
「そうだよ（断言）」
素で、だったわ。
「まあいいわ。折角健が働いてる姿撮れるし、堪能してきましょうかね」
「堪能って何。というか撮るなよ？」
「そっか、撮るのは勇（いさみ）の役目か」
「そういう問題じゃないから。てか、勇さん来るの？」
姉さんは首を縦に振った。忍も明日学校祭で家にいないはずだ。その影響で見に来るのだろうか。
「そう言ってたわ」

「そっか」
まあ大体予想ついてたが。
ともあれ、明日は学校祭だ。早い内に寝ないとな。
「明日も早いし、そろそろ寝ようかな」
「あっ、じゃあ私と寝ようか」
「寝ないわ！　姉さんの自室があるだろうが！」
「ルミー、ケンと一緒に寝るんデスかー？　ナラ私もケンと一緒に寝マース！」
「カレンも乗るな!?」
今日はぐっすり寝れそうだ（白目）。

???

そして、学校祭当日。
始まる時間より少し前に学校に着いた俺とカレン。カレンは劇のため、本番が始まる前に最後の練習をしに行った。

俺達のクラス、1―Bの催し物である「カフェ処　和洋折衷」の最終仕込みをしていた。

その中で、俺と陽子、アリスが甘味処組で、メイド組が忍と綾の組み合わせになっていた。

「綾ちゃん似合うー」

「かわいーい」

「やめてええええ！」

忍と陽子が綾のメイド姿を似合うと褒め、クラスの皆からも見惚れていたが、言われた当の本人は凄い恥ずかしがってた。

いざ本人が着ると緊張する辺り、恥ずかしがり屋な部分はまだ目立つな。

それはさて置き、メニューの確認をする。実際、飲み物以外は既に出来上がっているのだが、余る・足りなくなる場合にも備えて、多すぎず少なすぎずを考えた量になっている。

肝心のメニューはというと、ティーカップに日本茶、湯呑みにコーヒー、ケーキにあんこ、お団子にチョコレート……。

「まるで私達のような喫茶店ですね」

「そうだねー」

忍、アリスはほのぼのとそう言うものの。
「カオスな喫茶店だな……」
陽子が言い放つ。店名が「和洋折衷」というからには間違ってないが、混ざりに混ざって確かにカオス。
「アリス達ー、お客さん来るから準備してー」
「はーい」
「はいっ」
クラスの女子の一人がそう言うと、忍がいつものように、アリスが意気込んで返事をする。
そっか。いよいよ開店するんだな。
ちなみに今回、教室内のほとんどがクラスの女子で、他の男子達は校内を回ってチラシで宣伝したり、商品を売りに出る予定だ。メイド喫茶が含んであるので女子がメインになるのは当然といえば当然だが。
かくいう俺もその一人なのであるが、何故か今回は裏方に徹して欲しいとの事。どうやら料理ができる上、男子だから重いものや足りなくなった食材等をすぐ持ち運べるから……らしい。
確かに一理あるかもしれないが、言い方が悪いとパシリに近い。まあ頼られてると思

えばいいか、今回は。

『いらっしゃいませー！』

仕込みの最終確認を終えたと同時に、女子の多くの声が響き渡る。どうやらお客様第一号が来店してきたようだ。

料理や作っているところが見られないようカーテンを敷いているからお客さん自体は見れないが、開催してすぐ来てくれたのは素直に嬉しい。

「あれっ、大人の人達が来てるよ？」

「一般のお客様ですよー」

ふとアリスと忍の声が聞こえてきた。普段学校には学生や教職員といった人達しか入れないが、こういった大掛かりなイベントでは立ち入れる事が多い。自分達の高校の学校祭もその一つである。

「いらっしゃいませー。お好きな席へどうぞー」

忍が物腰柔らかそうな口調で言うと、アリスも続けて言った。

「イ……イラサイマセェー、日本語ムズカシィネー」

それも、カタコトで。大人とか滅多に合わない人に声を出したのだから仕方ない。

「健、あんこと日本茶頼めるか？」

そうこうしてる内に陽子から注文が入った。

「分かった」
基本、女子が表立っているが、俺は表には出ないようにしている。見栄えの問題かもしれないが。
さて、頑張ってやっていきましょうか。

???

その後も、何事もなく続いていく。
思った以上に盛況らしく、学校外、学校内問わずに来店してくるから人気が高いと窺える。
……男子の来店率が地味に高いのが、メイド姿の女子が見れるからと思ったが、そこはそれ。こういうイベント以外ではメイド姿なんてお目に掛かれないだろうから、たまにはいいんじゃないかなと思う事にした。
「メイドなんだから、ご主人様って言わないとね！」
「うっ……嫌よ恥ずかしい」

盛り付け等を済ませている最中、カーテンの内側に入っている陽子と綾がそんなやり取りをしていた。
確かに、最初はメイドではなく甘味処の方をやりたいと言っていた綾だが、周りから推されて結局メイドの方をする事になった。
彼女はこそこそと裏方の方にいたが、陽子にそう言われていた。
「ほらほら客来た！」
「……健～」
陽子がカーテンを少し開き、行ってこいと言わんばかりの合図に恥ずかしがっていた綾が俺に助けを求めてくる。
「いやダメでしょ。そこは女子の綾が出た方がいいと思うし、俺が出ても何の得にもならない」
見栄えが悪く……とまでは言わなかったが、こう見えて実はやる事多くて忙しいという点もあった。
「だってさ綾。これは諦めて行くしか！」
「う……うぅ仕方ないわね」
陽子にも後を押され、結局綾は勇気を振り絞って客の傍に行った。
「いらっ……い……いらっしゃいませ。ご、ご……」

お、後ちょっとで――――。
「ゴゴゴゴゴ……」
「何の効果音だ！」
出なかった。そして陽子が謎の効果音にツッコんだ。惜しかったな。

更にそこから時間は過ぎていき――――。
「烏丸先生いらっしゃいませ♡　愛の込もったお団子食べてください！」
忍の言葉通り烏丸先生が来店し、作った団子を忍が渡したいと提案してきたので、彼女に託す。
「まー、美味しそう。いただきます♪」
先生が食べる様子をカーテンの間から窺う。
「あれ、確か忍は間違えて団子の一つに間違えてわさびを入れたけど誰も当たってない」
そこで唐突に思い出した。団子はあらかじめストックがあったので、その作り置きの中に忍が一個だけわさびを入れるという鬼畜行為をしていたのを。
「えっ」
料理を手伝っていたクラスの女子の一人からもそんな声が漏れていた。幸い、誰にも当たってないのだが、烏丸先生にも当たらない事を祈る。

「う〝っっ?」

しかし、それも虚しいが如く、鼻と口を押さえて蹲る烏丸先生。

「キャ〜ッ！　先生、どうかしたのですか!?」

「何だか、これ辛いわぁ」

どうやら、運悪く当たってしまったようだ。

「だ……誰がこんな事を――――!」

「おい」

つい声を上げてしまったが、俺は確信犯を知っている。なのにも関わらず分かりやすくシラを切っているヤツがいる。これは鬼畜こけし……。

後で先生にお詫びしておこう。

???

「キター！」

む、この如何にも仲良くなれそうで明るい声は……。

「カレン！　いらっしゃい！」
アリスの声で誰かが判明した。そのカレンは劇の合間を縫って来たのかな？
「いいなーウェイトレス！　可愛いデスネ！」
「カレンは接客とか得意そうだなー」
確かにと、声には出さないが陽子に同意する。
……唯一の不安が「おっとお客様！　私は商品には入りませんデスよ！」とかそういう煽りに近い事を言いそうなところがネック。
『いらっしゃいませご主人様！』
おっと次のお客だ。それまでにてきぱきと捌かないとな。
「八坂くーん、お茶とコーヒー、それからあんこケーキとチョコ団子おねがーい」
「はいよ――――ってあれ……」
クラスの女子から注文を受けた時、カーテンの隙間から見えた人物を見て固まってしまう。
「どうかしたの？」
「い、いや何でもない」
同じ子に心配されたが、何でもないとこっちの作業に集中する。まさか〝あの二人〟が来るとは思ってなかったからだ。こんな作業をやっているとこはあまり見られたく

ない。

まあ、こっち（カーテン内）にいればそのうち帰るだろう。

「八坂くん、それ終わったら交代するよ」

だが、そんな考えを打ち破るが如く、クラスの女子の一人がそんな事を言ってきた。

「え、もう？　早くない？」

「いいのいいの。開店の時から休みなしでずっと働いてたでしょ？　流石に君一人をずっと働かせるのも悪いし」

どうやら働き詰めも悪いと、善意で彼女達は俺に交代させてくれるようだ。確かにずっと一人だけだと疲れるからその申し出はありがたいが、〝あの二人〟とばったり会う可能性が上がった。

とりあえずその子に分かったとだけ伝え、交代する事に。そそくさと出ていけばバレないとは思う。

「あっ、健君だー」

それも虚しく、眼鏡をつけて帽子を被った一人（勇さん）にバレる事に。

「おっ、我が弟君（おとうとぎみ）の和服姿！　勇、撮って撮って！」

そして、俺の事に気付いたマスク姿の二号（姉さん）が何故か興奮しながら勇さんに撮れ撮れ合図をかました。てか弟君って何。

「分かってるわよ瑠美。どれ、ちょっと一枚を……」
　その瞬間パシャリと、撮られた。しかも勇さんは一枚と言っておきながら、パシャパシャと何枚もシャッターを切っている。俺に限らず、綾や陽子まで……。
「わたし的には綾ちゃんが和服で、陽子ちゃんがメイド姿なんだけどなー」パシャパシャ
「そう？　綾ちゃんも陽子ちゃんも今の服似合ってると思うけど」
　勇さん、撮るな。そして姉さんもノリに乗ってないで、勇さんを止めるぐらいはして。
「あのぉーお客様、撮影の方はちょっと――――」
　そんな時、その行為に見かねたのか陽子が止めに入った。でも陽子は〝彼女〟の事に気付いていない？
　その声を聞いた途端、勇さんが帽子と眼鏡を外し、姉さんもマスクを外す。
「勇姉(いさねえ)!?　それに瑠美姉!?」
　陽子が勇さんと姉さんの存在を見て驚き、それを遠巻きに見ていた綾も驚いていた。
「じゃーん」
「陽子ちゃん、久しぶり～」
　何処か余裕がありそうな態度で陽子に接する二人。
「イサミ！」
「あっ、お姉ちゃん！　来てくれたんですか！」

アリスと忍も勇さんに気付いたようで、彼女達の声にカレンも気付いたようで此方に駆け寄ってくる。
「あっ、ルミもいるんデスネ！」
「やっほーカレン」
カレンが姉さんの事も気付いていた。
「姉さん、本当に来るとは思ってなかったよ」
「ええっ、姉さんって――――健君のお姉さん!?」
「えっ！　ケンってお姉さんいたの!?」
俺がそんな事を言うと、忍とアリスが驚く。そっか、忍はあんまり会った事ないし、アリスに至っては会った事ないな。
「まあね。こんな不甲斐ない姉だけど、どうかよろしくして欲しい」
「ちょっと健、それはどうなのよ」
俺の言葉に姉さんが食いついてきた。
それはそれとして、姉さんが皆（途中で綾が近づいてきた）に挨拶を交わした。
「改めて、八坂　瑠美でーす。忍ちゃんは久しぶり。それで、貴女がアリスちゃん？　よろしくね」
「ひゃい！　よ、よろしくお願いします！」

アリスは姉さんのよろしく発言に緊張したのか、噛み噛みながらもお辞儀をした。
「おっ、そこにいるのは綾ちゃん？　綾ちゃんも久しぶり～」
「は、はい！　ご無沙汰してます！」
綾も何処かアリスと似たような口調だった。二人はちょっと人見知りしてるのかな。
「そんな堅くなんなくていいって。皆、どうぞ弟をご贔屓にお願いします」
「そこは馬鹿にし返すんじゃないのか。てか、贔屓すんな」
てっきり、馬鹿に返してくるのかと思ってたら、予想の斜め上の発言をされた。贔屓のポイントがないんだがそれは。
ちなみに勇さんと姉さんの知り合いに、白川（しらかわ）　湊（みなと）さんという友人がおり、三人で見かける事も多々ある。
「それにしても、アリスの和服、可愛いわね」
「そうね。とっても似合ってるよ」
「えへへ」
勇さんと姉さんにアリスの和服姿を褒められ、素直に照れている。
「お姉ちゃん、瑠美さん、私は？」
「ん？　いつも通り？」
勇さんの言葉で、忍がガーンとした表情に。まあ、普段の服装がね、うん。

「いや、可愛いよ」

姉さんが咄嗟にフォローする。ただ姉さんはあまり知らないだろうが、彼女の普段の服装がアレ。

最後に会ったのが中学校の頃だったか。その時はまだ外国色に染まってなかったから「純粋で可愛いー」と姉さんが言っていたが、今の忍を見るとちょっとヤバいかも。下手したら幻滅するかもしれない。

「んじゃ、俺交代時間だから」

「ええー？　早くない？」

何となく居心地が悪くなったからその空間から抜け出そうとしたら、陽子にそう言われた。やっぱそう思うか。

「クラスの子に言われてさ、働き詰めも悪いから休憩してって」

「そっかー。もうちょっと健君が働いてるとこ見たかったなー」

勇さんにもそう言われる。働いているっていってもカーテンの中中心だけど。

「分かったー。じゃあ健、お土産よろしくー」

「パシリか!?　そんな金ないわ！」

「あっそれいいわね。健君、何か奢ってよ」

「私も私もー」

「アンタ等は俺を一文無しにさせる気ですか!?」
陽子、勇さんと姉さんにそんな事を言われ、思わずツッコんだ。その場が笑いに包まれる中、俺は「ったくよー」と声を漏らしながら教室から出て行った。

???

「こうして見ると、色々やってんだな」
俺は一人学校内をぶらぶらと回りながらそう呟く。忍達はまだ交代時間になってないので今は俺一人だけだ。
歩き回りながら他のクラスでは何をやっているのかと見て回っていたが、中々興味深かった。
ある教室では漫才をやっていたり、ネズミの被り物をしていた子達がいたり、手芸部が立派な出し物をしていたりなどと、様々な出し物をしていた。
また同じ出し物があるとこが意外に少なく、被っている場所もあまりないという印象だった。

「あっと、忘れてた。カレンの劇はいつからかなーと」
俺は唐突に思い出す。体育館で開かれるパンフレットをポケットから取り出し、開く。
「まだ大丈夫だな」
俺は安堵する。まだ時間に余裕があると分かればまだ校内も回れる時間があるってものだ。
もう少しだけ、俺は学校内のイベントを堪能して回る事にした。

???

「もうすぐカレンの劇が始まります！」
その後、忍達も交代時間に入り、俺と合流。
軽く校内を回り、いよいよカレンの劇の時間が訪れる。
「演目は白雪姫です」
「ベタだなー」

陽子が言う。確かに有名どころだ。同じような物語として「人魚姫」とかも有名どころの一つ。

「白雪姫」。確かいじわる王妃である魔女が『鏡よ鏡、世界で一番美しいのは誰？』から始まって、それに腹が立った魔女に毒リンゴを食べさせられた白雪姫が殺され、王子による口づけで最終的にハッピーエンドで終わる物語だっけ。

「カレンは何の役かなー」

アリスの言う通り、カレンは何の役かは想像つかなかった。物語に登場する小人じゃ言っちゃ悪いけどインパクトに欠けるし。もしかして姫役とか？

「私、白雪姫って大好きなの！」

綾がルンルン気分で足取りを早めていた。

「恋愛モノ全般が好きなんだよ」

「ああ、通りで」

陽子の言葉で俺は納得する。少女マンガとか好きそう（小並感）。

そして内容の劇だが、俺が予想していたよりも遥か上のモノになっていた。

劇が始まり、有名どころのシーンに入る。

「白雪姫が死んじゃったー」

「死んじゃったー」

小人役が白雪姫の役に向けてそう言っていると、舞台から光がある一点に灯る。
そこには侍らしい衣装を着ているカレンの姿が――――ってあれ、白雪姫って時代劇的な要素一ミリもなかったような……。
観客の皆も何事かとばかりに食い入るようにカレンを見る。
「待たれい。私がその者の魔を断ち切ってしんぜよう」
如何にも侍口調で言い放つカレン。そして小人役の人が白雪姫役から距離を取ると、カレンは刀（真剣ぽく見えるが多分本物ではない）を鞘から抜くと――――。
「は――――っ！」
まるで姫役の真上に何かがいるように、一気に切り裂く！
「ツマらぬモノを切ってシマッタ、ゼヨ」
そして、キンと刀を鞘に収めながら決まったという台詞を吐く。

うん、なぁにこれぇ。
隣の綾はショックを受けたかのように絶句。忍やアリスも何が何だか分からない表情だった。確かに分かる。明らかに白雪姫ってこんな時代劇が被った物語じゃないよね。
カレンのクラスの皆もカレンの役に誰もツッコまず劇を進めていく辺り、彼女がやり

たかったであろう役を尊重したのか？　それなら、もう少し渋ろうよ。

まあ何はともあれ、こうして劇は幕を下ろした。何か後味の悪い感じにはなったけど。

――色々あったが、これにて学校祭は終了だ。長いようで、あっという間だったな。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１４　お泊まり会……それは地獄の始まり？

学校祭も終わり、その後片付けも済んだ翌々日。
学校休みが片付けの後にあり、その翌日が学校だったという訳だ。まあ、一日挟むものの明日は休みな訳だが。最高かよ。
「あのね、親が旅行に行ってて、明日の昼まで帰ってこないの」
皆で下校途中、不意に歩を止めた綾がそう言ってきた。
「じゃあ今日は一人でお留守番ですねー」
「夜ご飯自分で作るんだーすげー」
忍と陽子がそう言う。
それにしても家に一人か……心細いだろうな。
「あ、本屋寄ってっていい？」
「いいよー」
そうして再び歩き出し、陽子、アリスが帰り道に本屋に寄ろうとしていると、腕辺りに掴まれる感覚が。

「……」

じいいいと涙ぐみながら綾が俺の制服の端を掴んでいた。

「心細いならそう言えって!?」

確かに心配していたが、今にも泣きそうな綾を見て、思わずツッコんだ。

そこから皆で話し合った結果、綾の家にお泊まり会をする事が決定した。

しかし、お泊まり会か……。何分俺は男だ。女子の部屋に泊まるどころか家に入る事自体少し抵抗がある。

「ケン、お泊り楽しみデスね！」

だが、その事情は関係ないとばかりに付いていく気マンマンのカレンがいた。

……まあ、遊びに行く気持ちで付いていくだけならいいか。陽子や忍達もいるし。

☆☆☆

「あれ、どっか行くの？」

一度家に戻り、普段着に着替えて荷物を整えていると姉さんが声をかけてきた。

「綾の家でお泊まり会するからって話だから、その準備。俺はお泊まりまでしないけど」
色々と誤解を招かないように、予め伝えておく。
「そうなの？　別に泊まっていっていいと思うわ」
いやなんでだよ。
「俺は男だよ？　普通女子の家に泊まるのは流石に不味いでしょ」
「いいじゃない。綾ちゃんだから健が取られる事はないと思うし」
「何の話!?」
ダメだ、姉さんに言っても埒が明かない。
「とにかく、最悪遅くとも深夜前までには帰ってくるから！　カレン、行くよ」
「ハーイ！」
「ふーん……」
俺はそそくさと準備を済ませて既に準備を終えていたカレンと一緒に出かけて行った。
その際、姉さんが後ろの方で何かブツブツと呟いていたが、聞こえない聞こえない。知らないったら知らない。

☆☆☆

「お、忍達だ」
家から出た後、たまたま前方に忍とアリスが歩いているのを見かける。
「へーイ！　シノー！　アリスー！」
「あ、カレン！」
カレンの快活な声が響き渡り、忍が喜々として振り返る。
「ケンもいるね！」
「おう。今から行くところか？」
「はい。綾ちゃん待たせちゃいけないですし」
そうか。もう既に行ってると思ったが、そんな事はなかったのか。
「もし時間があったらケンの家に迎えに行こうと思ってたんだけどねー」
そうだったのか。なんて気が利く子なんだアリスは。
何でも聞いた話だと、アリスは国語辞典など要らないものばかりを持っていこうとしていたらしい。その際持っていこうとした辞典に対してわたしのバイブルがーと泣いていたっぽいが。

うん、流石にお泊まり会するのに辞典とかは要らないと思う。
ちなみに余談だが、もしカレンがホームステイしていなかったらマンション丸ごと借りていたとアリス談。それを聞いた俺と忍は戦慄した。
スーパーお嬢様……。
「いらっしゃい！　待ってたわ」
そんなこんなで綾の家に到着。外で綾がたたたと出迎えてくれた。
「おじゃましますー」
忍が一足早く言う。
「陽子ちゃんは？」
「まだ来てないの。寒かったでしょ？　中に入って」
綾がそう言った途端、カレンが彼女の手をぎゅと握る。
「手冷たいデス」
「なっ……もしかして、ずっと外で待ってたのか!?」
だとしたら綾こそ中に入っているべきだったのでは。
「来るのが遅くて心配して……なんかいないんだからね！」
綾が顔を赤くしながら張り上げた声を出す。
「そ、そういう事か。心配してくれてありがとな」

「だから違うってばぁ！」
違うと言うが、外で待っている辺り心配してくれた事は本当だろう。俺は感謝していた。

☆☆☆

程なくして陽子も到着。その手には何か入っているビニール袋をぶら下げていた。
「コンビニ混んでてさー、遅れちゃった」
「何か買ってきたのか？」
「うん、お菓子とか色々ー」
そっか。お泊まり会するからコンビニ寄ってたのか。納得。
「お菓子デースー！」
カレン達がはしゃいでいた。陽子めっちゃいい事したんじゃないか？
「私達もさっき来たばかりですよ」
忍が待たせていないという事を陽子に予め話しておく。

「アヤのお部屋かわいーね」
「そ……そう？」
アリスに部屋の内装を褒められ、照れる綾。
ふと、カレンがタンスの引き出しを開けようとしているのを見る。
「あっ、カレンそこはだめ！」
俺が注意しようとするよりも先に綾の声が上がる。
「ヘソクリ？」
「じゃなくて……えっと……」
綾が俺の顔を見て逡巡している。何だ、何が入っているんだ？
「ああ、そこにはしたg――」
「陽子、健の前で言わないで!!」
陽子が言い終わる前に綾が彼女の口を塞ぐ。
「ていうか、どうして知ってるのよっ？」
「え？　何となくそうかなって……」
「透視ね!?」
「いや……」
綾と陽子が小声で話しているがよく聞き取れなかった。うーん、何が入っていたのか

かえって気になるな。まあ綾がそこまで言いたくないって事らしいからこれ以上は詮索しないでおこう。

そうしたやり取りを繰り広げているうちに日がとっぷり暮れていた。

「晩ご飯作るわね」

綾がエプロンを装着して料理支度をし始めようとする。

「私達も手伝います」

忍の言葉を皮切りに皆、彼女の手伝いをしようとしていた。俺もその一人だが。

皆、エプロンを付けて各々手伝いを始める。どうやら作るのは肉じゃがらしい。

「陽子、醤油大さじ二杯入れて」

「よしきた」

芋や人参などが煮立った鍋に、陽子が醤油を入れる。……スプーンで量らずに醤油ボトルそのままで。綾は流石に驚愕した。

!?　ちゃんと量って！」

「えーいいんだよこんなのは目分量でー」

だからいつも薄味なんだよー。と陽子が嫌味ったらしい口調で言うと、陽子から醤油ボトルを取り上げた。

「もうっ、陽子の長所は『大らか』な所だけど短所は『大雑把（おおざっぱ）』だわ!!」

ぷんすかとなんとも可愛らしい口調で陽子の評価をする。
「褒めてるのか貶してるのか」
……どっちもじゃね？
「――――なら俺がやるよ」
流石に少し見兼ねた俺は綾の手伝いをしようとした。
「ええ……健できんの？」
陽子にどこか失礼な事を言われた気がするが、まあ多分それは俺が男だから、という事だからだろう。
「できるも何も、家で朝と夜は毎日俺が作ってんだぞ」
「えっ、健すげー！」
なんていう手のひら返し。昼は母さんが弁当作っているから省くけどな。
「じゃあさ、綾の代わりに毎日私に弁当作ってよ！」
「んな無茶な!?　ていうか言い方！　それじゃ何か綾に失礼だ！」
また無茶ぶりされた。これ言われんの何回目だろうな（白目）。てか「綾の代わり」って……言い方の問題かもしれないが、綾がいらない子扱いされてるみたいだぞ。
「なぁんだ、最初から健に任せておけば良かった」
「あれー何か私いらない子扱いされてるー？」

棒読みで言う陽子。揚げ足取られたな。
「いや、そんな事ないぞ。手伝ってくれるだけでもありがたい」
けど、先程までの行動に目を瞑るとすれば、綾の事手伝おうとしていたのは事実だから手伝うだけでも大助かり。
「そ、そう？　てへへ……」
陽子が照れていた。
「この中に卵を割ってくれる？」
「ＯＫー」
綾がアリスとカレンの外国コンビに金属ボウルの中に卵を割って欲しいとの事。カレンは承諾の声を上げる。
「大丈夫かなあの二人。変な知識を頼りに頭で卵を割るとかないよな？」
俺は何となく不安に声を上げる。しかも頭で割るのは生卵じゃなくてゆで卵だし。
「あはは、健君、流石にアリスとカレンはそんな事しませんよー」
野菜の皮を剥いていた忍が笑いながら言う。
「だよなぁ。流石にないか」
忍がそう言うなら大丈夫だろうなきっと。
「アリス、カレン、卵割れましたか――――」

忍が二人に声をかけた瞬間、「きゃー！」と悲鳴が上がった。
何事かと俺も二人を見ると、金髪の頭が卵の黄身と白身で汚れていた。
「ま、まさか健が言った事が当たるなんて……預言者か!?」
「んな事言ってる場合かい！」
陽子が場違いな物言いに俺がツッコみの声を上げる。そうしているうちに綾が二人に布巾を上げていた。
「二人共、お風呂沸いてるから入って」
綾が気を利かせて頭と顔に付いた汚れを取って貰おうと、布巾で拭いている二人にお風呂を催促する。
「私バブルバスがいいデス」
「泡!?」
人の家なのに冗談紛いなのか割と失礼な事を仰るカレン。俺の家にもバブルバスないのに……。
「ごめんなさい、そういうのはないの」
そう言いながらタンスの引き出しから入浴剤らしき袋を取り出す。
「入浴剤ならあるわ、お花の香りとか。どれがいい？」
「わたしヒノキ風呂がいいな！　本物のやつ！」

檜風呂!?　高級温泉かよ。
「それもちょっと……」
無理だな、流石に。お家の風呂で柚（ゆず）とかを入れたりして、温泉気分を味わえるみたいな事はできない事はないが、流石に檜風呂は行くのも買うのも高校生の俺達には手を出せない値段だ。
これが純粋な外人の感性だと考えると、恐ろしくなってくるな。
とりあえず二人にはそのまま入ってもらう事に。アリスとカレンが入って間もなくして、何故か忍がうっとりとした表情をしていた。
「忍、どうした？」
「金髪少女のお風呂って、すごく芸術的……」
「どこだよ!?」
多分変な想像をしていたんだろう。二人がどこかの外国の風呂でうふふ、あははとかやってる様（さま）、漫画とかで見るような……そんな妄想に、陽子がツッコんだ。
「アリスは私と一緒にお風呂に入ってくれないんですよー」
恥ずかしがり屋さんで……と忍が言うが、いくら女子とはいえそもそも日本の風呂に二人で入るスペースなんて無いような気がする。
「外国と日本ではお風呂事情が違うのかもね」

「でもこないだ私達に『一緒に温泉行きたい』って言ってたよね」
「そういえばそうね」
綾と陽子の言ってる事は俺が聞いていない話だ。だけどあくまで女子同士だから、って考えると納得できた。
「あれ……私……嫌われて……る……？」
「そんな事ないと思う！」
忍の震え声で絶望してるような顔を見ててすぐさまツッコむ。忍の事はアリスも好きだと思うし嫌われてる要素もない……はず。
「タダイマー！」
「おっ、カレン達上がったか」
そんなこんなしている内にカレンとアリスが風呂から上がってきた。カレンの髪はいつも通りのセットだが、アリスはいつものツインテに纏めておらず、長い髪をウェーブ状に垂らしていた。
「……こう見ると、アリスが外国人って実感湧くな」
「えー何言ってるの？　私は元々外国人だよ？」
アリスの姿を見て、どうやら独り言を呟いたつもりが聞こえていたようだ。
「まあそうなんだけど、ブロンドの髪を垂らしてるといつもと違う感じがしてな」

というより、普段は確か忍〝が〟ホームステイ中にプレゼントしたという簪（かんざし）を常に挿しているからか、あからさまな外国人、って印象が自分の中でなかったのかもしれない。ただ見慣れていないってだけかもしれないが。

「そうかな？　あっ、そうそう、髪で思い出したけどケン、カレンったら酷いんだよ――――」

何でもアリスが言うには、洗面所に置いてあった綾のトリートメントかと思ったカレンが、アリスの髪をとかしている時に掛けたのが、綾のお父さんが使っている――――〝育毛剤〟だったという。

しかも「違うデス！　漢字だカラ分からなかったデス！」とわざとではない言い訳をしていたらしい。

……うん、早まる癖を直した方がいいな。

☆☆☆

『ごちそーさまー！』

「お粗末さまでした」
夕食も食べ終わり、綾を除く食後の挨拶で締め終わる。
実際、味付けも丁度良かった。また、新たな発見として、陽子が危惧している綾の味付けが薄いのが、単に調味料等の量が単に少ない事を俺が料理に加わっている最中に判明した。
だから今回、丁度良かったのかなと思った。
「そういえばシノ、さっき『大事な事忘れてる気がする』って言ってたけど、思い出した？」
アリスが言うが、俺もそうだが多分カレンもそんな事を聞いていない。きっと二人の中で話し合っていたんだろう。
「それがまだ……あっ――――そうですっ！　思い出しました！」
おっ、何というタイミングの良さ。思いついた表情の忍。
「お母さんが夕飯のおかずに肉じゃがを作ってくれたんでした！」
どうぞ、と肉じゃがが入った容器をテーブルの上に置く忍。
「「タイミング悪い!!」」
うーんこのタイミングの悪さ。俺と綾の声が重なった。
ちなみに、この肉じゃがは俺と陽子で平らげました。

☆☆☆

「さて、俺そろそろお暇するかな」
軽く皆と駄弁った後、俺は重い腰を上げて帰る支度をし始める。
「エ～ッ、ケン帰っちゃうんデスか？」
カレンが不満の声を上げ、他の皆も俺に視線が集まる。
「まあな。俺がいたらまずいだろ。あ、カレンはそのままいてもいいよ。帰るのは俺だけだから」
カレンは女子だから問題ないとは思うが。
「えー、別にいいじゃん残っても。お前それでも男か？」
「陽子、それ本気で言ってるのか？」
寧ろその男だからダメだと思うのだが。
「綾も、俺がいたらダメだろ？」
彼女達を誘わなかったら、今日は一人だけだった綾に訊ねる。

「べ、別にいても……いいわよ」
「えぇ……（困惑）」
そこは「ダメよ！」とか言うところなんじゃないの？
しかし困った。仕方ない、ここはあまり言いたくなかったが、我が姉を出汁に使う事にする。
「そ、それに、家には姉さんもいてだな――――」
そこまで言った直後、俺のポケットから電子音が鳴り響く。
「……なんだよこんな時に。わりい、ちょっと失礼」
俺は謝りを入れつつ、彼女達から少し距離を取る。
そしてポケットに入れていた携帯を取り出し、画面を見る。相手は姉さんだった。
俺は訝しげに感じながらも、もしかして何かあったのかと思い、通話のボタンを押す。
「もしもし？　姉さん？」
『あ、健？　おいっす～☆』
どこぞの陽気な腹ペコ王女様よろしく、そんな呑気な声が通話口から聞こえ、どうやら切羽詰まった状況ではないようだ。
「……どうかしたの？　何か用？　これから帰るんだけど」
『あっ、そうそう！　その事で話があったのよ』

何だろう？

『私――勇の家に泊まる事になったから！』

「――は？」

聞き捨てならない姉さんの台詞に、俺は間抜けな声が出てしまう。

「姉さん、勇さんの家に泊まるって……それマジ？」

『マジマジのマジ！　ほら勇、あんたも出てよっ』

何やら向こうで急かしたような声が聞こえたと思うと、別の女の人の声が聞こえてきた。

『健君やっほー』

「ホントに勇さんだ……」

明らかに姉さんと違う声で、忍達に次いで聞き慣れた声。そして俺をよく弄るお人。

後ろの方から「お姉ちゃんがどうかしたんですか？」という声が聞こえたが、とりあえず割愛。

『勇や忍ちゃんのお母さんにも許可取ったし、そこは安心して』

と、再び姉さん。

「なるほど、姉さんが泊まるのは分かった。けどそれと帰るのに何か理由があるの？」
姉さんが大宮家に泊まるのは自由だ。俺に止める権利がある訳ではないが、これから帰る時に何か関係があるのか分からなかった。
『あんた鍵は持ってってないでしょ？』
「あ？　鍵？　鍵――あっ……」
今の今でやっと気付いた。そうだ、綾の家に寄る前、姉さんが家にいると思って、家の鍵を置きっぱなしにしてたんだった。
しかも一応両親も鍵を持ってはいるが、鍵の管理は基本俺と姉さんになる。そしてその姉さんは大宮宅に泊まるから鍵がない状態で家に帰る事になる。
それに漬け込んで、姉さんに謀られたって事だ。くっそう。
――ん？　待てよ？　両親も鍵を持ってるって事は……。
「いや、でも、流石に父さんや母さんも既に帰ってる頃のはずじゃ……」
綾の家に時計を見る瞬間、通話口から姉さんの『んーん？』という否定らしき声が。
『今、父さんも母さんも家にいないよ？』
「……はい？」
今なんつったこの人。姉
「いや、いくら何でもそんな嘘には――」

『嘘じゃないですぅー本当ですぅー』
　なんで口を尖らせたような口調なんだウチの姉は。って、そうじゃなくて。
「じゃあなんでいないんだよ？　とりあえず、まずそこを知りたい」
　両親は先生の仕事をしている。確かに残業とか重なって、帰るのが遅くなるのかもしれないが、多忙でも日付が変わる前には帰ってきている。
　では何故いないのか。その訳を知りたかった。
『んーとね、父さんと母さんには健が明日学校休みで友達の家に泊まる事は伝えてるし、私も友達の家に泊まる事を伝えたんだよね』
「ふむふむ」
『んで、その事を伝えたら、二人はオッケーって言ったの』
「なるほどなるほど」
『そしたら、父さん母さんは二人きりで過ごすってホテルに泊まる事に――――』
「ちょっと待て」
　ちょっと待て。大事な事なので二回（以下略）。
「なんで親がホテルに泊まるんだよ!?」
『それは私が知りたいわよ！　まあ大方二人きりでラブラブしたいのかもしれないけど！』

「既に息子と娘を産んでるだろ!?」
両親は次男か次女か知らんけど作る気か!?
しかも電話口から『ぷくすす……』笑いを堪えてるような勇さんらしき声も聞こえてるし!
『まあそんな訳で。お二方も今日は家にはいないっていう事です』
「解せぬ」
もう頭の中がぐちゃぐちゃで整理が追いつかん。俺はそんな一言しか出せなくなっていた。
『弟クンも綾ちゃん家で楽しんできてねー。そいじゃおやすみ』
「……おやすみ」
姉さんがテンション高い声で言うのに対し、俺はもうゲンナリとした声でしか返せずにいた。
プツッと電話が切れる音を確認し、俺はポケットに携帯をしまう。
「えっと……」
後ろから困っているような綾の声が聞こえた。
この時、忍や金髪ーズはきょとんとしており、陽子は笑いを堪えてお腹を抑えていた。
「ウチに、泊まる?」

同情混じりの綾からの問い。そんな彼女の問い掛けに俺は……。

「……お世話になります」

素直に彼女の好意に甘える事にし、こうべを垂れた。

「ようし！　健も泊まる事が決定したし、怖い話大会をやろうか！」

陽子が快活な声で言う。

なんでお前が仕切ってるんだとか、男が泊まるのに抵抗を感じないのとか、色々言いたい事はあったが項垂れている今の俺には言う元気がなかった。

「ひっ、怖い話？」

「ワーイ！　Ｈｏｒｒｏｒデスね！」

陽子の切り出しに対し、綾がビクッと体を固くし、カレンがいい発音で盛り上がっていた。

「もう好きにしてくれ……」

俺の独り言は誰にも気に留められる事なく、そのまま怖い話が始まったのだった。

余談だが綾は怖い話をすると聞いてその場から去っていたが、皆が怖いー、とかきゃーとか言っている内に「どうしてみんな怖い話なんか好きなのよっ！」と寂しさのあまりか定かではないが、仲間に入ってきた。

なお、寝る時は勿論皆と一緒には寝ず、ソファで寝る事に。家でも姉さんやカレンと

は別々に寝てるからね。だから何もなかった。なかったらない。

☆☆☆

「健、卵かき混ぜてくれる？」
「あいよー」
――――翌朝。俺は早起きし、綾と一緒に朝食の準備をしていた。
……単にあまり眠れなかった、という事もあるけど。
「おはようございます」
そこへ、忍がやってきた。
「しの、おはよう」
「おはよう忍」
俺と綾も挨拶を返す。だが……。
「忍、顔青いぞ。大丈夫か？」
忍の顔が青ざめている事が気がかりだった。

「えっ、しの風邪引いたの？」
綾も彼女の事を心配する。
「いえ……実はすごく怖い夢を見てしまって……」
忍はそう言う。風邪ではない事に安堵するが、今もがくがくと震えてる事に余程怖い夢を見たんだなと思えた。
「あー昨日怖い話をしたからじゃないか？　寝る前に怖い話をすると悪夢を見るってよく聞くし」
「そうかも……」
『おはよー』
俺と忍が話していると残りの皆が起きてきた。
「おはようシノ」
「おはようございます、アリス」
目を擦りながらアリスは忍に挨拶を交わし、忍も微笑みながらアリスに挨拶を返した。
「アヤ……お水、ある？」
「お水欲しいの？　あるわよ」
まだ寝ぼけ顔のアリスが、お水を要求してきた。朝起きた時って喉渇くからな。

「それで、その夢ってどういう夢だったんだ？」
「それがですね、私とアリスが風呂に入ろうとすると、アリスがダメと言ったんです。それでアリスの髪を水につけると――――」
「あっ、アリス危ない!!」
俺が忍の言っていた夢の続きを聞こうとすると、水を貰ったアリスが危うくコケようとしたところに綾の大声が響き渡る。
二人してアリス達の方を見ると、アリスの金髪が水でビショビショに濡れていた。そのせいで完全に目が覚めたようだが。
「アリス……」
アリスが「あ～あ」とか言っている中、忍は水に濡れた少女をじぃと見据えている。
「良かった!!」
そして、涙ぐみながら笑顔で言い放つ。どこが「良かった」のだろう。
「ええっ!?　全然良くないよ!?」
流石に水に濡れて良かったとは言えないだろう、アリスはそうツッコんだ。
後から聞いた話だが、夢ではアリスの髪を水につけると、〝真っ黒〟になるという。
それは忍にとって大ショックものだろう。なんか納得できる自分がいた。
その後は何事もなく皆で朝食を食べたり、駄弁ったりしてしばしの時間を楽しんだ。

こうして、お泊まり会は無事……とは言い難いかもしれないが終了した。忍が「旅行みたいで楽しかったです」と言っていたが、まさにその通りに思えた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１５　先生と占い

私の名前は烏丸（からすま）さくら。とある高校の英語教師です。
「あっ先生！　おはようございまーす！」
「おはよう」
一限目に授業がある教室に向かう最中、生徒達に挨拶され、私も返事をする。
生徒はみんな可愛いし、毎日とても楽しいです。
「おはようございま～す！」
教室の扉を開き、生徒達に挨拶しながら教卓に向かう。
教卓の上に立つと、皆が持っているのが数学の教科書で、違和感を抱く。
「あら？　みんな、教科書間違ってるわよ～」
「あ……いえ」
私が皆に対して言うと先頭の女子生徒の子が否定の言葉を言う。
「先生の授業は隣のクラスかと……」
「ええっ？」
そう言われ、急いで学級日誌を確認してみる。

調べてみると、確かに担当の教室は隣のクラスだと書かれていた。
「やだ本当〜！」
明らかにクラスを間違ってしまい、顔がかーっと熱くなる感覚を覚える。朝から何という恥ずかしい事を……！
ですが、こんな事ではくじけません。

気を取り直して、朝から始まる１―Ｂの教室へ行く。
「それでは、テストを返します」
授業を始めると同時に、以前にやった小テストの答案を皆に返却する。
「大宮さん」
一番初めが先頭のアリス・カータレットさんの隣に座る、大宮忍（おおみやしのぶ）さん。
「はいっ」
笑顔で元気に返事に答える大宮さん。なのですが……ギリギリ二桁の点数でした。
大宮さん……熱意は伝わるけれど……。
でも、勉強が苦手なのに夢に向かって頑張ってる。それは素晴らしい事だわ。確か夢は……通訳者だったかしら？
だったら、私もそれが叶うよう応援してあげなくちゃ。

「次はもう少し頑張ってね」
私はそう言いながらその点数の下にある文字を加えた。
「わーい！　努力賞です！」
「先生！　あまり甘やかさないでくださいっ」
あら？　大宮さんが喜ぶのに対して小路さんにそう言われた。
甘やかしたつもりじゃなかったんだけど……。

一通り皆にテストを返却した後、授業を開始する。
「それではこの訳を……猪熊さん」
黒板に英文をつらつらと並べた後、猪熊さんに答えてもらうよう指摘する。
「はいっ。分かりません!!」
勢いよく立ち上がってくれたと思ったら、堂々とそう言われちゃったわ。
「堂々!?」
隣にいる八坂君も同じ事を思っていたのか、そうツッコみを入れていた。
「でも小路さんなら答えられると思います。小路さんは頭も良いし、とても努力家です！」
「責任転嫁かよ!?」

猪熊さんが小路さんに向けて言う。小路さんのいいとこアピールされたけど流石に先生も反応に困っちゃうわ……。

「……コホン。先生！　わ……私に答えさせて頂けますか!?」

「え？　えぇ……どうぞ」

小路さんに自信満々に言われてしまい、つい良いと返事をしてしまった。

「いいんだ!?」

それにしても八坂君は元気ね。あんなにツッコんで疲れないのかしら。

☆☆☆

「先生、質問が――――」

授業後、中休みの時間。

さっきまで授業をしたクラスの教え子に、イギリス人の女の子がいます。

「シノがここ分かりづらいって。シノが苦手なのが――――。シノが――――」

最初の頃は少し距離を感じたけれど最近はとても好意的。現にこうして質問に来て

くれている。
「アリスさんは本当に大宮さんが好きですね。先生も（アリスさんが）大好きですよ～」
「……」
何!? この表情!? アリスさんが何故か怯えた表情をしていた。特に悪気はなかったのに!?
「え……えっとねアリスさん――――」
私がどう言葉を返そうかと悩んでいた時だった。
「わっ!!!」
「きゃああ!?」
後ろからいきなり大声をかけられ、心臓が口から出ていくような感覚を覚えた。
その直後、全身からふらぁっと力が抜け、へなへなと思わずその場に足を着いてしまう。
「ごっごめんからすちゃん、そんなに驚くとは!」
どうやら犯人は猪熊さんだった。まだ心臓がドキドキとしている。
「ちょっと陽子、先生をびっくりさせるような事しないでよ」
「先生、大丈夫ですか?」
小路さんや八坂君も来ていたようで、八坂君に至っては私の心配をしてくれていた。

「ん？　先生、何か落としたよ」
アリスさんが写真を拾い上げる。それは私が抱えていた日誌から落ちたものだった。
「もしかして、恋人!?」
「違いますよ。飼っているペットの写真よ」
「ウサギだー可愛い～」
アリスさんが素直な感想を言う。
「名前はなんて言うんですか？」
「えっとそれは……」
小路さんにそう言われたけれど……これは答えていいものなのかしら。
「あのぅ……」
アリスさんの顔をちらっと一瞥する。
「？」
私が逡巡していると、アリスさんも私の顔を見てきた。
「な、内緒です！」
「（何故!?）」
恥ずかしくなり、やっぱりアリスさんの前では言い出せなかった。
この時、小路さんが困った表情をしていたのは私には知る由もなかった。

「ケンー、カラスマ先生囲んで何してるんデスかー?」
「ん、カレンも来たか」
八坂君が言ってて思い出した。あの子はI—Aの九条(くじょう)カレンさんだわ。アリスさんと同じイギリス人だと思いがちだけど、母方がイギリス人なのであの子はハーフ。
「ねえねえ、名前なんて言うのからすちゃーん」
「気安いぞ陽子」
しつこく聞いてくる猪熊さんに八坂君が注意していると。
「カラスマ先生のあだ名は『からすちゃん』。u〜n(う〜ん)、もう少し呼びやすいあだ名があるといいデスネー」
「例えば?」
「カ……カラスミ……」
響きが似テルから……と九条さんは言うものの……。
「あぁ〜っ! それはダメ〜〜」
『カラスミに何か嫌な思い出が!?』
皆の声が聞こえた気がするけど、思わず私は頭を抱え込んでしまって、それどころではなかった。
「アヤヤー、私も何かあだ名欲しいデス!」

「今更!?　『アヤヤ』はカレンが勝手に呼んでるだけだけど」
「私は『忍』なので、『しの』です！」
「そんな感じがいいわね。カ……カレ……。カレー……はっ！　カレーなんてどうかしら！　いえ、食べ物のカレーと勘違いするかしら。『カレー、カレー食べる？』みたいな……」
「やっぱいいデス」
九条さんと大真面目な小路さんとそんなやり取りがあったのは別の話。

☆☆☆

次の授業はＤ組です。
「よし、今度は間違えないようにしよう」
そう気を張りながら私は教室の扉を開く。
「こんにち――わぁ!?」
扉を開けた瞬間、パーンと突然大きな音が鳴り響き、身を竦ませてしまう。

『先生、おめでとー!!』

その直後、教室中の生徒達から賛美の声が上がった。

再び、私はその場に足を着いてしまう。

「って、えっ、烏丸先生!?」

「やばい間違えた!」

「はー、はー」

こんな事ではく……くじけませ……。

どうやら先程の大きな音はクラッカーだったようで、さっきの猪熊さんの驚かしに続いて、本日二回目。

ここは教師として、ちゃんと叱らなければ!

「あ……あなた達、こういう心臓に悪いイタズラは……!」

言葉を続けようとすると、一人の生徒の子が私に思いもよらない事を言ってきた。

「――ごめんなさい。担任の田辺先生が今日誕生日なので、サプライズをしようと……」

「え……」

田辺先生の誕生日……ああ、そういう事だったのね。

「あなた達……」

皆いい子で、私はじーんとつい感極まってしまう。

授業後……。

「いい生徒を持ちましたね、田辺先生！」

私は皆のプレゼント代わりにクラッカーの残骸を田辺先生に渡しながらそう言った。

「何ですかこれ」

☆☆☆

「大宮さん、スカートにゴミが付いてますよ」

「わぁ～、ありがとうございます♡」

私は教室移動している大宮さんを見つけ、スカートにゴミが付いていたのでそれを払う。

大宮さんは喜んでいるものの、どこからか視線（アリスさんの）を感じる……。

私の事を遠い目の如く見ている……仲良くなれたと思ったのだけど。

ここはハッキリと聞くべきだわ。
「アリスさん！　私の事嫌い？　直して欲しいところがあったら正直に教えて!!
……よしっ」
職員室でのシュミレーションはばっちりね。
「烏丸先生……」

その後、実際に聞いてみると。
「え？　わたし先生の事好きだよー」
良かった!!「シノと仲良しすぎるのはちょっと～」と言われた気がするけど。
「実はね、さっき言えなかったんだけど、うちのウサギちゃんの名前、『アリス』って言うの。アリスさんが可愛らしくて思わず同じ名前を――――」
私がそこまで言うと何故かアリスさんとの距離が空いていた。
「って、あれっ、ちょっと引いてる？」
単にアリスさんが引いてただけみたい。

☆☆☆

「実はウサギ写真の他にもう一枚、落としてったのを拾ったんだけど～」
「いつの間に……」
陽子がいきなりそう言ってくる。俺は落としていったのが烏丸先生のウサギ写真しか分からなかった。盗った訳じゃないよな？
「これってからすちゃんの昔の写真かな!!」
そこに映っていたのはウチの制服を着た烏丸先生らしき人物。それと同時に何か違和感が。
「かわいー！」
「なんかでも、今と全く変わってないけど？」
忍は褒めていたが、綾の言う通り昔の姿というよりは、今の烏丸先生とほぼ一緒な気がする。
その瞬間、近くから「ダメー！」という声が聞こえてきた。
「いっ猪熊さん、その写真はダメ！」
「わっ、バレた！」

地獄耳か、烏丸先生がだだだ、と走りながら俺達の近くまでやってきた。
「それは忘年会のコスプレ大会で撮ったものなの～！」
「何やってるんですか先生!?」
綾がツッコんだ。というか、ウチの制服を着こなしてる時点で、随分似合ってるな!?
と俺は思わざるを得なかった。

☆☆☆

「占い見てから行きましょう！」
「うんっ！」
大宮家。わたしとシノは登校時間だけど、シノの言う通り、占いを見てから登校する事に。
「二人共、遅刻するわよ～」
シノとイサミのマムはそう言うけど、実のところわたしとシノはこう見えて占いを信じている派なの。

ちなみにわたしがおひつじ座で、シノがふたご座。シノと星座が違って、ちょっと残念。

『今日の一位はふたご座のアナタ！』

「わぁ～っ、一位です！」

「良かったねーシノ！」

今日のシノは絶対いい事あると思うと、素直に嬉しい。

『そして、今日の最下位は――ごめんなさ～い、おひつじ座のアナタ！』

あっ……。

その後、シノと一緒に登校し始めるけど、わたしはシノの傍に寄るどころか、くっつくようにした。

「どうしたんですか？　アリス～」

「できるだけ幸運の人の近くにいようと思って！」

シノの制服の裾を掴みながらそう言った。

一方、同時刻。

『今日のてんびん座のアナタ！　ラッキーカラーはオレンジです！』

「えぇ～？　オレンジ色の服なんてあったかしら～？　でも選んでると遅刻しちゃうし

……」

☆☆☆

「そうは言ったものの、朝から災難だったよ～」
学校の休み時間、アリスが疲れた顔でそう言っていた。
「アリス、どうしたんだ？」
「アリス、占いが最下位だったので……。占いなんて、そんな気にしなくても大丈夫ですのにねぇ」
俺が聞くと、代わりに忍が微笑みながら答えてくれた。
しかし、占いか……俺は元々そういうのはあまり信用しないタチだ。何せ、例え一位だったとしても、悪い事は普通に起こる時もあるし、逆に最下位でも良い事があったりするからだ。
「まあな。こう言っちゃアレだけど、占いってあまりに当てにならないもんだからな」
「そうですよね～」

「でも、シノが大変な目に遭ったんだよ」
　そうなの？　アリスが言っている事に俺は疑問に思う。
「何があったんだ？」
「車が跳ねた水にかかりそうになったり、電柱にぶつかったり……きっとわたしの悪い運が全部シノに……！」
「……そう？　あまり関係ないと思うが」
　迷信じゃあるまいし。
「でもでも、その後外国人の双子ちゃんを見たんですよ！　金髪で可愛くて……朝からいい事ありました！」
　忍が興奮しながら言う。どうやら災難だったのはアリスじゃなくて、忍の方だったらしいが、当の本人は凄まじくポジティブシンキングだった。
　流石というか大物というか……そこが忍のいいところなのかもしれないな。まあ、やはりというか本人がいい事あったと言ってるから、占いにはあまり当てにならないな。
「でも今月の占い、しのはあまり良くないみたい」
　綾が占いの本を見ながら言う。それに対して忍はガーンとがっかりした表情を見せるものの……。
「占いなんて関係ないよ！　シノはすっごくポジティブなんだから」

「ありがとうございます。私はアリスが居るだけで幸せなんですよー」
アリスが自信満々に言ってくれた事で、笑顔を見せる忍。こういうところは流石はアリスだな。
「アリスはまるで魔除けのお守りですね！　えへへへっ」
「……（何かやだ）」
何かやだ（断言）。忍の言っている事は褒めてるつもりなのだろうか分かりません。

☆☆☆

「草野球、しまショーデス♪」
お昼休み。ニットを被ったカレンが俺達の教室にやってきたかと思うと、野球のボールを翳しながらそう言ってきた。
「野球？」
「Ｙｅｓ！」

俺の反応にカレンは返事をしながら俺達の元へと駆け寄ってくる。
「良いけどルールが分からないわ」
綾は野球とか見なさそうだからなぁ。それは忍やアリスにも似たような事言えるかもしれないけど。
「そこはヨーコとケンが！」
「いや知らんのかい」
「ほんとな」
カレンの物言いに陽子と俺がツッコみ返す。
てか陽子は分かるけど俺が野球のルール知ってるのかって？　小さい頃草野球したりたまにテレビで野球中継とか見たりするから知ってる。
「けどこの人数じゃ無理じゃない？　野球って普通九人でやるものだし」
俺がそう言うと陽子も「だよなぁ」と相槌を打つ。
まあカレンが言ってるのは〝草〟野球だし、ある程度適当でもまかり通ったりするから自由なものでもあるんだけどな。
「実はパパが野球好きなので、道具を借りてきたのデス！　バットにグローブ……」
カレンがバッグから野球用の道具を取り出す。ていうかカレンのお父さんって、野球好きだったのね。

「それとボールデス！　ちょっと汚れてマスが、ガマンして欲しいデス」
　そして、硬式のボールを取り出す……待て、硬式？　よく見ると、ボールに文字らしきものも書かれてるし……。
「それサインボール！」
　俺が言うよりも先に陽子がツッコんだ。サインボールを流石にボール代わりはダメでしょ……。
　流石はカレンのお父さん。やる事も規模が大きいねぇ。
　俺達は揃って校庭に移動。ちなみに部活の練習してる人もいないので、何だか広く感じる。
「私バッターやりたいな！」
　陽子がバットを持ちながら言う。
「ＯＫ～じゃあ私は監督やりマス」
　カレンが監督か。
「アヤヤはマネージャー」
「女子マネってやつね」
　綾がベンチの紅一点。いや今は俺以外皆女子だけど。
「シノは応援」

「はい！　フレー、フレー」
　忍が腕を上げながら応援し始める。
「アリスはマスコットキャラデス」
「へ？」
「球場にいるキグルミデス」
　アリス……不憫。
「て事はじゃあ俺がピッチャーか」
　そうじゃないと試合が成り立たないし。
「ｎーｎ？　ケンは審判デス！」
「ええっ……？」
　ボール（サインじゃないやつ）とグローブを持とうとしたのにカレンにそう言われ、ガックリと肩を落とす。
　仕方なく、俺はベースの後ろに立つ。
「それじゃ――――かっとばせー、ヨーコ！」
「何を!?」
　一体何と戦っているんだ……。
「流石にこのままじゃ試合にならないから、投げて打つ遊びにしよう？」

陽子からの提案。人数も圧倒的に足りないし、そうした方が良さそうだと俺は即、了承した。
「いくよーアリス」
そして、陽子がピッチャーの役割に。
「は～い。って、わたしが打つの？」
アリスがバッターに。
「アリス、手加減はいらないぞ」
その俺はというと、キャッチャーに。流石にキャッチャーグローブは無かったから普通のグローブで代用。
「フレー、フレー、アリス！」
「女子マネって何をすれば……」
忍と綾は引き続き、応援と女子マネ。
「プレーボール！」
カレンも同じく監督。今の発音は中々だった。
アリスがバッターボックスに立つと、陽子が振りかぶって――――投げた！
「わわっ!?」
ズパン！　といい音が鳴り響く。

聞いて分かる通り、アリスは振り遅れて空振り。陽子が投げたボール（女子らしく下投げ）は俺のグローブに向かって一直線に突き刺さった。

「ナイスボールー陽子！」

俺は女子からぬ勢いでグローブに収まったボールを掴み、そう言いながら陽子に返す。実はまだちょっとグローブはめている左手がジーンとしている。

「そっちこそ！　ナイスキャッチー！」

陽子が手を振りながらボールを取る。陽子はスポーツ全般得意だから流石だな。

「ヨーコの早い球を取るとは流石はケンデス！」

「そうね、私じゃ全く取れる気も打てる気もしないわ……」

「健君流石です！」

外野（意味合いが違うが）の三人がそう言っているが、そんなもんかなと思ってしまう。

その後も、何度も陽子が振りかぶっては投げ、アリスはスイングをするものの空振り、それから俺がキャッチするの繰り返し。

「全然当たる気がしない……」

アリスがバットを杖替わりにしながらショボくれる。

「諦めるのはまだ早いデス！」

「そうだぞ、カレンの言う通り。それに段々タイミングが合ってきてるし」
俺が励ましの声をかけるが、アリスはまだ落ち込んだままだ。
「でも……わたし今日運勢は最悪だったし」
その事をアリスは引きずってるのか。んーどうしたものかな、と俺が悩んでいると、ずっと応援している忍が目に入った。
「アリス、忍が応援してるぞ」
「え？　シノが……？」
俺が伝えると、釣られてアリスも忍を見据える。
「頑張れ頑張れアリス！　きっと打てますよ！」
「シノ……！」
忍の応援に火が付いたのか、アリスはバットを握り締めて、バッターボックスに立つ。
「いくよー！」
陽子がそう言いながらボールを振りかぶって――投げた。
――次の瞬間、カキンと小気味いい音が鳴り響いた。
アリスが打ったのだ。
「当たった……！　シノ、当たったよ！」
「すごいですアリス！」

「一塁に走らないと！」
バットにボールが当たった事を褒める忍と、野球のルールに則（のっと）って言う綾。
（健……）
（ああ……陽子……）
俺と陽子は顔を見合わせる。
（（今のがファールとは言えない!!））
「やったなーアリス！」
「ナイスバッティング！」
陽子と俺は、ヒットと言えない代わりに当たった事を褒める事にした。

余談だが、英語の授業がラストだった時、烏丸先生が教卓にミカンを置いていたんだが何でだろうな？　本人に聞いても「オレンジです！」と言い張るばかりだったし。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１６　女子に体重を聞くのはご法度

「さてお昼だー。弁当食べよ」

午前の授業が終わり、お昼休みの時間。俺は母さんが朝早く作ってくれた弁当を鞄(かばん)から取り出す。

弁当は母さんが作ってくれるが、基本朝食と夕食は俺が作っている。何せ、両親は共に朝早くから仕事に出かけているし、負担をかけすぎる訳にもいかないからだ。

そう思い、俺は二人の代わりに朝夜の飯を作ると予(あらかじ)め志願している。

「いいなー健」

すると後ろの席にいる陽子からそんな声が上がった。

「え？　陽子も、弁当あんじゃないの？」

まるで自分の弁当がないみたいな言い方だが、普段から陽子も弁当を持ってきていたはずだ。

すると彼女はしゅんとしながら言い放つ。

「そうなんだけど、早弁したのでお弁当がありません」

「だから何やってんだ」

空の弁当箱を見せる陽子。前にも似たような事あったような。
全く、コイツはよく早弁してるよな。今に始まった事じゃないけど。
「だから健、その唐揚げ一個ちょーだい？」
俺が弁当箱を開けたのを見計らったのか、弁当の中にある唐揚げを見て俺に懇願してきた。
「……ったく、しょーがねーな――――ほれっ」
しょうがなく思った俺は箸を使って彼女の空の弁当箱に唐揚げを入れる。
「ありがとー！」
「これに懲りたらあまり早弁すんじゃねーぞ？」
「無理かも」
「せめて努力しろよ!?」
無理と即答されて俺はツッコみの声を上げる。善処ぐらいはして欲しい……。
「健、私の唐揚げを上げるわ」
すると今度は隣の綾が消費した唐揚げを譲ると言ってきた。
「えっ？　いやいいよ。綾の食べる量が減るだろ？」
それを申し訳なく思った俺は手を振っていらないと示す。
「唐揚げ一個ぐらい、私は大丈夫よ」

だが、綾は遠慮はいらないとばかりに話す。
「それに早弁した陽子が悪いのに、わざわざ健が上げる必要はないわよ」
「まあ確かに」
俺が言うと同時に陽子が能天気そうにえへへーと笑う。
「だから……べっ、別に上げたくてそう言ってる訳じゃないからね！」
何故か顔を赤くしている綾が注意喚起を促してきた。
「お、おう」
俺が答えに迷っている中、綾が俺の弁当箱に入れようと唐揚げが刺さったフォークを差し出してくる。
しかし綾はハッと何かに気付いたのか、弁当箱に入れずに俺の前に差し出してきて――。
「あ……あーあー」
「え!?　何っ!?」
まるで赤ちゃん言葉の如く言う綾の意図が読めなかった。
後から聞いた話だが、陽子曰く「近くにバカップルがいて、『あーん』してたからそれに綾が憧れてたんじゃない？」との事。
カップルにしてた事と同じ事をしようとしたのだが……そう思うと何だか恥ずかし

いな。
「お昼、おっ昼～♪」
そんな中、カレンがおじゃまするデスーと言いながら俺達の教室にやって来た。
……色んなパンやお菓子を抱き抱えて。
「カレンっていつも来るの遅いよね。何してんのー？」
陽子が訊ねる。確かに、カレンの弁当も母さんが作ってたはず。
「お弁当食べてカラ来てるノデ！」
俺が母さんには頭が上がらないと改めて思ってると、クラスの子達と弁当食べてから来てると言って、様々な菓子パン等を机の上に置いた。
「じゃあそのパンやお菓子は？」
今度は俺が訊ねる。
「お地蔵サンに果物やお菓子とか上げるデスよね～？」
「お供えね」
綾の言う通り、お地蔵さんには故人の霊を慰めるために食べ物等のお供えをするのが一般的に知られている。
「あれと同じようなものデス」
「つまり全部もらいものか!!」

陽子が声を荒げる。確か前にも『クラスの皆から菓子パンをもらったデスー！』って家でも聞いた気がする。

カレンの言う話だと、クラスの女子達からお菓子をもらったり、中には手作りの物もあるという。それには流石にお礼を言って受け取ったらしい。

さっきの理論だと、クラスの皆はカレンの事を崇めてるつもりにも聞こえるが……気のせいだろうか。

「かわいい動物に餌を与える感覚なのかしら」

「ちょっとは遠慮しなよー」

「エ～～～」

綾と陽子が言うと、カレンは不平を表す。

「そうだな。もらい過ぎな気もするから少しは遠慮した方がいい」

「デモ、ミンナトテモ優シイ、私嬉シイ、ミンナハッピー！」

「わざとらしい片言！」

普段から少し片言気味だが、これはいかにもカレンがわざとらしく言った片言だ。

「カレン……何か日本に来て太った……？」

そこへ、俺達の様子を見たアリスがカレンに向かって言う。

俺は元々の彼女の体型を知らないし女子の体重を聞くのは禁句だが、前のカレンを

知ってるアリスなら、きっと分かるのだろう。
「エ!!　そ……そんなバカナ!?」
太ったと言われてガーンとショックを受けるカレン。
「毎日それだけ食べれば太るよ～」
そりゃあ、あれだけお菓子とかパンを普段からもらって食べるのは、流石にな。
「カレン、これを」
と、そこへ忍が何かを持ってカレンに渡す。それは、首からぶら下げるボードらしきもの。
カレンが実際にぶら下げると、何か文字で書かれているのが分かった。
【食べ物を与えないでください☆】……と。
「犬かよ!!」
俺ははっきりそう言った。

☆☆☆

カレンの体重を量りに、保健室にやってきたわたし達。
あ、でも今はケンはいないよ。何かお腹を痛めたみたいで……心労、かな？　なら尚更保健室に来る必要があるんじゃないかな、とも思うけど。
「まずは今の体重を知る事が重要よ！　私から量るわね」
どこか自信がありそうなアヤが、意気揚々と体重計の上に乗る。
「……あら？」
アヤが体重計の上で呆然とする。どうしたんだろ？
「えっと……この体重計壊れてる？」
「え？　そんな事ないと思うけど……」
アヤの言葉にヨーコがきょとんとした表情を浮かべる。確かに体重計はちゃんと量れてたし問題ないと思うけど……。
「じゃあ服のせいね……」
アヤが「そうよ絶対そうだわ」と何かまずいものを見たかのように言いながら制服を脱ごうとする。
「現実を見ろ！　そして脱ぐな！」
……どうやら増えてたみたい。
アヤががっかりと項垂(うなだ)れている中、今度はカレンが体重を量る。

「あ、変わってない」
　日本の玩具であった”やじろべえ”みたいに両手を広げているカレンがそう言った。
「本当にー？」
　わたしは嘘を言ってるんじゃないかと疑いの声を上げる。
「もーっアリスが太ったなんて言うカラー」
　ほーっと安堵の息を吐くカレン。
「何キロ？」
「えぇ～教えるのデスカ？」
　綾がカレンの体重が気になったのか訊ねてくる。
「はずかしーデス」
「耳うちでも可！」
　やはり女性同士でも体重を明かすのは恥ずかしかったのだろう。カレンは顔をかぁーっと赤くしながらアヤに耳うちで言う。
「わああぁぁあああ（私よりもカレンの方が軽い）!!」
「アヤどこへ!?」
　アヤが泣きながらどこかへ逃げるようにして保健室を出て行った。
　それにしてもなんで泣いてたんだろう？

「これで今まで通りみんなから食べ物もらってもＯＫデスね～」
自身の体重に安心して喜ぶカレンだけど、それをわたしは良くないよと言う。
「遠慮は日本の心だよー。カレンも見習って！」
わたしが日本に来てよく見る光景、それはある人から何かを受け取って欲しい時、「そんなっ、お構いなく――――」といったような遠慮がちに受け取る瞬間。これがイギリスや他の外国ではあまり見かけない、遠慮するという行いが日本人なりの礼儀。わたしはそれに憧れを抱いており、同時に見習っている。
カレンにもその気持ち、少しでもいいから分かって欲しかったのでそう言った。
「お菓子ばっかりは身体に良くないし、明日のお弁当はわたしが作ってあげ――――」
そこまでわたしが言った瞬間、シノがわあーっと喜びの声を上げる。
「アリスのお弁当ですか？　私も食べてみたいです――！」
「！」
そんな事を言われたらわたし……わたし……！
「任せて！　全力で作るよ！　シノの為に!!」
急に明日が楽しみになってきちゃった。
「アリスー、私はー？」
カレンがそう言ってたけど、よく考えればケンのマムが毎日作ってくれるって言って

たっけ。それではまるでケンのマムが弁当を作るのをわたしのせいで無碍（むげ）にしているようだ。遠慮しとこう。

ちなみに、わたしの体重は増えてはいなかったが、減ってもいなかった。

つまり変わらなかったという事。

☆☆☆

「ダイエットしなきゃ！」

保健室を出てから開口一番にわたしは言う。

「え～っ？　そこまで太ってないデスよ」

「体型維持のためだよっ」

カレンがそんな事を言ってるけど、人間というのはいつ太ってもおかしくない。誰かに「太った？」って言われた時にはかなりショックを受けるかも知れない。

そのために体型を維持する必要があった。

「私ダイエットってした事ないデス」

「うーん、誰か参考になる人いないかなー」
対象になる人を探しながら職員室に向かう。ちょっとした用事ができたのだ。
「「失礼しますー」」
二人して一声かけながら職員室に入ると、椅子に腰掛けて足を腰の高さまで上げているカラスマ先生がいた。
よく見ると耐えているのかプルプル震えている。
「先生……」
「キャ――――ッ!?」
わたしが声をかけると、ドキッとした先生が悲鳴を上げた。
……対象になる人、すぐに見つかったね。
どうやら先生もダイエットをしているらしく、お腹を凹ませるためにさっきの事をしていたらしい。
わたし達は先生にもダイエットのコツを聞いてみる事に。
「ダイエットに無理は禁物なのよ～」
「そうなんデスか？」
「ええ。気付いた時に身体を捻(ひね)ってみたり、足を高く上げてみたりー……最初はそんな軽いものでいいと思うわ」

「なるほど、確かにそれなら簡単そうデス」
カレンが納得する。確かにいきなり無理をしちゃうと却って危険になるって聞くからね。
「でも先生はお尻が大きいデスネ」
チョットだけーってカレンが言うけど流石に今のは失礼だと思う。先生も今の一言でショックを受けていた。
ここはわたしがフォローしないと。
「もーっ、カレンったら失礼でしょ！　そこは安産体型って言うんだよ。今度からそう言うべき！」
女性に対してお尻が大きいという表現は好ましくないから、日本に来てわたしが適切な表現として学んだ言葉。これなら流石に大丈夫だと思う。
すると先生は泣きながら言った。
「そっ、それもどうかと!!」
あれ？　違ってたみたい。

☆☆☆

「陽子はよく食べるけど体型は変わらないわね」
アリス達が保健室から帰ってきた後、綾が言う。
ちなみにさっきまでの俺はというと、急に腹を下したのだ。解せぬ。
「ほぼ毎日走ってるからね！」
そうだ。前にも言っていたが、陽子は日々の習慣としてランニングをしていると聞いている。
それを続ける根性があるというのは流石だと思う。
「食べてもその分動けばいいんだよ」
「じゃあ私もヨーコと一緒に走るデス！」
陽子の言葉にカレンが食いつく。
食べても運動すればいい。その例えは単純だけど結構効果があったりするから不思議だ。
「どのくらい走るのデスカ？」
「えーっと、ランニングで十キロ程度だけど」
「じゃあ私は十センチ程度……」

「それじゃ無意味だ！」
カレンの諦め発言に俺がツッコむ。十センチって……下手すると一歩ですらないぞ。
「でも、女の子はちょっと太ってるくらいがいいんですよー、前にお姉ちゃんが言ってました」
そこへ、忍が笑顔で言う。
彼女が何やら勇さんから言われた言葉があるらしい。
『私はお姉ちゃんみたくなりたいです！』
『えー？　忍はそのままでいいわよ。丸くてぼんやりした所とか。十分可愛いじゃない』
――――と。確かにそれを聞くと、勇さんが体型を気にしていないというのが分かるが……。
「『あんたが痩せたらやつれたカピバラみたいよ』ってー」
「それってつまりカピバラって事じゃ……!?」
酷いですカピバラなんて、と笑う忍に対して綾が戦慄する。
勇さん……忍に対してカピバラみたいに思ってたのか……。
「こう見ると健って、割と見た目がっちりしてるわよね」

ん？　綾がそう言ってくるけど、周りからの見た目ってあまり気にした事がない。
「だよなぁ。そこは流石は男子って所かな」
陽子も同意する。
「そうか？　あんまり気にした事なかったが……」
そもそも男女で身体の造りが違うからそう見えるだけかもしれない。
「デモ腕、硬いデス」
すると、カレンが腕を触ってきた。
「ホントだー」
アリスももう片方の腕を触ってくる。
「んーまあ陽子程じゃないけどそれなりに鍛えてるからな。無理しないで筋トレしてるってのもあるかも」
身体がなまってると思ったら軽い筋トレなどをしているから、今の身体があるのかもな。
「なんだよ健、鍛えてるなら私にも言ってくれればいいのに」
陽子が笑いながら俺の肩を叩いてくる。
「いやでも、俺毎日ランニングできるぐらいの体力は流石にないぞ」
家の事もあるし、毎日十キロ走れるかと言われれば流石にキツいものがある。

「いやいや、健は男なんだから私の倍走ってもらわないとー」
「それはいくら何でも無茶ぶりだ！」
合計二十キロ……男の俺でも死ぬんじゃないか？　その翌日筋肉痛じゃ済まなそう。
「「頑張れケン！」」
「なんで走る事になってんの!?」
カレンとアリスにこれからやると言わんばかりの物言いにツッコんでしまった。
やっぱこれ死ぬかも。

☆☆☆

「今日のお弁当はアリスが作ってくれましたー」
次の日のお昼休み。忍が弁当を開けながら言う。
何でも、アリスが昨日忍のために弁当を作ると言っていたらしく、忍のお母さんと同じ時間の朝五時に起きたという。
……五時起きと聞いた時にカップラーメンでいいかなとぼやいていたが、そこは割

愛。

「おっ、何だキャラ弁か？」

陽子が言う。朝早くから起きて登校時刻ギリギリまで粘っていたとの話だから、確かに何の弁当を作ったのか気になるな。

中身を見ると、変わった弁当になっていた。

ハンバーグや卵焼きなどといった至ってシンプルなおかずはまだいい。

問題はご飯の部分。まるで漢字の”米”の如く海苔で表現されていた。

「青い部分が表現できなかったけど、一応イギリスの……」

あ、そっか。アリスの言葉で分かった。青い部分やイギリスの単語で彼女が何を表現したかったのかが理解できた。

「米」

「米？」

「米！」

だが忍、綾、陽子はパッと見で判断し、たった一文字の単語を言う。

『米の上に米!!』

そして三人は揃って言い放った。

「え、いや、あの……」

アリスは戸惑いながら言い淀む。
「いや、これ”米”じゃなくてイギリスの国旗をイメージしたものだと思うな」
流石に見兼ねた俺は助け舟を出す事にした。
「イギリスの国旗……あっ」
俺の言葉にいち早く綾が気付いたようで、思い浮かべた表情を出す。
「イギリスの国旗ってどんなんだったっけ？」
「さあ……？」
「お前らマジで言ってんの？」
陽子と忍がまるでバカ丸出しの事をおっしゃり、ツッコんだ。
特に忍、お前イギリス行ったんじゃなかったのかと疑ってしまう程。
「とにかく、そうだろアリス？　これは”米”じゃなくて、イギリスの国旗をモチーフに海苔を詰めて作ったって事で――――」
俺がそこまで言うと、アリスが涙ぐんでいた。
「なっ、えっ!?　あれ、俺てっきりそうだと思ったんだが、違った!?」
まさかこれも違うのかと思い、慌ててしまう。
「うぅん、違わないよ。ケンが当ててくれて嬉しかっただけだよ」
アリスが指で涙を掬いながら言う。今のは少し感極まっただけの涙だったのか。何

にせよ、良かった。
「そうだったんですか!? ごめんなさいアリス！ 私勘違いしてしまって」
忍が慌てて謝る。
「別にいいよ。一応イギリスの国旗のつもりだけど、表現が難しかったし」
「イギリスの国旗難しいよなー。確か赤、白、青使ってるんだったっけ？ あれを精密に作るとなると難しい気がする」
「やっぱりそうだよねー」
てへへとアリスが笑う。まあ彼女の言葉が無かったら、俺も米としか分からなくなったかもしれないからあまり強くは言えんが。
「なー綾ー、イギリスの国旗ってどんなのだっけ?」
「陽子は社会の教科書を見直しなさいっ」
約一名、未だに分かってなかった者がいたらしい。